

八幡前田教会誌「ぶどうの木」特別号

私の天路歷程

日本キリスト教団

八尾教会牧師

東

俊

郎



八尾教会で説教

義を追い求め、

主を尋ね求める者よ、

わたしに聞け。

あなた方の切り出された岩と、

あなた方の掘り出された穴とを

思い見よ。

(イザヤ五・一)

卷 頭 言

基督伝道隊八幡前田教会の「ぶどうの木」は、昭和四十年に第一号が発行され、不定期ではあります。今は概ね年一冊づつ発行している、教会員の証詞などを掲載したお交わりの教会誌です。

日本キリスト教団八尾教会で主の御用に當っておられる東俊郎先生に、「ぶどうの木」の原稿をお願いしますと、八尾教会の週報を送ってくださいました。それに「牧師室から」の記事がありました。ご多忙の中で原稿用紙に書く代わりにお送りくださったのだと思います、それを整理して読んでみると、まことに東先生の天路歷程であり、使徒行伝であると思いました。そういうことで、結局「ぶどうの木」の特別号として発行することになりました。

人生に行き悩んでいた東兄を愛して尊い救いに与らせ、ご自身の証人として召し、用い給うた主を賛美するとともに、喜界島、別府市、日出町、八尾市へと御導きに従って歩まれた東俊郎先生の今後の歩みのうえに、主の豊かな祝福を祈ります。

一九九五年十一月十五日

私の天路歷程

△教会週報「牧師室から」より▽

日本キリスト教団八尾教会牧師 東 俊 郎

はじめに

朝の明るい日差しの中で、牧師館の庭の藤の若葉がやわらかに光っている。教会員の方の暖かい、細やかな配慮がいつぱいの牧師館の書齋で、私は今、過去のあの暗い日々と神の導きを思い返している。

もし、教会に導かれていなかったら、私という人間は、今ここに存在していただろうか。いや、私のような愚かな人間であればこそ、神は放っておけずここまで支え導いてくださったに違いない。

「みまえに きよく傷のない者となるようにと、

天地の造られる前からキリストにあつて

わたしたちを選び……」（エペソ一・四）

実に感謝すべきかな、ただ主イエスのあわれみの故に、私は今ここに存在しているのである！

第一章 八幡製鉄時代

入社して

九州一のマンモス工場である。従業員三万五千人、敷地に接して国鉄の駅が三つある。工場内に敷かれた鋼材運搬用貨車の線路をつぎ合わせると、九州を半周すると言われている。学窓を巣立ち希望に胸ふくらませて、八幡製鉄株式会社に入社したのは昭和二十三年の春であった。

私は小さい頃から機械いじりが好きであった。時計やラジオ等を分解して、結局壊してしまい、幾度父親から叱られたことであろうか。旧制中学を卒業して工科に進んだ私は念願の仕事につく一社会人となつて、人生の第一歩を歩み出し始めたのである。

八幡製鉄の煙突は、七色の煙をはき出すと言われる。溶鉱炉、コークス炉、平炉、均熱炉等からそれぞれ違った成分の煙が排出される。朝ごとに私はその煙を見上げ、この会社における働きが生涯私を支え幸せに導くことを疑わなかった。

製鉄所には、自殺に格好の場所が多々ある。溶鉱炉から出たドロドロの銑鉄の「灼熱の湯」に身を投げた人があつた。役付きになつたばかりの朗らかな人が六千六百ポルト

の高圧電線のジスコン・スイッチに手をかけて、この世を去っていった人があった。大学を卒業したばかりの若人が平炉の扉が開いた瞬間に、燃えたぎる炉の中に飛び込んで青春を失った人がいた。彼らの悩みを知るよしもない。しかし、私は私なりに幸せであるべき若き生を、無為に過ごした者の一人であった。

仕事にも慣れ、会社と独身寮の間を毎日往復していた私は、ある日ふと考えた。一カ月前の私はどうだろう。一年先そして十年先もやはり同じことを繰り返しているのではないだろうか。三万五千人の中の一人の人間として、私という存在は一体何であろう。私は何のために生きているのか……。寮の昼に寝転んで天井を見上げ、私はうつうつとしてこの思いにとらわれ続けた。

空しい人生―虚無感ほど人を無力にするものはない。生きる目標を見い出せない私の心の中には、いつも大きな空洞があつて、そこを冷たい風が飄々と吹き抜けていた。現実の暗い不安な生の中で、人は一体何を考えて生きているのだろうか。求めても求めても心の空洞を満たす何物をも得ることが出来なかった私は、結局、安易な生き方に身を沈めるようになった。酒におぼれた。借金をして競輪に狂

った。ダンスホールで夜通し踊り明かした。終電車が通ったあとの八幡の夜の町を、重い心を抱きながらさまよい続けた。

そしてある日、私は酔っ払って高い崖から転落し、気を失った……。

荒れた生活

気が付いた時は寮の部屋に寝かされていた。腰に鈍痛があり、頭には包帯がぐるぐる巻きつけられていた。崖から落ちたあとの記憶は全くない。ひどくみじめな気持ちに押しつぶされて、私は布団の上でもだえていた。私一人、皆から取り残されたような淋しさに耐えられなかった。机の引き出しから手鏡を出して自分の姿を見た。そこには目と口だけが残された顔があつた。不思議に頭の痛みはなかった。私は自分の顔に向かって毒づいた、

「俊郎、お前のような殺潰しは死んでしまえ」

目は心の窓と云われる。人生が全く空しく思われ、何をしても何を求めても心の空洞を満たすことが出来なかった私の心は荒み切っていた。その目は光を失い、殺伐とした心を写していた。

夜勤明けのある日、私は居酒屋で酒をあおり、行きつけのバーの二階に上がっていた。案の定、そこでは常連のホステス達が車座になって花札を楽しんでいた。

「俊ちゃん早くおいでよ」。誘われるままに一座に加わった私は、その日もまた所持金を全部使い果してしまった。

「踊らんね」。なじみのホステスに誘われた私は、りんごをかじりながら階下の狭いホールでチークダンスで気を晴らしていた。ふと入口のドアを見ると少し開かれた隙間から珍しそうにこちらを見ている子供の顔があった。私は妙に腹が立って一喝すると子供は泣きながら逃げていった。かわいそうにと思う心すら、その時の私にはなかった。

「目はからだのあかりでいる。だから、あなたの目が澄んでおれば全身も明るいであろう。

しかし、あなたの目が悪ければ全身も暗いであろう。

だから、もしあなたな内なる光が暗ければ、その暗さは、どんなであろう」（マタイ六・二三―二三）

その暗さはどんなであろう―光を見いだすことのできなかった私は、明るい真昼間でも闇の中を行方も知らずさまよい歩く日々であった。目は常にするどく尖り、子供たちを恐れさせた。その目はまた、町の暴力団の人たちとのい

ざござに巻き込まれる原因ともなった。

夕闇が迫り、ネオンがまたたき始めると、私はじっとしている事が出来なかった。静かな所に一人でいるのが耐えられなかったのである。結局アルコールの力を借りるより他なかった。韓国人の部落に入りこんで、どんぶりでごぶろくをあおった。密造酒を詰めた一升瓶をぶら下げて電車に乗り込み、座席にあぐらをかいてラツパ飲みにした。泥酔して道路に倒れ、覚めた時は朝の出勤の人達の足が目の前をあわただしく行き交っていた。恥ずかしい気持ちは起こらなかつた。深酒が体に悪いとも思わなかつた。どうなっても良かつたのである。

ある夜、暴力団の人達の争いの中に私はいた。何時どうしてそうなつたのか分からなかつた。突然両腕が二人の巡查によってねじ上げられ、ぐいぐい引つ張っていかれた。

「その人はけんかを止めようとしてたんよ」女の人の声だけががすかに記憶に残った。無性にのどが渴いていた。留置場の鉄格子をゆすりながら私は叫び続けた。

「水をくれ！水をくれ……！」

あの時のみじめな自分の姿、そしてやけるようなのどの渴きは生涯忘れないであろう。警察署は決して水を飲ませ

てはくれなかつた。

今、わたしは自由に水を飲むことができる。しかし、この水はやがて渴きをもたらすであろう。

主イエスは云われた、「だれでもかわく者は、わたしのところにきて飲むがよい」(ヨハネ七・三七)

私が叫び求めるべき水こそ、聖霊の泉であることを私は知らなかつた。心の渴きをいやし、喜びに満ちあふれさせる驚くべき世界を知らずして、私は苦悩のうちにさらに自らを虐待し、泥沼の中にのめり込んでいったのである。



放蕩時代 (シャツとズボンと傘しかなかった)

教会へ

暗い部屋で電灯もつけずに妹は質札を数えていた。質札

が何枚あったかは記憶にないが、相当数あったことは確かである。独身寮時代、ありとあらゆるものを入質した。時計、洋服、靴、人からもらった望遠鏡、そして布団まで質に入れて、その年の夏はズボン、シャツ、下駄、傘だけしかなかった。何しろ働いて得たサラリーは全部放蕩のために使い果してしまい、溜まるのは借金だけであつた。製鉄所の門から寮までの間の酒屋、飲み屋にはほとんど借金があつた。それに今日というサラリーローン、友人からの借金、それに質札である。

妹は私の荒れた生活と山のような借金を知って溜息をついた。そして口から出た一言が、私の人生を一八〇度転換せしめたのであつた、「兄さん、教会へ行こう……」。

妹は一度も教会へ行つたことがなかつた。郷里の大分県の田舎で家事手伝いをしていた妹に、出てこないかと話を持ちかけたのは私の方である。借家でもして妹と一緒に生活を始めたなら、気が紛れて少しは人間らしい生活ができるのではないかと思つたからである。幸い長屋の一部屋を見つけて妹との新しい生活が始まつた。妹がなぜ教会へ行こうと言ひ出したのか、それは今だに分からないままである。

私は妹に答えた、「束縛されるのはいやだ。教会へ行つ

たら酒も飲めなくなるし、賭事だつてできなくなるじゃないか」。全く教会という所を知らない人の言葉である。

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放してくださったのである。だから堅く立って、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない」

(ガラテヤ五・一)

教会に集うこと、神の言葉に従うことの中に真の自由がある、ということを知らなかつた。私が好きなときに好きな事をする―それが自由だと私は思っていた。だから好きな酒を自由に飲み、ダンスで夜通し踊り明かして満足する自由を、私は求め続けたのである。

ある日、職場の上司が「東君、君は勤務の面では別に言うことはないが、深酒をする事だけは止め給え」。私の体を心配してくださつての忠告である。その時私はすかさず答えた、「私が私の自由で酒を飲み、好きなことをするのに何の文句があるのですか」と。

今考えてみれば、私の生き方は決して自由などとは言えるものでなかつた。好きで飲んだ酒、大穴を当てようと通つた競輪場……しかしし残るのは空しさと借金だけであつた。どうなつても良いと思ひながらも、やはりこれから先

の事を思わざるを得ない焦り……、人が生きるということには、それなりに意義がなければならなかつたのである。生きる意義を見いだせない故に、自分をごまかして生きる。しかしどんなにごまかしても、決して解決には至らないことを、私は痛いほど思ひ知らされていたのであつた。心の空洞を満たすために、ありとあらゆる方策を勞した私であつたが、結局得たものは空しさであり、その求めたものによつて自らをがんにがらめに束縛してしまふ奴隷のくびきなのであつた。

二人は午前六時の八幡前田教会早天祈祷会の場にいた。急ぎ立てられるように妹に引つ張られて行つた、初めての教会の集会である。私は声をかけられた時にすぐに逃げられるよう、会堂の一番うしろの席に半分お尻をかけるようにして座っていた。牧師の話は何が何だかさっぱり分からなかつた。今でもその記憶は全くない。しかしそつと周囲を見回した時、そこに集うている人々の目に出会つた。何と、その目は輝いていたのである。私の目(その時、私は自分の目の表情を知らなかつた)との違い、これこそ私が経験し得なかつた驚くべき世界であつた。

私はとつさに思つた、「ここに何かがある……私が生涯

求むべきものは、ここにあるに違いない……」。

「求めよ、そうすれば与えられるであろう。探せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、開けてもらえるであろう」(マタイ七・七)

渴きを知らない者は求めることができない。しかし、求める者が、その求めるべき確かな場を見出した時、必ずその答は間違ひなく与えられるのである。

暗黒の中に一条の光を見出した私は、その光に向かっての第一歩を踏み出し始めたのであった。

光に向かつて

「東さんは、地獄から出てきた鬼のような顔をしておられた」、教会の先生の後日談である。教会の一番後のベンチに座っていた私が、そんな顔をしていたとは思ひもよらぬことであつた。私はただ「ここには何かがある」その「何か」に必死にすがりついていこうとしていただけである。「とにかく何でもよいからお祈りなさい」と先生は言われた。お祈りの方法も知らず、そもそもお祈りの何であるかを全く知らない私に、無責任なお言葉ではある。

私は先ず「神様、お金をください」と言ってみた。そし

て「今度兄が来ます。薬局をやつていて儲かっているようです」と付け加えた。さらに確かめるためにトランプを切つて「持つてくるか、持つてこないか」と占つた。占いの答はどうなつたか忘れたが、妹は横目で私のしぐさを見ていた。後日、妹の日記を盗み見したら、「兄の信仰は外面的なものである。兄は神様を利用している」と書いてあつた。待つていた兄は菓子折りだけを置いて帰つていった。

「なんでも祈り求めることは、すでになんえられたと信じなさい。そうすれば、その通りになるであろう」

と主は言われた(マルコ十一・二四)。トランプで占つてみるような祈りは全く信じていない祈りである。まして自分が苦勞もせず、ただでお金をせびるような祈りは、祈りではない。私の祈りに対する神様のお答えは「働いてお金を返しなさい」であつたことが、ずっと後になつてから分かつた。

妹は靴屋の店員をして、私の借金返済の加勢をしてくれた。夜も遅くまで働いたので彼女は腰を痛めてしまった。だから、今でも私は妹に頭が上がらない。

私は借金返済の方法を必死で考えた。何しろ山のような借金なので、とても数か月のサラリーを当てても間に合わ

ない。先ず給料日に会社の門で借金取りに捕まえられないようにしなければならぬ。そのためには先手を打つ必要がある。私は飲み屋を一軒一軒廻った。

「私には今、全部でこれだけの借金があります。お宅に一度に返したら他の店が怒ります。だから月々これだけづつにしてください」。誠意は通ずるものである。ほとんどの店が承諾してくれた。

借金を踏み倒しても平気であった私に、このような心を起こさせてくださったのは、他ならぬ神であったのだ。教会に通うようになってから、徐々に私の心は平安を取り戻していった。なぜか分からぬが、嬉しくなってくるのである。ぼつかり開いていた心の空洞を埋めるために、以前はアルコールの力を借りていたが、少しづつその空洞は「喜び」というもので埋められていった。そして後には、このアルコールを少しも必要としなくなったのであった。

ある朝、私は妹に云った、「今日会社から帰って裏山に折りに行く」。妹はげげんそうな顔をした。また、神様を利用する折りかな、と思つたのかもしれない。しかし私は真剣であった。どうしても神様という方に直接出会いたかつたのである。

美しい夕暮であつた。私は「神様！神様！」とやみくもにその名を呼んだ。次の言葉が出てこない。

「神様を見たいのです」と独り言のようにつぶやいた。ふと足許に目をやると、小さな一輪の花が風にそよいでいた。その時、突然大変な感動が走り抜けた。花はこんなにも美しかったのか！

それまで、花を見ても何の感動も示さなかつた私であつた。それどころか、花壇の花を平気でちぎり、桜の枝をへし折つても、何の痛みも感じなかつたのである。

「野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい」(マタイ六・二八)後で知つた聖書のこの言葉が、何も知らなかつた時に先に与えられたのであつた。

私はまじろぎもせず、その花をみつめていた。そしてその時、この花を造つた神様の存在を、はつきり確信したのであつた。神は常に先手を取り給う。折りを知らない私に、先に手を伸ばしてくださいだったのである。それからの私は、神の存在を意識して、この方に賭ける折りの世界へと導かれていだったのであつた。

何か分からないけど嬉しくて仕方がない。光のない暗い泥沼の生活を送っていた私、悩みを打ち明けける相手を持たなかった私が、その相手を見い出したのである。花を見て創造主を知った私は、この神様というお方の存在を確信して問題を持ち出し、苦しみを打ち明け始めたのであった。

「神はあなたがたを顧みて下さるのであるから、自分の思い煩いをいっさい神にゆだねるがよい」

(第一ペテロ五・七)

思えば私達は、バスに乗っていないながら、荷物を背から下ろさない人のようではなからうか。神の手の中にありながら、色々な荷物を勝手に背負いこんでしまうのである。

重荷を下ろす術を知った私は、払いこなせない借金のことも、自分の愚かな弱い性格のことも、すべてをおまかせしてしまつた。それ故に心は軽く、何はなくとも嬉しくなつてしまふのであった。

ある日、歌を歌いながら会社からの帰途、子供たちが大勢なわとびをしたり、チャンバラごっこをしているのを見た。その時、思いもよらぬ考えが私の心に浮かんだ。日曜学校の分校を私の借家で始めたら……？

当初はそんな思いを打ち消した。何しろ自分自身なつて

いない人間なのに、そんな大それたことをできるはずがないと思つたからである。しかし、日が経つに従つて分校を開く思いは、不思議に募るばかりであつた。ある時、妹に相談すると、妹は目を丸くして驚いた様子であつた。しかし、その返事がまた、私を驚かせた。「兄さん、私も考えていたのよ」。

妹は早速オルガンで、こどもさんびかの練習を始めた。

このオルガンは、小さい頃から家にあつたものを、妹が持つてきていた古くて小さなベビーオルガンであつた。

分校の名称は牧師と相談して、八幡前田教会花尾分校とし、毎週木曜日の夕方、牧師に来ていただくことにした。木曜日なので、あとから子供たちが木曜学校と呼ぶようになった。

「紙芝居や神様のお話をしてあげるから、今度の木曜日の午後四時に私の家に来なさい」

私は近所の子供たちにふれて廻つた。そして当日、何人集まるか胸をときめかして待つていたが、集まつたのは五く六人で、がっかりしてしまつた。

牧師は「幼な子らをわたしの所に来るままにしておきなさい。止めてはならない。神の国はこのような者の国であ

る」(マルコ十・十四)の聖句を引用して、「分校を開いたのは、神の御心だから必ず祝される」と確信をもって、私共に希望を与えてくださった。

牧師が云われたとおり、次の週は十数名、そして次の週は二十数名と、だんだん子供たちの数は多くなり、遂には八十名程にもなつて、とても一度では小さな部屋に納まらず、午後四時と五時の二組に分けて集会を行なうまでになつた。

ここで一つの問題が起こつた。何しろ大勢の子供たちが一堂に会するので、またたく間に畳がだめになつてしまつたのである。私は妹に相談して畳の代わりに板の間にすることにした。しかし、正座する子供たちの足が痛そうなので、思い切つてベンチを八脚こしらえた。五人座つて四十名づつの二回の集会である。このための費用は全部献品したので、夏のボーナスと給料の大部分を必要とした。

ある土曜日、妹は「兄さん、これだけしかない」と財布を見せた。中には五円玉が一つあるだけである。次の給料日まで一週間、そして家には米も味噌も底をついていた。「祈ろう」。二人は神様にお願ひした。この時の祈りは、あの「神様、お金をください」の祈りではなかつた。

「子供たちのためにお金を使いました。あなたはご存じです……」真剣な祈りであつた。その日は夕食も食べられずに寝た。

日曜日、二人は空き腹を抱えて教会に行った。礼拝が終つても神様からのお返事はない。二人は別室で折り続けた。突然オートバイの音と共に「東さんという方はおられませんか」という声。教会の玄関に出てみると、分校の子が助手席に乗つてにこにこ笑つている。大分の田舎の母がお米を送つてくれたのである。教会の先生は「東さんの田舎のお米はともおいしそうですね。分けてください」と半分買い上げてくださった。次の給料までの一週間、思いもよらぬ方法でお米とお金が与えられたのである。母が私共のためにお米を送つてくれたのは、後にも先にも、この時限りであつた。

日曜学校(その二)

「東さん、仏壇を設計してください」

現場の三好さんが突然設計室に入って来た。三好さんは工務の仕事をしていて、何となく私に近づきたがつていて人であつた。どうして私のような者と親しくしようとして

いるのか分らなかつた。それまでの私は、私の顔を見て子供たちが逃げる状態で、飲み友達以外に親しい友は一人もいなかった。恐らく、いつも嬉しそうな顔をしている私を見て、不思議に思っていたのであろう。

「三好さん、私は今教会に行つてます。仏教の事は何も分りません」。

私の返答に、三好さんは、黙つて机のうえに置いてある聖書をパラパラとめくつた。

「これは何の本ですか？」。

「神様のことが書いてある本です」。

その頃私は、皮の表紙の大型聖書をいつも持ち歩いてゐた。読んでも何が何だかさっぱり分からなかつたが、持つてゐると心が安らぐのであつた。

その時、私にある考えがひらめいた。

「三好さん、お宅で子供会をしませんか？」

三好さんは、びっくりして私の顔を見た。そして嬉しいことを言うのである。

「うちの子供は親の云うことを聞かん。東さん、教育してください」。

神様は、いつ、どこに、求道者を備えておられるか分か

らない。

「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまで寛容な心でよく教えて、責め、

戒め、勧めなさい」(第二テモテ四・二)

私達は人を誘うのに、余りに消極的ではないだろうか。こんな驚くべき宝を手に行っているものが、それを他の人に教えないで許されるものであろうか。

それから数日後の火曜日の夕方から、三好さん宅の子供会が始まつた。子供会には私と伊規須さんという友と二人で責任を持つことになつた。この人は、後に私の妹と結婚し、現在は戸畑の教会で主の御用に当たつてゐる。三好さんは、子供会があつてゐる間は、外に出てパチンコをしてゐた。子供の教育だけで満足だったのであろう。子供会は三十名程の集いとなり、花尾分校と共に日曜学校の分校としての機能を持つようになつてゐた。

三好さんは胃があまり丈夫ではなく、時々痛むと訴えておられた。ある日、私は教会に行つて祈つてもらふよう勧めた。当時、教会では病氣の人のために、礼拝時に按手の祈りをしてゐた。

三好さんはご利益がいただけるのならと、次の日曜日の

教会にやってきた。勿論按手の祈りを受けたが、その時限り胃の痛みは不思議なようになくなってしまった。後に私と妹と伊規須さん、そして三好さんは同じ日に洗礼を受けたが、三好さんは現在に至るまでたいへん健康で、私の良き信仰の友となっている。神様はえらいことをなさるお方である。



前田教会の前庭で皆と遊ぶ

特別伝道集会でのあかし

八幡市内教会連合の伝道集会が、八幡市の中心にある中央広場で行なわれることになった。私たちは路傍伝道の時に、道行く人々にビラを配った。路傍でマイクを使って先

生が話をされる時には、私はいつもそと抜け出し、会衆の中に紛れ込んでお客さんの顔をしていた。何だかはずかしかったのである。

伝道集会の当日、五百人くらいの人が集まった。次から次へと市内の牧師や信徒の人々が証を始めた。うちの教会の先生が話をした後、いきなり私にマイクをつきつけて先生が言われた、「次は東さんの番です」。

生涯を通してあれ程驚いたことはなかった。生れつき私は口下手で、一対一でも思うように話すことができなかった。まして大勢の会衆を前にして、どうして話が出来ようか。マイクを手にして壇に上がるには上がったが、足がガクガクし、冷汗が脇の下から流れた。会衆の顔がもやのようになりゆるら動いていた。以前の私ならそれでおしまいであった。しかし、その時は違っていた。祈ることを知っていたのである。私は思わず「神様、助けてください」といった。すると不思議なことに心臓のどきどきは止まり、会衆の一人一人の顔が見えてきた。そして何と、立て板に水を流すように、証の言葉が次から次へと私の口からほとばしり出たのである。十分ばかり夢中で話をした。何だか違う自分を他の場所から見ているようであった。

「彼らがあなたがたを引き渡したとき、何をどう言おうかと心配しないがよい。言うべきことは、その時に授けられるからである」(マタイ十・十九)

それは私にとって、大変貴重な体験であった。「御言を宣べ伝えなさい」と命じたもうお方は「何をどう言おうかと心配しないがよい」と約束しておられたのである。この命令にともなう約束によって聖書は成り立っていることを、私は多くの体験を通して知っていくのであった。

聖書を通して聖別

私は、どうしても神様についてもっとも知りたいたい、という願いを持つようになった。

「とにかくお祈りしなさい」と言われた先生は、同時に「分かっても分からなくてもよいから、聖書を通読しなさい」と勧められた。常に聖書を持ち歩いていた私は通勤の電車の中でも、職場での休憩時間でも、また夜寝る前の床の中でも聖書を読むように務めた。旧約の創世記から出エジプト記の前半までは面白く読んだが、出エジプト記の後半から申命記の間の律法の書は退屈で退屈で、読むのが苦痛であった。殊に寝る前に読むとすぐに眠くなり、私にとつ

て良い睡眠剤となった。

旧約を通して、天地万物を創造された主なる神については、そのまま単純に受け入れることができた。そして歴史の中に働かれる神、預言者を通して語られる神に胸を踊らせた。しかし、新約に入ると、マタイによる福音書の冒頭から出てくる片仮名の名前の行列に、先ずうんざりした。そして、イエス・キリストの出現。旧約の神は信じられるが、このキリスト・イエスとは何だろう……。

私は人となりたもうた神につまずいたのであった。旧約のモーセ、サムエルのように、あるいはイザヤ、エレミヤのように、直接神と語らうのでよいのではないか。なぜイエス・キリストなのか、どうしても理解できなかった。しかし「分かっても分からなくても通読しなさい」と言われた先生の言葉を信じて、私は読み続けた。

ある時私は、私のように熱心にお祈りをし、聖書を読む人が他にいるだろうかという、とんでもない傲慢な心も頭をもたげた。そして、私はまだ一度も集会を休んだことがない、日曜学校の分校のために熱心に奉仕をしているという、高ぶった思いにとらわれ始めた。

その時から、私の信仰は間違った方向へ歪み始めたので

あつた。

「わたしは万軍の神、主のために非常に熱心でありました」(列王記十九・十四)と云つたエリヤ、

「わたしは何カ年もあなたに仕えて、一度でもあなたと言ひ付けに背いたことはなかつた」(ルカ十五・二九)と
うそぶいた放蕩息子の兄(実は学者、パリサイ人のこと)
この高ぶつた姿勢こそ、神の前に大きな罪であつたのだ。

長い間、この姿勢が罪であることに気付かなかつた。私はこんな熱心に行なつて、確かに私の肉の誇りとなる。しかしその思いは、熱心でない人を知らずして裁いていたのである。

教会では毎年、元旦から三日間、午前十時、午後二時、午後七時半とぶつ通しの聖会が行なわれる。私はその聖会の時にも「どうか聖霊に満たされますように」と祈つていた。長い間この祈りは続けられていたのである。聖霊に満たされ、喜びと力に満ちあふれたいという願いは、私にとつて魅力であつた。例年、聖会の最後の集会では、三日間の恵みを証する時が持たれる。私は何を証しようかと考へていたとき、突然、思いもよらぬ心の声が響いた。

「お前は聖霊に満たされたいという願ひの底に、人から

熱心な人、信仰あつた人、愛の人と思われたいという心があつたのではないか」と。

人からすてきな人と思われたい：これはまさに「私」というものが前面に出てきて、神様を後に押しやつてしまつた姿勢ではないか。私は愕然とした。その時「おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」(ピリピ二・八)という、イエス・キリストが罪のあがないのために僕となつて人に仕え、生命を捨てられた新約の奥義を理解し始めたのであつた。

聖霊に満たされるということは、謙虚になつて他人に仕え、最後まで従順に神の言葉に従うということと同じであつた。私の心は喜びあふれた。その喜びはもはや自分のための喜びでなく、己れを空しくして神に仕え、他者に仕える者になりたいという、神から与えられた高い段階の喜びであつた。間違つた方向へゆがみつあつた信仰が正されたのは、やはり聖書を通読し得た恵みによるのであろう。

後に神学校の伝道旅行の時、四国のある教会の老婦人が「私は若い時から今まで旧約聖書を五十回通読しました」という言葉を今でも忘れることができない。

恋愛問題

「東さん、どうぞ」。職場の益田さんがお茶を持ってきてくれた。「ありがとう」と言つて、ふと彼女を見ると顔を赤くしている。私の心は騒いだ。私に思いがあるのだろうか。それから数日間、彼女の態度を観察すると、やはりどうも私に関心があるらしい。

教会に来る前、放蕩をしていた頃の私は、八幡の白川町の赤線地帯で数人の女性と遊んだ経験がある。しかし、信仰を求め始めてからは、心が満たされ、アルコールの助けもいらなくなつたし、同時に、そのような遊びと全く無縁の存在となつていた。ところが、職場の女性に関心を持ち始めてから、私の生活に変化が起きてきた。聖書を読んでも、お祈りをしていても、いつの間にか彼女のことを考えってしまうのである。

ある日、思い切つて彼女にデートを申し込んだ。彼女はいそいそと私についてきた。やはり私に関心を持つていたのだ。数回のデートを重ねるうちに、私の心はますます彼女にのめりこんでいった。そうなると私にとって、イエス様より彼女の存在の方が大切に思われてくるのであつた。私の属していた教会は大変厳格な教会で、恋愛などもつて

のほかの雰囲気があつた。それ故私は、彼女との交際のこととは全て内緒にしていたのである。

今の八尾教会ではそんなことは笑い話にもならないであろうが、当時の私にとつて、それは大変な罪のように感じられたのである。私は秘密を持つ身となり、教会では何食わぬ顔をしながら、陰でデートを繰り返していた。

二つの顔を持つつということは、大変苦しいことである。何もかも曝け出せばよいものを、教会では熱心な信徒と思われないという心から、私は悩み続けたのであつた。

このような状況の中で、私は彼女との交際を打ち切つてひたすら信仰に励もうと決心した。しかし、その決意とは裏腹に、どうしても私の心は彼女の方に傾いてしまふのである。今思えば、おかしな考え方である。なぜ彼女を信仰に導くことをしなかつたのであろうか。その時の心境は今だに分らないままである。

私は英彦山にある八幡製鉄山の家に二泊三日の宿泊を申し込んだ。山にもつて、これからの身の振り方を折つて示されようと思つたからである。会社の有給休暇を取つて私は山に登つた。そして三日間、聖書を読み、祈つた。

しかし、彼女の顔が浮ぶだけであつた。三日目の夕方、

私は「もう駄目だ！」と諦め、力なく立ち上がった。ふと目を上げると、英彦山の連山が夕日に美しく輝いていた。その時、突然御言葉が向こうからやってきた。

「わたしは山に向かつて目を上げる。わが助けは、どこから来るであろうか。わが助けは、天と地を創られた主から来る」(詩一二一・一)

私は内から力があふれるのを覚えた。解決できない山のような困難な問題が前に立ちふさがろうとも、天地万物を創造された方にあつては、乗り越えられないものがあろうか！ 私の口から賛美の声が上がった。喜び勇んで私は下山したのであった。

この時から私は伝導者になる決意を持つようになった。泥沼の生活から這い上がった経験を、一人でも多くの方々に伝えたい：：そういう願いがあつた。それで彼女とは別れた。淋しそうな顔をした益田さんであつたが、その後、彼女は良き伴侶を得て幸せに暮らしている。そして、私は三四歳までは独身で通したが、最もふさわしい現在の妻に巡り合えたのである。神様は先の先まで見通して、最善のことをしてくださつたのであつた。

「神は神を愛する者たち、すなわちご計画に従つて召さ

れた者達と共に働いて、万事を益となるようにして下さい。私達は知っている」(ローマ八・二八)



修養生生活

一九五八年一月、私は十年間勤めた八幡製鉄所を退職した。神学校は関西学院大学の神学部と決めた。前年の夏期伝道で、関学の相浦教授が神学生と共に来られて伝道集会を行われた。その時の説教に大変感銘したからである。

入学の準備には、勉強と心の備えが必要だと思つた。それで、私は教会堂横の小部屋に寝泊りして、伝道教会のお手伝いをさせてくださるようお願いした。先生は奥さんと

相談されて私の申し出を受け入れ、三度の食事も御家族と共に頂くことができるよう取り計らってください。今、牧師となつて思うに、よくもこの煩わしいことを引き受けてくださったものである。私が今日あるのは、実にこの先生の親身も及ばぬ理解と配慮によるのである。

新しい生活が始まった。北九州の冬は、やはり厳しい。毎朝六時の早天祈祷会に間に合うよう、私は四時半に起きてストーブに石炭をくべ、祈りの時を待った。それが終わると、先生の御家族と共に朝食を頂く。お子さんは小学校の息子さん二人と、娘さん一人、それに幼稚園の息子さんである。食事の後は会堂と牧師館の徹底した掃除をする。当時の八幡は製鉄所の煙突の煙がものすごく、きれいに拭いてもすぐに塵がたまる始末である。掃除が終わると、牧師御夫婦と私の三人で、会員名簿を前にして一人一人の名を上げて祷告する。

「そこで、まず第一に勧める。すべての人のために、王たちと上に立っているすべての人々のために、願いと祈りととりなしと感謝とを捧げなさい」(第一テモテ二・一)と勧められているように、とりなしの祈りは信仰生活に欠くことのできないものである。祈って訪問した場合と用事

ついでに訪問した場合と、相手の受ける影響は大違いであることを、今でもしばしば経験している次第である。

教会の集会では日曜学校の教師、ジュニアクラスの礼拝の奨励、そして時々祈祷会の奨励をさせて頂いた。牧師の礼拝説教はすべて速記で記録し、それをガリ版で切つて、印刷して教会に来ることができなかった人たちを訪問して届けるのである。

忙しい仕事の合間に、私は英語の勉強をした。旧制中学時代は戦時中で、ろくに英語を学ぶ機会がなかった。何しろポケットは人物入れV、シャツはA下着Vと言わせられた時代である。それに中学三年の夏から学徒動員で軍需工場で働かねばならなかった。そして終戦の年は、四年生と五年生の同時卒業である。私は四年卒で鹿児島工業専門学校(現鹿児島大学)に入学した。入学の年の八月に終戦となる。鹿児島島の学校でも、英語は主として工学関係のもの学んだだけであった。

関学の神学部には前の学校の関係上、二年の編入試験を受けることになっていた。科目は旧新約概論と英語、それに面接である。聖書の方は旧新約を数回通読していたので何とかいけると思ったが、英語の勉強は大変であった。掃

除をしながら、道を歩きながら単語を覚えるのであるが、二九歳の頭では覚える端から忘れていくのである。宣教師の家について英語を教えていただいたが、RとLの発音ばかりを注意させられるのであった。

私は大いに焦った。会社をやめたが、果たして神学校に入学できるのだろうか。悩みの故に一時勉学を中止したことがあった。すると不安になって慌ててまた始めるのである。そのような葛藤の中で、私はもう一度信仰の原点に立たされたのであった。

「主は、私たちのために命を捨てて下さった。それによつて、私たちは愛ということを知った。それ故に、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちをすてるべきである」(第一ヨハネ三・十六)

滅びの泥沼の中にあつたこの私のために、主は命を捨ててくださったのではなかったか。それなら、これからの私の生き方は、この主の愛に応え、悩める兄弟のために、命を捨てる生涯を送るだけなのである。私は与えられたこの御言葉によつて広い所に立つことができた。たとえ受験に失敗しても、主のためにいのちを捨てる道はいくらでもあるはずである。一年余の準備の期間は、私の生涯に大きな

影響を与えるものとなつたのである。

神学校受験

いよいよ関学神学部受験が一月後に迫つた寒い冬の朝早く、私は持つていたすべての免許状(教員免許、超重機免許、その他)をストーブの火で焼いた。

どのような道が備えてられるにせよ「主は、福音を宣べ伝えている者たちが、福音によつて生活すべきことを、定められた」(第一コリント九・十四)との御言葉に固く立ちたかつたからである。製鉄所を退職し、それによつて生き得るすべての手段を断ち切り、いわば背水の陣を敷いた時、私の心は言うことのできない喜びに満たされた。

ただ車の免許だけは取つておいた。当時はまだ今のようにな車が普及していない時代であつたが、伝道の強力な武器になると思つていたからである。今にして振り返ると、その時私が決心した通りの道を主は備えてくださった。奄美大島、別府市、日出町、そして現在の教会も幼稚園、保育所等の付帯事業が全くない教会であり、経済的には大変苦しかったが、アルバイトもせず、伝道一本で不思議に支えられてきたのであった。

二月上旬、私は受験のため上阪の車中であつた。次々と走り去つていく窓外の景色をみながら、私の心は不安で一杯であつた。どのような道であれ、悩める兄弟のために命を捨てる生涯を……と願つた私であつたが、やはり合格して、神学校で聖書を学び、自分の信仰を確立したかつたのである。

編入試験を受けにきたのは三人であつた。キリスト教短大を卒業して現在の喜連自由教会の牧師になつてゐる築山兄、そしてやはり他の大学を卒業してやつてきた兄弟、それに英語が全く自信のない私である。

神学部の教室に入つて、初めに旧新約概論のテストである。出題は「十戒について」と「十字架の意義について」であつた。これは何とか文を綴ることができたが、次の英語のテストが散々であつた。長文の解釈であつたが、最初に出てきたhare（野うさぎ）の単語がわからない。同じ単語がずっと続いているではないか。私は大いに慌てて頭に血が上つてしまった。答案にはそのままhareと書き、何とか時間まで粘つたが、内容は全くでたらめであつたと思う。他の二人はよくできたと言ひましたので、私は自分だけ必ず落ちると失望の淵に沈み込んでいた。

面接は数名の教授が受験の動機、牧師となる決意等を質問されたが、私はもう駄目だと思つていたので、何ともやるせない心で受け答えをするばかりであつた。私はそのまま九州に帰ろうと思つたが、翌日の発表で落ちたことを確かめる責任があると気を取り直した。受験のため祈つていただいている教会の先生、主にある兄弟姉妹に報告をしなければならぬからである。

翌日の朝、私は重い心を抱いて関学への坂道をとぼとぼ登つていった。そして神学部入り口にたどり着き、片目で掲示板を見た。何と東という字があるではないか！横に並んで築山という字、もう一人の兄弟の名はなかつた。私は夢かとばかり驚いた。できる人が落ちて、できない人が合格する大学などあるだろうか。私は恐る恐る教授の部屋に入つていった。担当の教授は「君は英語は全く駄目だったが、今までの経過、そしてこれからの決意が教授会の心を動かした。英語は入学してからしっかり頑張るように」と言つて入学に必要な書類を渡してくれた。私は飛び上がるような思いで入学準備のため、九州へと歸つていった。

「王の心は、主の手のうちにあつて、水の流れのようだ。主はみこころのままにこれを導かれる」

神学校生活

神は計画されたことを必ず行われる。言い換れば神の計画以外のことは起こらないのである。教授会の心を動かししたのは神であった。神は愚かな私を、世の初めの先から選び、今日まで豊かに導いてくださったのである。学部二年に編入した時、同級生は二十名であったが、途中で多くの人はずれ、大学院の修士課程を卒業し得たのは五名であった。神は能力のない者に能力を与え、ご計画通りの事を行ってくださったのである。



関学構内の寮への道を私はポストンバック一つを下げ、心はずませず歩いていった。入学が許可されてからの種々の準備の中で、入学時に納める入学金、授業料、その他の金銭の用意が大変であった。何しろ当時の私にとって不可に近い金額である。そのため製鉄所の退職金のほとんどがなくなり、わずかな小遣いが残っただけであった。常識では考えられない進学の道であったが、私は無から有を創造される神にすべてをおまかせすることにした。

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるだろう」

(マタイ六・三三)

これが私の生涯を貫く御言葉となるのであった。

大学構内のあちこちには満開の桜が咲き乱れ、私を歓迎してくれるようだった。寮の名は成全(セイゼン)寮で、神学部の学生だけの寮である。部屋は一人部屋と二人部屋があり、学年が進むに従って北側の二人部屋から最上級生用の南側の一人部屋へと上がっていくのである。私は新入生であったので北側の二人部屋があてがわれた。部屋には

各々押入れと机と椅子、それにベットが備えられている。

私が部屋に入って椅子に腰掛けほつと一息入れていたところ、二人の上級生が入ってきた。そして「ベット取り替えるからね」というなり、一つのベットを運びだした。再び別のベットを運びいれて帰って行ったが、そのベットたるや古いガタガタの代物であった。私は急に腹が立つてきた。「神学生ともあろう者が何という思いやりのない行動をすることか」、ブツブツ独り言をつぶやきながらこれらの寮生活に失望を感じ、腹立ち紛れに届いていた布団や衣類を整理し始めた。ふと私の手は止まって愕然とした。何と私は自分のために良い場所、良いベット、良い机を選んでいたのでないか！後から来る沖繩の学生の方には、あのガタガタのベットが置いてある。私は思わず膝をついた。他を非難しながら、同じような思いやりのない行動を私もとっていたのであった。「神様お許しください」。寮にきて始めての祈りがこれであった。早速私は相手のために、良い場所、良いベット、良い机を備えた。その時、私の心は言うことのできない喜びに満たされた。

「人々にしてほしいと、あなたがたの望むことを、人々にもそのとおりにせよ」（ルカ 六・三一）

これはまさに金言である。この金言を実行することによって、人は真の幸いを得ることができるのである。

新しい寮生活が始まった。一日の生活は朝六時半からの早天祈祷会に始まる。当番が鐘を鳴らしながら「起床、起床」と廊下を廻って歩く。集会室に集い賛美と聖書朗読、そして自由に次々と祈る。七時に主の祈りで終わると寮食堂に走っていく。朝食はトーストと味噌汁の和洋折衷である。味噌汁はセルフサービスでどんぶりに入れる。走って食堂に行くのは、遅れると汁だけになってしまうからである。それから当日の午前中の授業のノートを抱えて教室に行く。教養課程の社会学と心理学は文学部の教室での授業である。女子学生が大勢で圧倒される。昼食はまた寮に帰り食堂でいただく。午後の授業が終わると、しばし娯楽室でテレビ（白黒）を見る。テレビについての規則が寮会で多数決で決まっている。

一、チャンネル争いはしない。先に見ている人に権利がある。同時の時はジャンケン。

二、静かに見ることに。

三、おならをしないこと。

夕食後は、大部分の寮生がアルバイトに出掛ける。全く

お金がなく、これからどうなるのかと思つていた私であったが、神様はご計画どおり、次々と道なき所に道を開いてくださった。日本育英会の奨学金、神学部の奨学金が与えられ、家庭教師の道も開かれていった。昼は教室、夜はアルバイト、自分の勉学はその後で、午前二時、三時となる時が多かった。

かくして道なき所を一步一步踏みだして行く時、荒野にあつたイスラエルの民が、昼は雲の柱、夜は火の柱をもつて導かれたように、暗中模索の中にあつた私を、神様ははつきりと見える手をもつて導いてくださった。神は生きておられるのである。

学部三年の冬休みになる前、私は一銭のお金も無くなつてしまった。冬休みは寮食堂が閉鎖される。どうしても九州に帰らねばならなかつたが、汽車の切符が買えないのである。私はキャンパスの芝生に腰を下ろし、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六・三三)のお約束を思いつつ、星空を仰いで祈つた。

お祈りはしたが、少々心配であつた。寮に帰つてしばらくすると、「東さん電話ですよ」の寮母さんの呼び声。急

いで電話口にとると、八幡製鉄から堺の製鉄に転勤された加藤さんの奥さんからであつた。

「東さん、冬休み九州に帰られますか」。

私は切符もないのに「はい帰ります」。

すると驚くべき返事が返つてきた。

「ああ良かった。実はうちのおばあちゃんが九州に帰りたいといつたので、誰か連れて行ってくれる方はいないかと考へていたら、東さんのお名前を思い出したの。切符はこちらで用意しますからお願いね」。

私は一時声が出なかつた。こんなに早くお祈りが聞かれるとは思ひもよらなかつたからである。九州へは特急のグリーン車で悠々と帰ることが出来たのであつた。

もう一つ問題があつた。寮費が三ヵ月分溜まつていたのである。寮の委員が毎日やってきて、

「東さん、お金は出来ましたか」と扉を叩く。

私は「切符をお与えくださった神様。どうか寮費もお願いします」と祈り続けた。

数日後、教授から呼び出しがあつた。「アメリカからクリスマスプレゼントが送られてきた。教授会で話し合つた

が、今度は君の番だ」と寮費を払った後、十分な小遣いまで残るお金を下さったのである。英文でお礼を書くのに苦労したが、こんなにも確実に応えてくださるお方が共におられることを思うとき、言い知れぬ喜びと希望に満たされたのであった。

「わたしたちは四方から艱難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない」（第二コリント四・八）のお言葉を思い、これから先の歩みも、御言葉に固く立つて主イエスに従順に従うものでありたいと新しく心に誓った次第である。

神学部での語学は英語、ドイツ語、ギリシャ語、ヘブライ語であった。語学が一番苦手な私は大変な苦勞であり、今も試験に苦しんでいる夢をみる。ドイツ語の試験の前、長い単語を二十回書いて覚えたつもりが、翌朝には完全に忘れていた。こんな事ではどうにもならないと、私はまた神様に祈った。その時一つの素敵な方法を思いついた。記憶術である。例えば犬が寝るから犬小屋（kennel）色が黒いから（crow）……。私は言葉遊びに夢中になり、自然に覚えていくのであった。誠に神は物質的なものに限らず、私にない知恵もお与えくださる方なのである。

「キリストのうちには、知恵と知識の宝がいつさい隠されている」（コロサイ二・三）



関西学院大学神学生時代

婚約

学部三年の春休みに、私は神学生として、自主的に郷里の近くの中津教会で奉仕をしていた。

ある日、福地牧師（現在はすでに召天されておられる）から依頼されて、国立中津療養所へ週報を届けに行った。人との出会いは不思議なもので、その届け先の人こそ今の妻なのであった。白いマスクをかけて出てきた仙石姉に会って、私はとつさにこの人が将来私の妻になるのではない

かと直感した。その日は二人で賛美歌を歌った。仙石姉は中津教会の求道者であった。

なにか事を決めようとする時、必ず試みられるものである。当時の学生は、派遣学生として指定された教会で責任をもって奉仕をしていた。私は大阪城北教会に所属して、日曜学校の教師や夕拝、祈祷会の奨励を時々させていた。日曜学校の日曜学校の日、ある日、船本牧師から結婚する意志はないかと尋ねられた。私は仙石姉のことをずっと考えていたので、牧師が城北教会の会員を紹介して下さるなど思いもよらず、ただ自分の胸のうちの返事をした。

「はい、もう結婚してもよい年令だと思えます」。

当時私は三一歳であった。

船本牧師は、教会附属幼稚園の先生としばらく付き合ってみないかと紹介してくださった。私は大変困った。二人を天秤にかけてみたが、分からなかった。その時の私は神様の御心など全く考えていなかったのである。ごく常識的に考えれば、療養中の求道者仙石姉よりも、有名な牧師のうしろだてのある幼稚園の先生の方が私には有利のはずであった。現に城北教会に関係があり、船本牧師にお世話になった方々は各地で大変よい働きをされている。しかし、

わがままな私は、束縛されるのがいやであった。自分で自分の道を選びたいと思っていた。

私は一度だけ幼稚園の先生と大阪城公園に出掛けた。かわいい人であったが、私はどうしても仙石姉の方に引かれるのであった。数日後、私は船本牧師に彼女と付き合うことを止める意志を表明した。理由はどうしてもまだ結婚する気になれないという、ごく当たり障りのない返事であったと思う。船本牧師は、そうあっさり結論を出さずに、なお続けるようにと言われたが、私の心はすでに決まったようなものであった。

夏休みになった。中津教会には私の一年先輩の多田先生が夏期伝道の派遣神学生として奉仕をされていた。多田先生は卒業後、中津教会に赴任して現在も続けておられる。

私は彼に仙石姉のことを打ち明けた。彼女はすでに退院して教会に来ていたのである。何事でも気安く引き受けて下さる多田先生は、早速私と仙石姉のデートの計画を練ってくださいました。多田先生が仮のデートをつくり、四人で出掛けて、途中で自然にはぐれてしまう方法である。計画実行の日にはよく晴れた日であった。四人はでかけて、食堂で昼食を共にした。

そして、近所を散策したのであるが、計画通り相手の二人はいつのまにかはぐれてくれた。川沿いの道を二人で歩きながら、私は仙石姉にこう云った、

「今からあなたに結婚を申し込みますが、十数える間に、もしいやだったらいやと言ってください。一、二、三、」

十の数を言い終わっても、仙石姉は黙っていた。後から分かったのであるが、彼女は大変内気な性格で、とてもじやないがあの様な場合、いやとも、はいとも言えなかつたのである。

期を失することなく、私は彼女の両親に結婚の承諾をしていただくために出掛けた。

「学生の身でありますから、結納金もなにもありません。身一つでお嬢さんを下さい」。

何と、両親は何の難しい条件も出さずに、承諾してくださったのである。そして数日後、形ばかりの婚約式が行われ、結納の代わりに皮表紙の聖書が交換された。

それから大学院の二年の春に結婚するまで、二年半の婚約の時期を過ごすことになるのである。神様の御心を問わずに、ただ肉の思いだけで強引に結婚を申し込んだのであったが、神様はこのような者をも、懇ろに今日まで支え導

いてくださったのである。性格が違い、育った環境が違う二人が一緒に生活を始めるのであるから、そこには葛藤がないはずがない。しかし、その葛藤は二人に止揚（註・二つの矛盾した概念を、一層高い段階で調和統一すること）として働き、今日まであらゆるしめたのであった。

「神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた」

（伝道の書 三・十二）



婚約式（仙石姉の自宅前で）

大学院生活

大学院の入試はドイツ語と面接であった。私は果たして

合格できるかどうかはなほ疑問であつた。年若い同級生と共に頭がカチカチの三十代男が競うのであるから、負けは覚悟の上であつた。しかし幸いなことにクリスチャンには折りの武器がある。折つて与えられた記憶術というすてきな方法で、私は何とか遅ればせながら、尻からついていった。学部の語学（英語、ドイツ語、ギリシヤ語、ヘブライ語）の単位は、やつとこのことで取得した。

ある日の英語の試験の時など、私は風邪で高い熱を出してうめいていた。翌日の試験が気に掛かるが、どうしようもない。私は隣室の藤原君（現在はスイスでよい働きをされている）に頼んで、自分で山をかけた二ヶ所を解説してもらい、それを暗記した。翌日、フラフラしながら教室へ行き、答案を見てびっくりした。完全に山が当たつてゐるではないか。採点の結果は八十点以上であつた。

救われる前の私は、何をしてもうまく行かなかつた。競輪で最初に穴を当てたが、その後は一度も勝つたことがなく、借金は溜まる一方であつた。酒を飲んでフラフラしていたので、女の子にももてなかつた。いつも荒んだ顔をしていたので、子供達は私を見て逃げていった。しかしイエス・キリストを信するようになってからは、すべてのこと

が最善になされていくのである。やはり人生の歩みで最も大切なことは心の持ち様であつたのだ。神様が支えていてくださると信頼しきつていたので心は平安である。たとえ困難な問題に直面しても、祈りによつてそれを克服する力が与えられる。物事に失敗したとしても、すべての事を益と変えてくださる方が共におられるのである。何と幸いな人生を神様は私達に与えてくださったことであらうか。

「あなたのなすべき事を主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計ることは必ず成る」（箴言十六・三）

いよいよ大学院入試のドイツ語の試験である。答案用紙が配布され、一見して私は気が遠くなりそうになつた。何と長い長い文章が、これでもかと言わんばかりに続いている。ずっと目を走らせて見たが、文意がさっぱりつかめない。慌ててのぼせかかつた時、お祈りすることを忘れてゐるのに気が付いた。心を静め助けを求めた時、ある歴史的事実が記されていることが分かつてきた。それも読んだことのある本からの出題である。私は小躍りした。早速鉛筆をとつて丁寧に解説し始めた。途中の文法が分からず何度も行き帰りしたが、時間まで何とか四分の三は解釈するこ

とができた。

無事、入試にパスして大学院生となった。ゼミを歴史神学としたのは、ルターに興味をもっていただけである。

派遣教会は大阪城北教会から、今は召された大里喜三牧師の牧する香里教会へと変わった。教会の奉仕は、日曜学校、夕拝、祈祷会、そして今はマラナ・夕教会となつていゝ出張伝道所である。閑学の寮から甲東園に出て、西宮北口から梅田までは阪急、それから環状線で京橋まで、そこで京阪に乗り換えて香里園下車、教会はそこから約十五分歩かねばならない。大変な労力で時々祈祷会をさぼつた。しかし、そんな時でも大里牧師は何も言われなかつた。何も言われないと、かえつてこちらが胸をさされる。今は良き牧会の経験となつてゐる。

仙石姉とはずつと一週間に一度ぐらい手紙のやりとりをしてゐた。手紙が来てゐるときは、寮の玄関を入ると必ず誰かが「東さんラブレター」と知らせてくれる。急いで部屋の戸をしめて封を開けると香水の香りが漂う。そんな時はすぐにでも飛んで帰りたい気持ちになつたものである。

彼女とは大学院二年生になつた時に結婚して、香里園に居を構える事になるのであるが、当時は全く考えることも

出来ないことであつた。

「順境の日には楽しめ。逆境の日には考えよ。神は人に将来どういふ事があるかを知らせないために、彼とこれとを等しく造られたのである」(伝道の書七・十四)

夏期伝道

大学院一年の夏に、夏期伝道といつて、地方の教会に派遣され伝道の訓練を受けたことがある。私は田舎の教会を申し出ていたのであるが、遣わされた所は、当時今井和登先生が牧されておられた福山東教会であつた。その教会は夏期特別伝道を集行的に行う計画があり、その手伝いといふことである。私はその様な騒がしい所には行きたくないといやいや出掛けた次第であつた。

遣わされる所が気に入らないと、すべてがいやになる。まず伝道の成果を華々しく発表しようとする教会の姿勢が気に入らなかつた。協力宣教師の通訳として遣わされた同志社神学部の学生が背が高くハンサムで、若い女性の憧れの的であつたのが気に入らなかつた。牧師ではなく牧師夫人が直接私にあれこれと指示するのが気に入らなかつた。牧師夫人はそつと陰にかくれていて、それで存在価値が大

きく、皆の心の支えとなつてゐるような人でなければならぬと真剣に考えたものである。その点、仙石姉は引つ込み勝ちであり、他人の事を心配する心を人一倍持つてゐるようであり、きつと皆に喜ばれる牧師夫人になるだろうと秘かに思つて、自分の心を慰めていた。

私は大伝道集会にもうつろな気持ちで出席し、皆と海水浴場に行った時も、仙石姉のことばかり考えていた。私の住居は教会の近くの下宿屋であつた。私は自由な時間に、中学生の数学と英語を教えて小遣いを稼いでいた。このよゝうな姿勢が祝されるはずはなかつた。青年会の聖書研究も準備不足で失敗し、夕拝の証もしどろもどろであつた。

そのような惨めな気持ちでいた時、突然私は使徒行伝のピリポの姿を示されたのである。

「立つて南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい（このガザは、今は荒れ果ててゐる）」

（使徒行伝八・二六）

サマリヤ伝道で強い働きをし、人々から大愛喜ばれていたピリポは、長くサマリヤにとどまっていたかたつたのではなからうか。しかし彼は絶えず主の語りかける声を聞いていた。ガザへ下る荒れ果てた所で、どうして伝道の成果を上げる

事が出来るかと彼は考えなかつた。主の命令で言葉を聞くと、彼は何のためらいも見せずに、直ちに掛けたのである。

私はその夜祈り続けた。私の氣に入らない道だからと、与えられた使命をなおざりにするとは、何と不心得な者であつたことか。悔い改めの心を主はこのよゝうな者に与えてくださったのである。私は喜びに満たされて立ち上つた。翌日教会に行った時、東さん、嬉しそうですねと牧師夫人から云われた。嫌いだつた夫人が大愛思いやりのある優しい人に思われた。

夏期伝道が終わり、私の任期も終わり、最後の感謝会の日に、私は九州から仙石姉を呼び寄せた。どうしても会いたくなつたからである。教会員の皆さんは彼女に注目し、これから牧師夫人となる彼女に励ましの言葉をかけてくれた。二人で九州に帰る汽車の窓辺には、今井牧師、夫人、教会員の皆さん、下宿のおばさん、教えた中学生まで、心から別れを惜しんでくださった。大勢の見送りの人達で、恥ずかしい程であつた。短期間のお手伝い、しかもとんでもない不心得であつた者を、なぜこのように別れを惜しんでくださったのであろうか。思えばそれは、祈りによつて

私の心を主が砕いてくださったからであろう。信仰の歩みにおいて最も大切な姿勢は、常に砕けた心の持ち主でなければならぬという事を夏期伝道で教えられた。生涯この心の持ち続けたいと願った次第である。

「神の受け入れられる犠牲は砕けた魂です。神よあなたは砕けた心をかろしめられません」(詩篇五一・十七)

英数教室の開校

大学院一年の九月から、同級生と共に中学生のための英数教室を始めた。会場は芦屋山手教会である。皆で手分けしてポスターを作り、厚かましくも電柱や塀に貼っていた。受け付けの当日、一人で来る人、母親と共に来る人、中には自家用車でやって来る人もいた。募集人員は一〜三年各々十人づつである。神学部は他の大学を卒業して入学する学生が多いのでタレントは揃っている。私は中二の数学を担当する事になっていた。集まった生徒は募集人員より少し不足していたが、途中で入る生徒を考えて直ちに発足することになった。

芦屋は高級住宅が立ち並んでいる。長い長い塀、広い芝生の庭の住宅が続く。そこからも生徒がやって来た。子供

は何でも話す。「うちのお父ちゃんは家をあける事が多いねん。そこで母ちゃんがお化粧して毎晩出掛けていく。どこに行くのやろ」。

表面は何も問題なさそうな家庭、しかも、すべての物に満ち足りている家庭、しかし一歩中に入ると何と多くの問題を抱えている事であろうか。夫婦間の冷たい溝、そしてその中にある子供の不安、鬱積した不満。家庭内暴力、校内暴力、いじめの芽がすでにその頃から芽生えていたのである。

「伝道の書」のコヘーレスは言う、「わたしは自分のために家を建て、ぶどう畑を設け、園と庭を作り、またすべての実なる木をそこに植え、池をつくって、木の生い茂る林に、そこから水を注がせた」(伝道の書二・四〜六)

しかし彼は「皆空であつて、風を捕らえるようなものであつた」(同二・十一)と続ける。

芦屋の高級住宅のあの住人と同じではないか。問題は、「わたしは自分のために」のところにある。自分のためにだけどんなにぜいたくしても、そこには真の満足、真の喜びはなく、不安と空しさが残るはずである。神を知らなかつた時の私も、全く同じであつたのだ。

空、虚無……、何と恐ろしい言葉であろうか。億、兆という数を持っていても、空（零）を掛けると、たちまちすべては無に帰する。どんなに多くの富に埋もれていても、人生の生きる指針を持たず、無為に過ごしてしまう時、すべての富、家庭、子供までも、その存在の意義を失ってしまうのである。

生徒はよく話し、よくついて来てくれた。この教室の特長は、少数の生徒と行き届いた配慮にある。ただ勉強を教えるだけでなく、時として生徒と共に人生の意義を考え合った。そのような時、神学部での勉強が大変役に立ったのである。いずれにしてもこの教室からは、相当な収入を得る事が出来、卒業を待たずに結婚出来るのではないかと希望が与えられたのであった。

結 婚

一九六三年三月二四日、私たちは結婚に踏み切った。結婚してすぐ赴任するよりも、一年間生活を共にして、お互いの理解を深めようと考えたからである。

早速、香里教会で私たちのために「東神学生結婚準備委員会」が発足した。何も持たない私たちのために、委員会

は会費結婚を立案してくれた。会費は二五〇円である。媒酌人として大里牧師夫妻、そして司式は、私のゼミの担任教授印具先生が引き受けてくださった。

すぐに上阪してきた仙石姉のために、結婚式まで香里教会の牧師館が宿泊所として提供された。大里牧師御夫妻の暖かい御配慮からである。

私たちは何もしていないのに、委員会は着々と準備を重ねてくださった。式は教会堂で行い、その場所が直ちにケーキとお茶とおすしの披露宴に変身する計画である。委員会はそのためにも何度もしハーサルを繰り返してくれた。



大阪香里教会で結婚式

結婚式当日は大嵐であった。雨降って地固まるというよきな生易しいものではない。雷鳴と横なぐりの雨……。

これは私たちの未来を予徴しているようであった。そしてそれから本当に私たちの波乱万丈の人生が繰り広げられていくのであった。

二人の新しい生活が始まった。香里教会のすぐ近くに北山荘というアパートがある。共同トイレ、共同の洗濯場、そして廊下に部屋が並ぶ簡易アパートである。二人の新婚の部屋は四畳半で、出窓式の炊飯場と一間の押し入れ、それに半間の靴置場である。そこに本箱と食器棚とテーブルを入れたら、スペースはほんのわずかしかなかった。

そこから二時間ばかりかけて学校に通い、塾の日以外は近くの中学生の家庭教師で生活費を稼いだが、ぎりぎりの生活であった。肉を買う時も五十グラム単位で、家計をやりくりする員子の苦労は並大抵ではなかったと思う。

教会では神学生なのに役員をさせられ、員子は教会学校の教師にさせられた。結婚するために洗礼を受けた員子にとって、これは大変な重荷であったようである。礼拝説教の当番の時は、色々と私に質問をしてくる。信仰のごく初步の質問であるが、ほとんど未信者のような質問を投げ掛けてくる。答えるのに大変困る質問であったが、それが今

日まで続いている。そのことが、私の牧会にとって大変役立つことになったのである。そもそも牧師の奥さんは、立派な信仰の持ち主でなければならぬ、教会のすべての行事に目が行き届き、良き判断をもって皆をリード出来る人でなければならぬという風潮があるようである。私の同級生の奥さんも、皆そのような資格を持っていると思われる。しかし少しばかりひねくれた私は、牧師の奥さんは東俊郎という人物の奥さんであれば、それで十分だと思った次第である。なぜならば、教会員の奥さんは殆ど、いわば普通の人であり、特別に神学教育を受けたとか、教会をリードするような人は居ないからである。普通の奥さんが考えるようなこと、悩むようなことを真実に理解出来たら、それで牧師の奥さんの資格は十分ではなからうか。出しやばるよりも、陰にひっそりとして、それでその存在が教会員の心の支えになれば、それでその責は果たし得ると思うのである。

大阪の夏は格別暑い。アパートの二階は熱気がこもり、窓一つしかない狭い四畳半の部屋は、まるで室（むろ）のようになる。なけなしの家計の中から、三ノ宮の古道具屋で千五百円の扇風機を買って来たが、生暖かい空気をかき

回すばかりであった。暑さに弱い私は、毎日金魚のように口をパクパクさせてあえいでいた。夏休みも塾の責任はあるが、私はどうしても我慢が出来ず、仮病を使って遂に涼しい大分の田舎の家に逃げ帰ってしまった。員子は同じ大分の私の田舎に近い中津の両親の家で過ごすことになったのである。後で塾からは病氣見舞いとして相当の手当てをいただいたのであるが、まことに申し訳ないことをしてしまったと、今でも後悔している次第である。

我々の信仰の歩みは、置かれた環境、遣わされた場において、忠実に主の言葉に従って歩む以外にない。たとえそこが自分の気に入らない場であつてとしても、主の導きに従っているならば、そこにこそ祝福があるからである。

「神は、真実である。あなたがたを耐えられない試験に会わせることはないばかりか、試験と同時にそれに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」
(第一コリント十・十三)

大学院卒業

大学院を卒業するためには、是非論文にパスしなければならぬ。一年の時から準備はしているのであるが、なか

なか思うようににははかどらない。何しろ学費と生活費を稼ぎながらの勉強であるから、当然のことであろう。まず論文のテーマであるが、これはすでに決まっていた。現在大分県の白杵教会の牧師をしておられる、先輩の清家りつゑ牧師が、ある時、私に「私の信仰はルターよ。東さん、ルターをおやりなさい」と言われたからである。人が言うと何でもその気になる私は、何の深い考えからでなく、それならルターを研究しようとする自然に思ってしまったのである。まことに主体性のない私の性格を、今でも情けなく思っている。



卒業間近か（関学の校庭で）

しかし、この事は私にとって大きな助けとなったのである。まだ日本語に訳されていない多くのルターの著作（清家牧師がすでに訳されたもの）を、私に提供してくれたのである。同級生が必死になってドイツ語を訳していた時、私は横目で見ながら論文の構成を考えていた。

卒業論文のテーマは「善行論」―自由の意思からの一考察―とした。勿論、ルターの著作である「善行論」をその骨子にしたのである。

主イエス・キリストに対する信仰が、どの様な形で具体的な善き行為となって現われるか―これが私のテーマであり、このテーマは神学校入学以来、ずっと私の心の中で思いつめぐらしていたものであった。

論文を作製する前に中間発表がある。同級生は皆、この発表にすべての力を注いでいた。なぜならこの発表は論文作製のために、きわめて重要な要素となるからであった。

教授の質問があり、批判があり、それは大変な関門なのである。学費稼ぎに忙しかつた私は、この中間発表の準備もまことに不十分であった。発表の日が近づくとつれて、私は夢にまでうなされる日が続いた。にっちもさっちもゆかぬ苦悩の日々の中で、私はまたあの祈りをした、

「神様助けてください」。

あるいは虫が良すぎる祈りであったかも知れない。しかし私にとっては、なし得る限りの事をした後での祈りであった。いわゆる「たなぼた」式の祈りではなかつたはずである。その時、突然一つの事を示された。すべてをさらけ出そう、愚かになろうと。不十分な発表でしかない。しかしその理由を教授に説明しよう。そして欠点、間違い、不十分な点を徹底的に指摘していただくように心に決めたのであった。

発表の日、私はノートと鉛筆を用意した。誉められた点は書かずに、欠点と批判された点だけを記そうと考えたのである。案の定、教授は次から次へと欠点を指摘された。私は必死になってそれを克明にノートに記し続けた。同級生は何と不完全な発表だろうと思ったに違いない。全員同席での発表である。家に帰り、ノートをもう一度読み返して、私は思わず小踊りした。私の疑問の点、未解決の問題がすべて判明しているではないか。

「わたしたちはあわれみを受け、また恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかりことなく恵みの御座に近づこうではないか」（ヘブル四・十六）

神はまことに時機を得た助けを与えてくださる。すべてを備えて我々を待つてくださる方なのである。この方を信頼したい。この方の前に愚かになって、お言葉に従順に従っていく者でありたいと心から願った次第であった。



関学卒業旅行の旅館で同級生と共に

最終学年の夏は、修学旅行の代わりに伝道旅行を行うことになっていく。私は小学校の時は、前日嬉しさのあまり飛び跳ねて足を怪我してしまい、行かれなかった。旧制中学時代は戦時中で取り止め、関学で初めて実現した次第である。

その年は四国伝道が計画されていた。同級生が教授と共に

に三班に分かれての旅行である。私の班は相浦教授と築山兄、それに安藤兄（他教団の学生）であった。この班は香川県、丸亀、多度津、香川豊島、香川直島の各教会巡りである。もう二三年前のことであるから、各教会でどのような事が行われていたか確実には覚えていないが、多度津教会の附属保育園で、私がフランネルグラフを使って園児にギデオンの話をした後でのことである。一人の老婦人が、私に「あなたのお話は面白くて大変分かりやすかった。ただあそここの場面をこういうふうには話せば、もっと良く分かると思います」と、私が考え付かなかった聖書の解釈をしてくださった。私は「随分旧約聖書に詳しいですね」と言うと、その夫人は「私は旧約聖書を五十回通読しました」と答えられたのである。

伝道旅行での最大の収穫は、この老婦人のみ言に対するきわめて熱心な姿勢であった。たった八回しか通読していないで、こんなに読んでいる人はそうざらにあるまいと高ぶっていた私の頭に、ガンと衝撃が与えられたのである。

韓国には一千回旧約聖書を通読していて、全く聖書を見ないで頭の中で頁をめくる牧師がいると聞く。ルターは「聖書は聖書によって解釈するべきである」と言った。正に名

言であると思う。註解書による解釈は、どうしても一つの傾向に偏り勝ちであり、聖書が語るうとする深い真理を見落とす場合が多いと思う。また、聖書は場所によって全く反対の事が記されている場合もあるので、どうしても全体を通して読み、聖霊に導かれて真理を把握する必要があるのである。詩篇一九篇はヘブル語のアルファベット順に記された御言葉の詩であるが、

「わたしはあなたにむかって罪を犯すことのないように、心のうちにみ言葉をたくわえました」(十一節)

「あなたのみ言葉の全体は真理です」(一六〇節)とあるように、繰り返して通読することにより、自然にみ言葉がたくわえられ、全体を通して個々の箇所の深い真理を見いだすことができるのである。

伝道旅行が終わってからは、論文の仕上げを急ピッチで行われなければならぬ。何しろアパートは四畳半一間なので、各種の資料を広げると、部屋いっぱいになってしまふ。当分の間、資料の間で食事をし、寝ることになった。

ある時は員子が資料を整理してくれたが、全く順番が分からなくなり、かえって手間取ることになってしまった。このような悪戦苦闘のうちに何とか原稿は出来上がった。提

出までの期日がきわめて切迫していたので、員子に清書を手伝ってもらい、提出ぎりぎりに学校に持っていくことができたのである。

数日後審査の結果が発表され、合格と決まった。私には天にも昇る気持ちであったが、あの中間発表の時、愚かになって教授から欠点を指摘されたのが利いたのであろう。ただし担任教授から言われた、「清書を奥さんに手伝ってもらったね。ドイツ語の綴りの間違いがあった」。

とにかく修士号はもらえることが確定したわけである。三十過ぎのカチカチの頭で語学の単位を取ることができたか、大学院に入学できるか、無事卒業できるかと大変心配したが、主のあわれみのゆえに、万事順調に事が運んだのであった。

「わたしたちはあわれみを受け、また恵みにあずかつて時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか」(ヘブル四・十六)

第三章 喜界教会時代

最初の赴任地問題

十一月のある日、大分県の臼杵教会の役員、小野さんが津久見みかんを手土産に突然アパートを訪ねて来られた。臼杵は私の第二の故郷である。父が学校の教員をしていて東京で生まれた私は、小学校四年の時に父の郷里である大分県に帰って来たのであった。それ以来旧制臼杵中学を卒業して鹿児島島の学校に行くまで、臼杵で過ごすことになったのである。海や川での魚釣り、山でのわらび採り、きの



関学を卒業して正教師試験で大阪に立ち寄った時

こ狩りと、美しい自然を思う存分満喫した少年期を今でもなつかしく思い起こす。

卒業後の任地を色々と考えていた私は、当時無牧であった臼杵教会に導かれればと思い、その旨を地区委員長である東島先生に伝えていたのであった。そして小野さんの登場である。小野さんは是非来てほしい、三度の食事を二度に減らしても、皆で力一杯支えたいと思うと言われた。何と有り難い言葉であろうか。このような教会は必ず祝されるものである。まして臼杵は私の勝手知った町、親しい友人も大勢いて必ず私の力になってくれるはずであった。

小野さんが来られて以来、私は臼杵での伝道を毎日楽しく思いめぐらしていた。なつかしい地、多くの友人、広い敷地にある立派な教会堂と牧師館。無牧で経済的には未だ確立してこそいないが、私の初めての任地としてこれ以上の所は考えられないまでに、私の思いは進んでいた。

数日後、部長の松村教授からの呼び出しがあった。教授は開口一番、私を全く動揺させることを言われた、

「君、奄美の喜界教会へ行かないか」。

私はとつさに奄美について、知るかぎりの状況を考えてみた。台風常襲地帯、文化的に遅れている地域、恐ろしい

毒蛇ハブ、夏の耐えられない暑さ、主な産業のない貧しい生活等々……。それに比べて、何と臼杵教会が明るく希望に輝いて見えた事か。私は答えをしぶった。部長の言葉があまりにも暴力的に聞こえたからである。

部長は続けた、「君で八人目だ」。

私は「二、三日後に返事しますから」と言つてその場を離れた。関学からアパートまでの道を、私はどのようにたどったか思い出せない。気が付いたら、アパートの門口に立っていた。私は員子に部長の言葉を伝えた。員子は黙っていた。どのように考えていたか、今の私には分からないが、恐らく全く分からないから、どうぞ考えてくださいという意思表示であつたと思う。

私の心になつた好ましい所と、私の心になわなない困難な場所、私たちは果たしてどちらを選ぶであろうか。ここから私の生涯は大きく分かれていくのであつた。そして二つの道のどちらを選ぶかは、私の自由の選択のうちにあつたのである。

喜界島へ

ゴトゴトゴトー 単調なエンジンの響きとザッザーと

船腹に碎ける波の音。私と員子は船底の二等船室に身を横たえていた。

「喜界に行かないか」と云われた部長の言葉から、事態は急速に進展していった。大学院修士課程の卒業式、香里教会におけるイースター最後の説教「湖畔のキリスト」、二人で四苦八苦して荷造りした赴任の支度、大阪駅で「頑張れよ」と見送ってくれた級友の励まし、そして、鹿兒島から奄美航路三千屯の船客となつた二人であつた。

あえて困難な道を、神様は導かれたのである。私の第二の郷里臼杵における伝道は単なる夢であつたのか。私のわがままであつたのか。

奄美赴任を決意した時、「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負うて、わたしに従つてきなさい」（マルコ八・三四）のお言葉が、強く支配し続けていた。預言者エゼキエルは神の言葉の故に精神的、更に肉体的にすらも束縛されてしまつて、身動きも出来ない程の状態であつた。圧倒的に迫る神の言葉に、私も逆らうことがどうしてもできなかったのであつた。

それにしても暗い船室の私どもの心は、何と不安と葛藤に満ちていた事であろうか。これで良かったのか、間違つ

た道を選んでしまったのではないだろうか……。しかし、船は確実に奄美へと向かっていた。風俗、習慣、環境の全く違う未知の島、物価が高いと言われている所での一万五千円の謝儀の生活。考え出したら不安の種は次から次へと増していくばかりであった。

真夜中頃、船は屋久島の付近を進んでいた。このあたりの海はいつでも荒れている。船は大きく上下左右に揺れ動いていた。受胎告知の時のマリアの「胸騒ぎ」は、この船の大揺れを意味していた。大波にもまれている船は、私どものこれからの歩みを象徴しているようであった。上へ突き上げられ、次の瞬間奈落の底へ沈んでいく中で、私はうとうとと浅い眠りを続けていた。

目が覚めた時、船は静止していた。奄美本島の名瀬の港に着いていたのである。名瀬教会の雨宮牧師が出迎えていてくださった。四月というのに、何と明るいい日差しであるうか。雨宮牧師のお顔は黒く日焼けしておられた。

喜界島へは、ここから三百屯のボンボン船で、さらに三時間の航路である。小さな船に乗り換えて本島の岬を廻った時、遙か彼方に人の眉毛のような島が浮かんでいた。喜界島である。青い海原を走る船の舳先に立って、いつまで

もその島影を見つめていた。

遂に私もは、これから生活し、牧会を続ける未知の島へ上陸した。隆起珊瑚礁の島、目が痛い程真っ白な地面、竜舌蘭、ハイビスカスの真っ赤な花、そしてがじゅまるの大木の枝がゆらいでいた。

「東先生ですね、すぐに分かりました。牧師先生はどこか違っています」。出迎えてくださった教会員の第一声である。私のどこが一般の人と違って見えたのであろうか。しかし、「ようこそ、おいでくださいました」と心から暖かく迎えてくださった教会員のねぎらいの言葉に、今までのいらぬ心配は消え、これから始まる未知の生活に、新しく希望が湧いてくるのであった。この孤島にも主にある兄弟姉妹が、私どものような者をも待っていてくださるのである。

喜界島での生活

喜界島は奄美諸島五つの島の一つであり、奄美大島の東の海上に浮かぶ小島である。治承元年、僧俊寛が流された島であり、その頃は鬼界島と書いていたが、今は鬼が喜に代わっている。まことに喜にふさわしい美しい島であり、

私は今でも日本のハワイと思っている。珊瑚礁の海岸は天然の芝生が敷きつめており、春にはびっしりと百合の花が咲き乱れる。海はあくまでも青く澄んで、珊瑚の林の間を赤、黄、青の熱帯魚が泳ぎ廻り、時として青海亀が顔をのぞかせる。

この島には恐ろしいハブは生息していなかった。珊瑚の地質の故に生きる事が出来ないそうである。大島には多く生息し、所々「ハブ多発地帯」という看板が立っており、その近くには必ず竹の棒が数本道端に立てられている。棒で地面を叩きながら「人間様を通るよ」とハブに知らせるのである。

喜界教会の初めは学校の校長をしておられた磐井先生という方が、退職後伝道者として片手に聖書、片手に鋏を持って伝道し、その基が築かれた。その後を九州教区総会議長をしておられた福井二郎先生が議長の席を他の人に譲って赴任し、教会が建てられたのである。福井先生の辞任後はなかなか後継者が見つからなかった。そしてやっと主の導きに従った不肖東伝道師が登場したという次第である。偉い先生の後を継ぐという事は大変な事だと思うのだが、そこは持ち前の楽天主義、恐さを知らずで突っ走ろうと決

心したのであった。

二人を乗せた車は、珊瑚の砂で白く光る道路を走っていた。竜舌蘭の空に向かって高く伸びた白い花、ハイビスカスの真紅、プーゲンビリヤの淡い桃色、色とりどりのクロトンの若木が、窓外を過ぎていく。砂糖きびの畑が続く。家々は石垣で囲まれ、がじゅまるの大樹がそれを守っていた。

四キロの道程を車はあつという間に走り、台地の中腹の森の中にある教会に到着した。牧師館も会堂も壁はすべて板を張っただけであり、屋根はトタンぶきであった。ここも石垣と、がじゅまるの樹が守っていた。牧師館の庭を見て私は喜んだ。バナナ、パイナップル、マンゴー、そしてみかんの木が植えられ、すでに実をつけているではないか。経済的に苦しいこれからの生活であったが、これらの果物、自然生えのふき、磯釣りで得た魚、教会員の米、野菜の献品等で二人は支えられていくのであった。

数名の教会員が私どもを待っていてくれた。ここでも、「ようこそ、こんな所へおいでくださいました」と労いの言葉をかけてくださった。島の人たちは強い日差しで皆日焼けしておられた。質素であるが、ござっぱりした服装を

しておられ、孤島の苦勞の顔の奥にやさしい目が輝いていた。一週間程旅行してこの島を観光するのであれば、まことに喜ばしい島であるが、ここで長く生活するとなると、表面には見えない種々の苦惱が山積しているのである。僅かな収入の貧しい生活、中学、高校を卒業すると直ちに大阪、東京へ出ていかねばならない。砂糖きびと大島つむぎだけの零細産業、そして専門医がないので、出産で命を失い、病気で助かる命さえも救う事が出来ない不備な医療施設等である。

しかし、喜界島は今でも美しい。この自然の美は、とてもお金で買うことが出来るものではない。公害で破壊されていく宇宙船地球号を当初の美しい星に戻すのは、全人類に与えられた重大な使命なのである。

「神が造つたすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった。夕となり、また朝となった。

第六日である」(創世記一・三一)

喜界島での新しい生活が始まった。二人が起きた時は、すでに子供たちは学校へ、大人の人たちは砂糖きび畑へと出かけており、部落にはすでに人影がなかった。水道は後

に泉から水道管を引いて各戸に設備が出来たが、当初は井戸であった。牧師館は井戸水をタンクに汲み上げ、それから台所やトイレに管を引き入れて蛇口で水を使うよう近代的な設備が整っていた。前任の福井先生のおかげである。



伝道教会はバイクに限る

買物は四キロ離れた舟着き場まで行かねばならない。これは大変なことであるが、幸い九州教区からバイクを購入するお金をいただいていたので早速免許を取得する事にした。自動車免許は製鉄時代に持っていたが、神学校時代に気軽に申請を怠り、無効となっていたのである。自動車免許は、別府の教会に転任後、再取得する事になった。

日曜日となった。礼拝時間は夜の八時からである。昼間は組を作つてさとうきび畑の仕事をしているので、教会員

であるからといって、それを抜ける事は許されない。集会時間三十分前に鐘を鳴らす。この鐘は火薬を抜いた砲弾を軒から吊し、それを鉄槌で叩くのである。やがてこちらの木陰、あちらの森影からランプを手にした教会員が集まってくる。当初は教会堂も、牧師館もランプ生活がしばらく続くのであった。



夜8時の集會にランプを手に集って来る
信徒の方々

教会堂は壁は板張、三ヶ所に粗末な窓があつて、ベンチは手作りの木製であつた。勿論背もたせも座布団もない簡単なものである。一番前に役員が陣取る。この一番前の席は謙虚な席であると同時に、黄金の席である。集會が始ま

るとあちこちの席で居眠りが始まる。昼間の仕事の疲れで無理もない事であろう。最初のうちは気にかかつて説教もしどろもどろになり勝ちであつたが、学生時代の心理学の授業で、浅い眠りの中で聞く声は、無意識のうちに心の深層に刻み込まれるということを思い起し、それからはずべてを主にゆだねることにして安らぎを得たものであつた。時として前列の役員が居眠りをして大きな聖書を床に落とす。その途端、アーメンと大きな声を出して皆を驚かせ、全員が目覚めるのであつた。

礼拝が終わつてから楽しい交わりが始まる。その時は、皆はつきり目覚めているのである。雑談に花が咲いて話の輪が広がり、十二時、一時まで続く事がしばしばあつた。時として礼拝に蛇味線（にしき蛇の皮を張つた三味線）や太鼓を持ち込み、華やかな島踊りが披露される。蛇味線と太鼓と口笛のはやしで六調と言われる踊りである。私が見よう見真似で踊ると皆ヤンヤの喝采で大喜びなのである。こうした交わりを通して初めて島での生活は慰められ、交わりを深めていくのであつた。

教会の集會は、ただ話を聞くだけに終わってしまったのではない。説教と同時に信徒の交わりがいかに大切なもの

であるかを、私は赴任の当初から教えられたのであった。新約聖書において「交わり」を示すのに「コイノニア」という語が用いられている。この語はパウロの手紙に極めて多く用いられ、特異な用い方がなされている。



礼拝の後で私が島踊りを踊るとみな喝采した

「交わり」の最も特色あるパウロの言葉は、「あなたがたは神によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、入らせていただいたのである」（第一コリント一・九）とあるように、「主イエス・キリストとの交わり」である。この主との交わりに入る事によって初めて信徒の交わり、即ち教会生活が成立するのである。

皆が主との交わりにおいて一つとなり、お互いの悩みを負い、喜びを共にする事によって、真の教会は形成されていくのである。孤島の喜界教会は、この交わりが絶えることなく続いていたのであった。

喜界島は亜熱帯地域にあるので、島の果物は内地のそれと全く違うものであった。内地にある柿、梨、桃は島では見当らない。みかんは花良治（ケラジ）みかんと云って大変香ばしいものがある。それと代表的な果物はバナナとパイヤであった。パイナップルは本島の方で栽培されていたが、島にはなかった。

牧師館の庭は広く、一部が築山になっており、やし、びんろう樹、がじゅまる、みかんの木が植えられていた。果物はバナナ、マンゴー、パイヤである。バナナは内地ではとても味わえない、皮の薄い大変おいしいものであったが、熟すまでほっておくと、すぐにカラスに食べられてしまうので、熟す前に取り入れ、家の中に吊るしておく。そして黄色くなったものから順にいただくのである。マンゴーはバナナとオレンジをミックスしたような、これもまた美味な果物であった。

問題はパバイヤである。島のパバイヤは内地で売られているのと違い、独特の臭い香りと、あくどい味がするものであった。島の人に「おいしいですよ」と勧められていた。だいた時には、一口食べて吐き出したくなるような思いであった。夏休みになると内地のミッション・スクールの学生が伝道を奉仕のために島にやってくる。教会の諸集会の手伝い、道路工事の奉仕等、大変良い働きをして下さるのであったが、内地へ帰る時には、必ず教会員がパバイヤをお土産に差し上げるのである。「わあ嬉しい！ありがとうございます」と受け取るのであるが、帰った後はパバイヤが裏の竹藪に捨てられているのである。それを隠すのに一苦労したものであった。島に住み慣れ、気候、風土に馴染んでくると、不思議にあの吐き出したくなるようなパバイヤの味が分かって来る。最初はミルクをかけて食べるようになり、次に塩をつけていただき、全く馴染んだ時はそのまま、むしろむしろと大満足で味わうのであった。

主イエス・キリストを知ると言う事は、キリストについて知ることではなく、キリストを知ることなのである。いわばキリストを味わうのである。最初からこの味は分からない。味わうに到るまでの過程が大切である。聖書は、

「主の恵み深きことを味わい知れ」(詩篇三四・八)

「あなたがたは、主が恵み深き方であることをすでに味わい知ったはずである」(第一ペテロ二・三)と語る。

この味わう事のために、我々に忍耐と我が身を鞭打つ努力が勧められている。

「すなわち、自分の体をうちたいたいて服従させるのである」(第一コリント九・二七)

パウロのこの服従の姿勢は、彼の全生涯を貫いていた。

主のみ言葉は服従する事において、我々は主がいかに恵み深い方であるかを知る事が出来るのである。

パバイヤの味を知る。島の人たちの心を知る。夫婦がお互いを理解し合う……。これらはすべて味わうに通ずるものであろう。

神学部最終学年に結婚して、いきなり孤島の困難のただ中に投げ込まれた員子はどんなに辛かったろうと、今しみじみ思うのである。買物をするにも四キロの道を歩かねばならない。島にはデパート等何一つないのである。彼女はしょっちゅう「デパートを歩き廻りたい」と言っていた。

ある日、彼女は「私はもうあなたについていけません」と言って、大切なものをスーツケースに入れ、牧師館を飛

び出してしまったのであった。

「人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」(創世記二・三四)

夫と妻が一体となるという聖書の言葉は、新婚の二人にとつては大変難しい事であった。第一に性格が違う。私はどちらかと言えば楽天家であるが、員子は内向的で周囲の人を必要以上に気にする性格である。それに育つた環境が違う。おまけに、伝道者の妻にだけは絶対にならないと決心していた員子が、ちよつとした行き違いから思わぬ方向に事が運んでしまったからであった。そして結婚後一年目に南の孤島への赴任である。学生結婚時代の経済的困窮、その次には全く気候、風土、環境の異なる島での生活が続く。私は僻地での伝道を神の導きと信じて飛び込んだのであったが、員子はそこまでの思いには至らず、悶々として日を過ごしていたのであろう。そして、あの牧師館脱出である。

喜界島からは一日一便、本島の名瀬の港に向けてポンポン船が出航する。名瀬から鹿兒島へは三千トンの客船である。私がやや間を置いて喜界の港に着いた時には、員子はしよんぼり波止場に立っていた。やや間を置いたのは、船

の出航時間を知っていたからであった。陸続きの内地と違って、島からは船でなければ絶対脱出できないのである。

私は員子を慰め、これからお互いよく話し合つて生活しよう、牧師館へ連れ帰つたのであった。

ヘーゲルの止揚の概念では、正と反との葛藤の中で合が生まれ、この合にまた反が生じ、葛藤を経て合に至る。この繰返しによつて、止揚されていくというものらしい。

私と員子はまさに正と反との状況であった。しかし、今にして思えば、これはまさに神の摂理の中にあつたのである。もしお互いが同じ性格、同じ思いであつたなら、全ては順調に事が運んだであらう。私が神学生の時、同じ神学生の女性と、もう少しで結婚の約束が交わされる時があつた。その直後に、私は員子と出会つたのである。そして、私は員子の方を選んだ。振り返ってみると、困難な道の方を選んでしまつたのである。員子に出会つた時、この人だという直感が働いたのかもしれない。しかし、人間の直感など全くあてにならないものである。このあてにならないものを神はよくご存じであり、深い摂理の御手を持つて私どもを導いてくださったのであった。

船が出なければ、島から出られない。これが私どもを救

ったのであった。あれから十数年、お互いの葛藤が続き、徐々に止揚せられて、今日の私どもが存在しているのである。幾度離婚の危機に立たされたか分からない。員子の苦しみは、お互いの意志疎通と共に、伝道者の妻である事が大きな原因であったようだ。対人関係で随分悩み、「牧師を止めたら？今からでも遅くないわ」と幾度も迫られた。私はそれがお互いの最上の道であるなら牧師を止めてもかまわないと決意したものであった。しかし今日まで支えられているのは、やはり神の偉大なみ手の中に我々があつたという事実である。「一体となる」とはお互いに真に理解し合うという事であった。



珊瑚礁の海岸で妻員子

幽霊の話

喜界島には幽霊がたくさん出没する。何しろ横穴式の墓地在道端にあり、のぞくと白骨が散らばっていて、夜、子供はそこを走って通り抜ける。牧師館の裏には竹藪がありそこに白い着物を着たおじいさんが立っていて、すつと姿を消したと隣の婦人が話してくれる。竹藪の奥には苔むした古井戸があつた。「ひとだま」が飛び交い、首のない豚が道を走ってきて足の間を通るとその人は死ぬなど恐ろしい話ばかりである。暗い外灯もない道路、がじゅまるの枝が垂れ下り通路を阻む。火葬場がないので、すべて土葬である。この様な状況で幽霊が出ないのは、むしろ不思議なくらいであつた。

幼児期の私は大変臆病であつた。お手伝いさんから散々いじめられて、怖い話を聞かされて怯えていた。階段の間から白い首の動物が口を開いて私をおどす。後からの検証では、それはお手伝いさんの白足袋であつた。トイレに一人で行くことが出来ず、必ず誰かについてきてもらった。父母はこの事で随分心配しただろうと思う。

その後、私は変身した。あの社会人となつてからの放蕩の生活の故である。怖いものは何もなかった。どうなつて

もよかったからである。暴力団の人たちが数名私を取り囲んだ時、私は刺されてもよいと思つた。どうしてそのような状況になつたかは、今だによく分からない。ただ、彼らの一人の傘を質に入れて飲んだのが、その原因であつたのかも知れない。恐らく、知らぬ存ぜぬと言ひ張つた私に、腹を立てたのであろう。深酒で体をこわして死んでも構わない、どうせ生きていても仕方がないのだからという私の氣迫に押されたのか、彼らは散つていつたのであつた。

島の北東部に磯釣りに最適の場所がある。岩場から急転直下二十〜二五メートルの深場があり、そこに大きな魚が餌を求めて廻遊して来る。仕掛けはきわめて簡単で、大きな針にあじかいわしの片身をぬい刺しにして、ドボンと投げ込んでおく。寄せ餌は全く不要である。待つ間もなく、いきなり竿先が引き込まれて弓のようになる。魚との格闘数分、大きなふえふき鯛、ひらあじ、大めばる、時として伊勢海老がはさみを振りかざしながらかかってくる。ただその好適所は、昔難破船があつて亡霊が出てくるとうわさされている所であつた。

主イエスを信じてから神以外に恐れるべきものはない、と確信していた私は、平気で夜その場所に出掛けていった

のである。そして多くの獲物を持って帰つて員子を喜ばせようとした。ところがである。員子は私が出ていった時と同じ場所に同じ格好で、ひたすら私の帰つて来るのを待つていたのであつた。すぐ裏の竹藪に幽霊が出た、この話一つで、彼女は夜の一人を大変恐れていたのである。その彼女の心を思いやることなく、私は時として、無断で夜あの釣り場へ出掛けて行つたのである。



喜界島の海岸での磯釣り妻の悩みを
思わず、私は遊びほうけていた

牧師館を二度三度家出し、ある時は私の釣り竿を折つて「もういかないで」と懇願した言葉を今にして初めて理解し得るのであつた。信仰生活において最も大切な姿勢は、私が信仰によつて喜ぶでなく、他者の苦しみを自分のものとして共に苦しみ、相手の喜びを自分のもののように喜ぶ

というところにあつたのである。

聖書の中に幽霊という言葉がただ一ヶ所登場する。

「彼らはイエスが海の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ」(マルコ六・四九)

ガリラヤの湖で嵐に悩んでいる弟子たちを助けに来られたイエスを、幻影と見た所に弟子たちの信仰の大きな問題があつたのである。

今日よみがえられて共にいてくださる主を、我々は単なる幻影として片付けているのだろうか。決してそうではない。主は現に生きて我々と共にあり、我々を豊かにあしらつてくださつておられる。この方をはつきりと信仰の目をもつて見つめなければならぬ。喜界の幽霊は単なる幻影なのである。私は決してこの幻影を信じる事は出来ない。

喜界島の言葉

喜界島の言葉は沖繩の言葉に似ているけれども違うし、内地の言葉とは全く名詞も動詞も副詞も桁違いに異なっている。喜界教会に赴任した時、一番苦しんだのはこの言葉の違いであつた。

ある日、一人の老婦人宅をお菓子を持って訪問した時、

その方は「ガパール」と言われたのである。相手の言葉が分からないので、会話はチンブンカンブンなものとなつてしまつた。伝道者として言葉が分からないほど、致命的なことはない。

牧師館に歸つて、庭で遊んでいる子供に聞いてみた、

「カパールって何？」。

「たくさんある、ということよ」。

なるほど、「ガバ」とは、沢山という意味だったので。

そこで、子供から島言葉を教えてもらうことにした。

「頭は何というの」。「ハマチ」。

「魚の名前のようなだね。私は何というの」。「ワン」。

「犬が吠えるみたいだ」。すべてこの調子である。

集会の後で、習つた島言葉を使つてみると、

「先生、それは子供の言葉ですよ」と言われた。

島の生活にも慣れ、島言葉も少しづつ覚えてくると、何とその言葉は、大変ていねいな昔の大和言葉から来ていることが分かつた。たとえば、「ナーミ」は「あなた」(汝から来ている)、「サ、ソーリ」は(お茶を召し候え)、「チバリンソーリンヤー」は「頑張つてね」(お気張り候えや)である。

むかし、鹿児島島の島津藩の圧政下にあった奄美群島の人々は、内地との交流もままならず、ひっそりとした生活の中で、昔からの言葉を受け継いで来たのであった。そして終戦後は、アメリカの占領下でいたげられた年月が続くのである。本土復帰後も、相変わらず奄美は、九州と沖縄の間で忘れられた存在となつて、取り残されている。どの地図を見ても、群島は鹿児島本土から切り離され、バラバラにされてる。

内地から、ときどき無料医療団体がやってくる。大学生が夏休みを利用して、奉仕のために来島する。慈善家が種々の物資を放出してくれる。確かにこのようなことは、島の人達にとつて有り難いものであつたと思うが、島の人が切に望んでいたのは、このような疎外された島で苦しんで生活している我々を理解してほしいということであつた。島の人の目は、物を与え、奉仕する人の心の底にあるものを鋭く見ていたのである。すなわち「してあげる」という上から下に向かつて物を与えるような姿勢を……。

聖書が繰り返し示す警告は、この傲慢に対してである。そして反対に、謙虚になつて他者を理解し、仕える姿勢を教える。僕となり給うた主イエスのあの姿である。理解と

は、文字通り *under stand* で、下に立つという意味である。「してあげる」という姿勢からは、理解は全く出てこない。

ペンテコステの日、弟子たちは聖霊に満たされて福音を語り始めた。集まつた人達は色々な国の人であつたが、みな使徒の話を理解し得たとある。言葉の壁が破られ、真の交わりが出現したのである。



と島の子供と畑きさとう

喜界島の外国語のような言葉を学び、島の人の話す言葉が分かり始めた時、そこに「理解」が生じてきた。彼らの心の底にある苦悩を知り、それを私のものとして共に苦しんだ時、お互いの間に暖かい交わりが生まれたのである。バベルの塔において失われた交わりが、ペンテコステの

日に回復された。私達は、この聖靈による交わりを大切に
し、「一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、
一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ」(一
第一コリント十二・二六)とあるような、暖かい血の通つ
た教会を形成するものでありたいと切望する。

喜界島の自然

喜界島には小型機用の飛行場がある。滑走路の周辺には
草が生えていて、牛がのんびりと草を食んでいるが、飛行
機が発着する時にはバイクで牛どもを追い散らす。まこと
にのどかな風景である。飛行場の先の海に格好の入江があ
る。珊瑚礁が外海との間に狭い水路を作り、内海は静かな
プールのようになっていて、我々はそこを夢の入江と名付
けた。水中眼鏡とシュノーケルを携えて、二人はよくその
入江に出掛けた。波打ち際は美しい白い砂浜で、少し沖か
ら珊瑚の林が続く。二人は手をつないで遊泳するのである
が赤、黄、青の熱帯魚が林の間を乗しそうに泳ぎ廻り、時
として海亀がのっそりと姿を現わす。今でもその美しさを
忘れることが出来ない。

外海に出ると波が少々高くなり徐々に深くなる。しかし

大変澄んでいるので、まるで大空を飛んでいる様な気分にな
る。遠くの南の海上には大抵台風が発生しているので、
時として思わぬ高波がやってくる。これは大変恐ろしい力
で、ある時はその波に襲われ、珊瑚の岩の上を思い切り転
がされて傷だらけになった事がある。岸に近い所は危険で
ある事を身をもって知らされた。

信仰の歩みも岸に近い所、即ちこの世の肉的な生活に近
い所では、多くの危険や誘惑がある。思い切って大海に出
て、神のふところに飛び込むのでなければならぬ。

奄美地区には喜界教会、瀬戸内教会、名瀬教会と三つの
教団教会がある。年に一度、地区婦人協議会が行なわれる
が、これがまた大変である。名瀬教会に集うのであるが、
瀬戸内教会からはバスで五時間、喜界教会からは船で三時
間かかる。喜界教会のご婦人方は皆船に弱い。三百屯のポ
ンポン船で揺られて名瀬に着いた時には一同気分が悪く、
ぐったり寝込んでしまう。やっと気分が治った頃には集会
が終わり、帰りの船でまた徹底的にやられてしまうのであ
る。離島の苦しさはこういう所にもはつきりと現われる。

奄美の台風は内地のそれとは大変スケールの面で異なる
ものであった。本土に近づく頃には、その勢力は大抵衰え

て、被害も少なくてすむのであるが、大海を渡ってくる台風はまだ青年期の生きの良いものである。それがそのまま襲うのであるから、少々の事では太刀打ち出来ない。私どもが赴任して二年目の台風は全くすごいもので、一晚中恐ろしさにふるえていた。家の土台から揺り動かされるのである。特に台風のもたらす波しぶきによる塩害は、さとうきび栽培に莫大な被害をもたらす。

奄美の家はこの台風要充分備えて造られている。先ず家の周囲の防風林と珊瑚の石垣が家屋を守る。屋根はトタンぶきで、しっかりと釘で押さえられている。鴨居は家が歪まないよう中広く造られ、頑丈な雨戸が部屋を守り、家の土台は堅固な珊瑚の岩である。

「わたしのこれらの言葉を聞いて行なうものを、岩の上で自分の家を建てた賢い人に比べる事が出来よう。

雨が降り洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ち付けても倒れることはない。岩を土台としているからで

ある」(マタイ七・二四〜二五)

突然襲ってくる人生の嵐に打ち勝つもの、それは私どもを愛し、私どものために命を捨ててくださった方のみ言葉であったのだ。

二つのいのち

喜界教会に赴任して二年目の十月に長女が与えられた。名前を色々と考えたが、広い心でゆったりした人生を送るように裕子(ゆうこ)と名付けた。ところがあにはからんや、彼女はゆつたりどころか、こせこせとせわしげな子供であった。母乳が出ないのでほとんどミルクで育ったが、ミルクが合わないのか少ししか飲まず、まるで鳥がらのようにやせていた。彼女が病気もせず、健康に育つたのは南国の太陽と果物のおかげだと思っている。その裕子も今は二一才、現在、閔学教会の付属幼稚園で働いている。光陰矢の如しと言われるが、人生の限られた時間を主に従い、一步一步忠実に歩まねばならない。その時、絶望と思われる状況で主は思いに勝る事をしてくださるのである。



珊瑚礁の海岸で長女裕子
(私共は夢の園と名づけた)

喜界教会の思い出にもう一つ忘れない事がある。一人の非行少年I兄との出会いであった。彼は中三の生徒であったが、ろくに学校にもいかず、常に刺身包丁に手拭いを巻いて持ち歩いていた。牧師館の庭に杭を立て、ぐるぐると縄を巻いている。何をするのかと見ていたら、それを手や足で突いて空手の練習をしているのである。彼のまわりには常に多くの敵が存在しているようであった。村人は彼を恐れ、彼に近づくなと警戒していた。彼はよくビール瓶をぶらさげ、ラツパ飲みしながら、するどい目つきで歩いていた。主を知らず、放蕩をして、泥沼の道を歩み、けんかして留置所のやつかにまでなつた事のある私は、どうしても彼を放つておくことはできなかつた。

「ビールを飲みたかつたら、牧師館に来て飲みなさい」。彼はきよとんとした目で私を見ていたが、次の日ビールを下げたやつてきた。彼と接触するにはこの方法しかなかつたのである。私は昔の放蕩時代の話をし、主イエスキリストに出会つて変えられた証をした。彼は私に関心を示し始めたようであつた。

卒業式にも出なかつたようであつたが、とにかく中卒後は、彼はさとうきび運搬の手伝いをして、わずかばかりの

収入を得るようになった。彼としては大変化なのである。そして相変わらずビール瓶を下げて牧師館にやつて来た。このようにして彼との付き合う回数が多くなるにつれて、彼の心はだんだんと和らいできたのであつた。

この事で村人の私に対する批判の聲が上がってきた。

「牧師館で未成年に酒を飲ませるとは何事か」。教会は聖なる所と思つてゐる彼らにとつて、私のしている事は大変道はずれてゐる事だと考えたのであろう。私は彼らの声を無視した。今、I兄は一番大切な場にいるのである。彼と関わりを持つことなしに、彼を導く事は絶対に不可能なのである。かくして喜界教会の四年間ずっと彼を友としてきたのであつた。

一昨年の四月、私が八尾教会に赴任した時、どこから聞いたのか、彼が一番にやつてきた。彼はその後、島を出て伊丹でトラックの助手をしながら免許を取り、お金を貯めて四屯トラックを購入して個人運送業を始めていたのであつた。彼は私に「中古で申し訳ないが、伝道のために使つてください」と軽四輪をプレゼントしてくれたのである。今もその車は快適に走ってくれている。そして私は他のどんな高級車よりも彼の車を最高の宝としてゐるのである。

「罪人が一人でも悔い改めるなら、悔い改めが必要としない九九人の正しい人のためにもまさる大きい喜びが、天にあるであろう」（ルカ十五・七）

喜界島との別れ

大分の田舎にいる母が病気になった。以前からリユーマチ等で体は強い方ではなかったが、風邪をこじらせて床に入る日が多くなったようである。父はすでに他界し、姉も妹も嫁ぎ、弟は東京へと皆離れ離れになっている状況で淋しさも多分に原因していたと思う。母は長男である私が大分に帰ってきて欲しいと前から言っていたと姉が伝えてきた。気丈な母は、私に直接言えなかったのである。

この時から、私は喜界島を去ることを考え始めた。母の事ともう一つ、島の生活になかなかなじめず「デパートを歩き廻りたい」としよちゆう云っていた貞子のためであった。伝道者が家族の故に赴任地を変えることが許されるかどうか？私は随分悩み続けた。

主イエスは「わたしよりも父または母を愛する者は、私にふさわしくない」（マタイ十・三七）と言われた。

しかし、私は母を愛する事が主イエスへの愛に先行してい

るとは思えなかった。イエス・キリストを知る事によって初めて父母への思いやりを持つことが出来た私であった。また、島を去ることが主イエスへの愛に反するとも考える事は出来なかった。

問題は後を受け継ぐ牧師が与えられるかどうかである。

「君で八人目だ」と言われて、福井先生の後を継いで喜界教会に赴任した私なのに、後継者も決まらなままに島を去る事は、決して主のみ心ではないと思った。それ故、母と、苦しんでいる貞子の事を思う時、なんとしてでも後継者をとという思いをどうする事も出来なかったのであった。

ちょうどその頃、本島出身の丸山牧師が東京で牧会をしておられる事を知った。島出身であるなら島の事情もよく理解しておられると思い、早速先生に手紙を送った。すると、何と快諾の返事が来たのであった。

喜界教会に赴任して四年、思い出すのは青く澄みきった海、珊瑚の林、美しい熱帯魚、降るような星空、真紅のハイビスカス、喜界島は今もその美しさを失っていない。牧会の面では、全く五里霧中で何の成果も上げられない状態であった。そもそも神学校を出たばかりで牧会の経験のない者が、困難な孤島へ赴任するという事自体、無理な話で

あつたのだ。ただ島の人たちには迷惑をかけたが、私自身は多くの事を学ぶ事が出来た。貧しさの中にある人の心の暖かさ、疎外された人の持つ深刻な悩み。もし、私がこれらの人に出会わなかったら、人を理解するという大切な姿勢を持つことが出来ないまま過ぎてしまったことであろう。十年間製鉄所で働いた経験、放蕩時代の空しさ、そして喜会島で過ごした四年は、私にとってこれからの牧会に大変役立つものとなつたのであつた。

喜界島の小さな港で船と岸との間に何本もテープが張られた。四年間、共に過ごしてきた人たちの顔、顔。日に焼けた顔、いたいけな子供の顔、これからまた島を去らねばならない中高生の顔。幾度、この港でさびしい別れが繰り返されたことであろうか。涙でみんなの顔が、もやの中のようにゆらいでいた。

丸山牧師が赴任してから、喜界教会の教勢はぐんぐん進展していった。現在、陪餐会員七二名、礼拝出席三十名、日曜学校生徒出席五一名である。

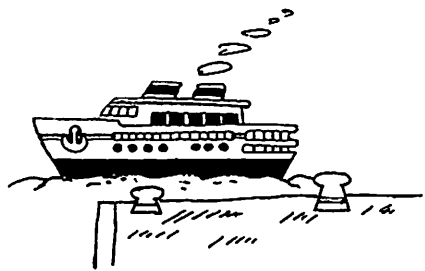
「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」(伝道の書三・一)

第四章 別府野口教会時代

新しい赴任地

母の願いに応え、郷里の大分で与えられた赴任地は湯の町別府野口教会であつた。別府は東京にいた時に、夏休みには全家族郷里の大分県宇佐郡に帰り、必ず家族で遊びに来ていた所である。その頃の別府は、まだひなびた温泉町であつた。海岸の砂浜を手で少し掘ると温かいお湯が湧き出てきた事をなつかしく思い起す。

私たちが赴任した時は、すでに湯の街として全国に知られ、人口十三万人の都市になっていた。その頃は汽車が電



車となり、高度成長の幕開けの時代であった。別府駅から海岸までの地域はネオン街と変わり「ちよつと寄っていらっしやい」の声がやかましく飛び交う。

至る所に公衆浴場の温泉があり、別府市民は一月一五〇円の札でいつでも入浴出来るのである。朝早くからステテコ姿のおっさんが洗面器を片手に歯を磨きながら銭湯に行く。道路の側溝には湯が流れ、冬は一面に湯気が立ち上がる。ここは喜界島とは全く違った別天地であった。人の少ないさびしい喜界島から、ネオンのまたたく歓楽の街別府へ……。私たちの信仰はここでまた、激しく試みられるのである。そして夫婦間の葛藤も別府野口教会の赴任十年間ずっと続くのであるが、次第に止揚せられてお互いの固い結びつきへと向かうのであった。

「わあーっ、別府タワーが見える！」

員子は喜びの声を上げた。牧師館は階下は八畳、六畳、四畳半、そしてDK。階上は十畳と八畳の本間の広々とした部屋であった。思うに地方の教会の牧師館は、どこもゆつたりとしている。これは住宅事情もあると思われるが、教職者を大切にする思いが現われているのではないかと考えられるのである。別府駅から歩いて3分の所に教会があ

る。牧師館の二階の窓からは、別府タワーが真正面に見える。そして夜は美しいネオンで彩られるのであった。ネオンを見ることの出来なかつた喜界の生活と何という相違であらう。板壁とトタン屋根から立派な壁と瓦の屋根の教会堂と牧師館へ。歩いて四キロの買物からすぐ近くの近鉄デパートへ。石ころの田舎道から整備されたアスファルトの道路へ。デパートを歩き廻りたいと口癖のように云っていた員子の夢はかなえられたのである。



別府野口教会会堂前

環境の大変化に、我々は大いに左右せられる。私の場合も同様であった。そして、そこに多くの誘惑が待ち伏せていたのである。もし変わる事のないものにたえず目を注いでいたら、それを克服する事ができたはずであった。

「イエス・キリストは、きのうも、きょうも、いつまでも変わることがない」（ヘブル十三・八）

試験（その一）

別府野口教会の役員会のメンバーは、そうそうたる人たちであり、この世的にも相当の地位に着いていた。湯の花（温泉の成分を粉末にしたもの）製造会社社長、鉄工会社社長、建設設計事務所所長、亀ノ井バス会社次長、市役所課長等である。そして、少しこの世的な考えで信仰の問題を判断しようとする人もいたが、皆でしっかりと教会を支えていた。

前任の牧師はドイツに留学した優秀な人で、その後を引き継ぐ事は田舎の教会から転任した者にとっては荷の重い事であった。

しかし、立派な教会堂、広い牧師館、それに多くの教会員、にぎやかな街、便利な買物、多少増えた謝儀の生活の中で楽しかったが、生活の困窮を極めていた喜界島を思い起こして感無量であった。

赴任して間もなくの祈祷会の後で、役員のお布兄が「先生、ちよっと付き合ってください」と私を誘うのである。何

の事やらと彼について行くと、ネオンの輝く歓楽街に導かれ、とあるスナックに入ってしまったのである。別府は観光の街で、各所に血の池地獄、海地獄、坊主地獄、竜巻地獄等、それぞれの特徴をとらえた色々な温泉場が散在している。それらを見物したり、入湯したりするために、全国各地から観光客がやってくる。その客を目当てに歓楽街があり、スナック、バー、キャバレー、トルコ風呂等が軒を並べる。そして営業は午前二時、三時と続き、ある店では徹夜の営業が営まれる。

お布さんはキープしてあるウイスキーを私に勧め、スナックのママさんを私に紹介してくれた。きれいなママさんであった。お布さんは次から次へと店を替えたが、行く先々にウイスキーがキープしてあった。そしてママさんはいずれも美人ぞろいであった。

私は静かな地味な生活から、一足飛びにキラキラ輝くネオンの生活へと変えられたのであった。歓楽街でのひとときは、私にとって夢を見ているようであった。思えばあの放蕩時代から全く離れていた世界へと、私は再び足を踏み入れたのであった。喜界教会では非行少年であった彼に付き合い、多少のビールは口にしたが、それはあくまでも彼

のためであった。しかし、ここでは何と自分のために、自分の楽しみのためにウイスキーグラスを口にしていたのである。

聖書に出てくるサタンは巧みに人を誘惑する。誘惑してその人の肉の思いを満足させようとする。もしサタンが姿を現わしたとするならば、それは口が裂け、爪がのびている黒いあの姿ではなく、一部の隙もなく着こなした立派な紳士として登場するであろう。そして、巧みにキラキラ輝いた生活、自己満足の生活へと誘ってくるであろう。私はその時、大変危険な場にいたのである。そしてその時、主イエスのご姿勢をこそ思い起こさねばならなかったのである。主イエスは荒野でのサタンの誘惑に対して「サタンよ退け。主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ、と書いてある」(マタイ四・十)と見事にサタンを撃退されたのであった。

試練(その二)

別府野口教会に赴任した翌年の三月に、長男信治が与えられた。信治の名は信仰を持って自らを治めるといふ願いで名付けた。生後三カ月目の検診の時に、全く晴天のへき

れきの結果を医者から聞かされた、

「お宅の坊っちゃんは、先天性心臓病です」。

私たち夫婦は返す言葉もなかった。心室中隔欠損症という病名である。右心室と左心室の間の膜に穴が空いているらしい。耳を当てると、ザーツザーツと確かに濁音が聞こえる。

昭和四四年頃の心臓手術は、今と違って大変な危険を伴い、またその費用も莫大なものであった。手術をしないと心臓が肥大して二十才ぐらいまでの生命だとのこと。私たちは途方に暮れ、なす術を知らなかった。悶々とした日が続く。姉のところ療養している母は、長男の出産に大喜びであったが、心臓のことはどうしても知らせることができなかった。一心に神に仕えてきたと自負している牧師の家庭に、どうしてこんな事が起こったのか、神の御心はどこにあるのかと疑心暗鬼の日々であった。

そんなある日、私は聖書から大変な主イエスのお言葉を与えられた。

「本人が罪を犯したのではなく、またその両親が犯したのではない。ただ神のみわざが彼の上に現われるためである」(ヨハネ九・三)

生まれながらの目の見えない人に対して、弟子たちがこの人が生れつきの盲人なのは、だれが罪を犯したためですかとの問いの答えである。「神のみわざが彼の上に現われるため……」とは何と明るく、慰めに満ちた言葉であろうか。主イエスは過去のことは問われず、未来に起こる恵みを示されたのである。

信治の心臓が生れながら欠陥があるのは確かである。危険な手術をしなければならぬ。そのためには莫大な費用が必要ということも事実である。しかし、神の業が信治の上に現われるために、「しばらくの軽い患難」(第二コリント四・十七)があつたのである。

私は喜びに満たされた。神様は彼の上にどんな事をなさるだろうかと期待に胸ふくらむ思いであつた。

信治は幼稚園の時に、別府の国立病院で手術を受けた。その時の費用は、全額国の負担で全く不要となつていた。

手術後は順調で、二日目にアイスクリームを食べ、三日目にはベットの所で逆立ちをした。その後ずっと、今に至るまで健康で水泳をし、マラソンまで皆と一緒にこなうことが出来た。そして今春は浪工を卒業、就職もすでに決まつている。

「あなたのみ言葉はわが足のともしび、

わが道の光です」(詩篇一一九・一〇五)

神の言葉は何と力があり、我々の目を開き、なぐさめ、正しい道を示して、それを歩ませてくれる事であろう。み言葉によつて生きる、至上の喜びの生涯を貫き通す者でありたいと心に固く誓つた次第であつた。



別府野口教会玄関前で

試練(その三)

大分地区には二一の教会があり、そのうち第一種教会が六教会、あとは皆第二種の小教会であつた。牧師は、東神大、同志社、関学、聖書神学校、農村伝道神学校と多彩であつたが、皆で協力し合い、仲良く伝道していた。

二カ月に一度、別府で牧師会があつたが、それが終わると、気の合つた者同志数人とネオンの別府歓楽街へと繰り出すのであつた。それぞれの穴場があり、格安の店で馴染みのママさんが待つていてくれる。勿論スナックであるが水割りのおかわりにつれて話はずみ、歌も出てくる。ママさん達は我々が牧師である事を知っており、時として悩みを打ち明ける。そして一様に我々の事を「客筋が良い」と言う。そのような状況の中でだんだんと教会の礼拝に来るママさんが出、中には受洗して真面目に教会生活を続ける人も生まれたのであつた。

私は同志社神学部出身のN牧師と何かしら気が合つていた。色々と伝道教会の話を交わし、時として二人で夜の別府、大分のスナックへと出掛けるのであつた。油布さんの影響が大変大きい事が実証されたわけである。当時、員子はK病院の受付の仕事をしていた。妻が一生懸命働いてゐるのに、そんな所にふらふら出掛ける牧師は、何と思ひやりのない、やくざ牧師であろうか。

また、時として別府野口教会の牧師館の二階がマージャン遊びの場となる。田舎の教会の若い牧師達が集い、夜半過ぎまで遊ぶ。勿論ウイスキーボトルを抱えてである。そ

して朝まで雑魚寝して各々車で帰っていく。彼らの酒のつまみ造り、接待の忙しさはみな員子にかかつてくる。員子の私に対する不満は段々と大きくなり、ついには離婚寸前にまで至るのであつた。

その員子のやるせない心を理解せず、依然として私は遊びほうけていた。もうマージャンはやらないでと懇願されても、若い牧師連中から頼まれると断り切れず、またもや員子に大きな負担をかけさせてしまふ。別府野口教会の十年間は、正に二人にとつての暗黒時代となるのであつた。

はみだし牧師、遊び人牧師：それが私の代名詞であつた。しかし、この愚かな牧師をも、神は今日まで導いてくださつたのである。イスラエルの初代の王サウルは真面目人間であつた。二代目の王ダビデはバテシバの失敗で見るように愚かな王であつた。神は後者を選ばれたのである。

ある時、私はポルノ写真を若い牧師達に見せた事があつた。どれでも好きなものを取れよと言うと、皆争つて好みの写真を手にした。その中に一人だけ写真を見ようともしなかつたT伝道師がいた。彼は真面目な人であつた。ところが後に女性問題を起こして牧師をやめ、遂に自殺してしまつたのである。

役員のお布さんは私をスナックに誘ってくれた。私にとってそれは大きな誘惑となつたが、お布さんは牧師の大変な生活を良く知っており、私をリラックスさせようとしたのではなかつたか。実は教会員のなかで一番影になり日向になつて牧師家族を支えてくれたのは、このお布さんであつたし、ポルノ写真を喜んで手にした若い牧師達も、今は立派な牧師になつて各地で活躍しているのである。

「神は知者はずかしのために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしのために、この世の弱い者を選び」(第一コリント一・二七)

神の知恵は何と大いなるものであろうか。

母の他界

別府野口教会に赴任して二年目の秋、母が他界した。六八才であつた。当時、母は姉の所にいたのであるが、姉が「お母さんごはんよ」と呼んだ時に返事がなく、二階へ上がつてみるともう息を引きとつていた。心不全であつたが、誠に潔い死であつた。父は私が神学部三年の秋に日本脳炎であつてなく召されていた。同じく六八才であつた。

母亡き後、母の居間を整理していたら、広告紙の裏にひ

つしりと聖書を読んだ感想を書いた百枚程の紙を見いだして驚いた。母がこんなに熱心に旧約聖書を読んでいたとは思ひも及ばぬことであつた。

私が製鉄所を退職して献身した時、先ず父が郷里から飛んできた。父は私の信仰が狂信的になつてゐるのではないかと心配したようである。次に母がやつてきた。気丈な母がしくしく泣きだしたとき、私はこれで良いのだろうかと思ひもぐらつく思ひであつたが、後できつと分かつてくれると信じ、「お母さん、イエス様が一緒にいてくださるかから大丈夫だよ」と言うと、母は「そりやあねえ、乞食だつて生きていけるからねえ」と言つた言葉を今でも忘れることは出来ない。

神学校に入学して休みに帰省した時、近所のお婆さんが「あんたのお母さんは毎日聖書を熱心に読んでゐるよ」と教えてくださった。息子の宗教がどんなものであるかを知ろうとする母の思ひであつた。父が亡くなつた後、母は乏しい生活費の中から、私のために少しばかりの小遣いを貯めていてくれた。そして「あんたが神学校に入学してから、私もさびしい心をなぐさめられているのだよ」と言つてくれた。心が熱くなる思ひであつた。

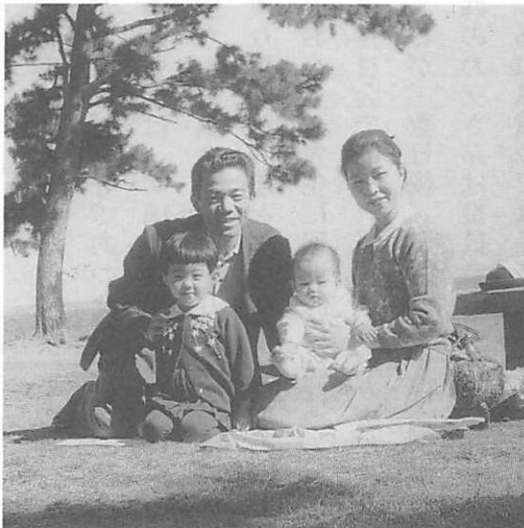
神学校を卒業して喜界教会に赴任した時も、母はわざわざ郷里の大分から来てくれた。そして教会堂で島の人たちに、生け花を教えてくれた。島には、ハイビスカス、ブーゲンビリア、クロトン等の母にとってめずらしい植物が多く、母は大変気に入っていたようであった。

母の告別式は、大分県の教団中津教会で行なった。洗礼こそ受けていなかったが、神様はきつと天国への道を開いてくださると確信している。告別式には別府野口教会の役員、親族、母の師範学校時代の友人等大勢の人たちが参列して別れを惜しんでくださった。

現在、母を持たない私は、代わりにそれ以上の母なる教会を与えられている。主イエスが十字架のお苦しみの中から、母マリヤに「婦人よ、ごらんなさい。これがあなたの子です」と言われ、次いでヨハネに「ごらんなさい。これはあなたの母です」(ヨハネ十九・二六―二七)と言われて、ご自身の亡き後を母マリヤと弟子ヨハネとが互いに慰め合い助け合って生きるべきことを命ぜられた美しい記事がある。主イエスの贖いによつて、弟子たちは母なる教会を持つ事が出来るようになったのである。また、主は別のところで、「ごらんなさい。ここにわたしの母、わたしの

兄弟がいる」(マタイ十二・四九)と言われた。主にある兄弟姉妹は、肉親以上の深い関係があるのである。教会には私の兄弟姉妹、そして私の母がいる。主のあわれみのゆえに、私はこんなにも多くの肉親以上のものを得ているのである。ここが私の郷里であり、それ故にここが私の眠る所ではないかと思っている。しかし、その眠りは、やがて栄光への御国に目覚める眠りなのである。

「わたしたちの国籍は天にある。そこから、救主、主イエス・キリストのこられるのを、わたしたちは待ち望んでいる」(ピリピ三・二十)



別府の美しい海岸で

ねたみと和解

長男信治の心臓手術は別府の国立病院で行なわれ、全くの健康体になったことはすでに述べた。しかし、心臓病が発見された当初は、莫大な費用を準備せねばならず、私たち夫婦は全く当惑していた。その時、油布さんが「先生心配しないでください」と言つて皆に呼び掛け、「信ちゃん献金」なるものが始められた。

牧師家庭では、とても多くの献金をする事が出来ないの
で、私は大分市の坂本マイクロフィルム会社でトレースの
アルバイトをして、費用の準備を始めた。週のうち月水金の
午前九時から午後四時迄、会員のS兄が下さったスクー
ターハラビット号Vで通う事になったのである。トレース
とは、図面の上にトレッシングペーパーを置き、烏口に墨
を含ませて作図する仕事である。製鉄時代の私は設計製図
の仕事をしていたので、トレースには自信があつたが、民
間の会社は特に美しく仕上げなければならず苦勞した。

○・一ミリの線を美しく引くためには、まず烏口を油砥
石で手入れしなければならぬ。細かい仕事をするため、
遂に私は老眼鏡を必要とし、それが今日まで続いている。
当時、私は四十才であつた。

信治が幼稚園に入園した年の秋、手術が行なわれ、経過

は医者が驚くほど良好であつた。そして、何とその年から
心臓手術の費用は一切国の負担となつていたのである。こ
の時「信ちゃん献金」は五十万程集まつていた。このお金
をどう取り扱うか問題となつた。役員会の席上、油布さん
は「このお金で、先生に聖地旅行に行つて頂こう」と提案
された。役員会ではそれが一番良い方法だろうと決議され
たのであるが、数日後、一婦人から待つたがかげられた。
その姉妹のお父さんは役員会のボスの存在であつた。その
姉妹は「あれは献金でなく募金である。その目的が不必要
となつた今は、募金した人にお金を返すべきである」と主
張するのである。娘の強力な発言によつて、お父さんはぐ
らつき、結局、役員会の決議がうやむやにされて、各々に
お金が返されてしまつたのである。

私は大変なショックを受けた。役員会の決議がくつがえ
された事、そしてその姉妹が私に「先生、聖地旅行に行き
たかつたら御自分でお金を貯めて行つてください」と言わ
れた事によつてである。その姉妹はアメリカにヨーロッパ
に海外旅行をした事があり、十分余裕ある生活をしている
人であつた。

幾日も悩み続けた私は、なぜ姉妹があのような発言をしたか静かに考えてみた。その時、大変な事に気が付いたのである。信治が入院していた時、同じ病院に姉妹の一人娘が白血病で入院しており、小学校五年生の時に亡くなったのであった。信治が助かり、娘は死んだ。その事で、姉妹は何とも言えないねたましい気持ちになっていたのである。この事に思い至ったとき初めて、私の心は平安を取り戻し、姉妹を理解し始めたのであった。

「愛は寛容であり、愛は情け深い。また、ねたまことをしない」(第一コリント一三・四)

教会の様々な問題の背後には、必ず「ねたま」が存在する。これを克服する道はただ一つ、主によって愛の心をいただくことである。

「信ちゃん献金」のいざござから私を悩ました姉妹を、私は理解し始めたのであったが、お互いの間には依然として気まずい関係が続いていた。その姉妹は優れたオーガニストであったが、気のせい何か以前の奏楽とは違う沈んだ雰囲気を感じられた。心のあり方で奏楽も違ってくるものだという事を始めて知った次第である。

いずれにせよ、教会員の中にそのような人が存在するという事は牧師にとつてまことにつらい思いであった。何とか早く解決をと願うのであったが、なかなかその糸口を見いだす事が出来なかった。そのような時、私はふと製鉄時代の友人とある出来事を思い出した。彼は同じ職場にいた人であったが、原因が分からない気まずい関係がお互いの間に生じてしまったのである。朝顔を見合わせても知らぬ顔、何かの用事で話をしなければならぬ時も、第三者を介して意志を通じ合うという大変厄介な関係であり、そのような状態が一カ月も続いたのであった。気まずい関係の原因が分かれば解決の道はあると思うのであるが、それが分からない。わたしたちの間でもそのような事がしばしば生じるのではないかと思うのである。

私は神の助けを願って祈った。その時、大変良い方法が神は与えてくださった。彼はラジオ、ステレオ等の製作が得意であり、そのためテスター、オシロスコープ等各種の計器を揃えていた。幸い私は五球スーパーラジオの製作に取りかかっていたので、その調整を彼に頼む事にした。組み立て終わったラジオを彼の家に持っていき「調整頼むよ」と言うと、「そこに置いて」という返事。二、三日

して受け取りに行き家に帰ってテストしてみたら、実に見事に念入りに調整してあったのである。翌朝、彼に会って礼を言うのと彼はにつこり笑ってくれた。それから今日まで彼との友情はずっと続いているのである。

この事に思い至って、私は姉妹との関係の糸口をたやすく見いだす事が出来た。姉妹が喜ぶことを何気なくしてあげれば良いのである。姉妹は花が好きで、家の庭には色々な花が植えられていた。私は花屋に行つて鉢植えの花を買い、名刺を鉢に差し込んで玄関先にそつと置いておいた。次の聖日姉妹は私に「お早ようございます」と挨拶した。そして、その日の奏楽は心なしか大変すばらしかったのである。その時からお互いの溝は取り除かれ、以前の状態に回復したのであった。そして、姉妹のお父さんは教会用の車を購入した時多額の献金をしてくださったのであった。

「だから、祭壇に供え物をささげようとする場合、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行つてその兄弟と和解し、それから帰つてきて、供え物をささげることになさい」

(マタイ五・二三〜二四)

私たちお互いの間に気まずい関係が生じた時、それをそのまま放つておいての礼拝は、主の御心になわなない事である。放つておくという事は兄弟の心のうらみを更に深くし、同時に心が真に「アバ父よ」と呼び求める事が出来なはずである。主は命を捨てて私たちと神との間の和解の業を成し遂げてくださった。それ故に私たちも兄弟との間のこの和解の務めを大切にしなければならぬのである。私たちが別府野口教会の次の日出教会を辞任して、八尾に来る最後の年に、姉妹の一人娘、あの白血病で召された恵ちゃんの十年の記念会が姉妹の家で行なわれた。姉妹には恵ちゃんの生き写しのルミちゃんが与えられていた。私は恵ちゃんの生まれかわりかと真に信じた程であった。姉妹もそのお父さんも、十年間の別府野口教会での交わりを心から喜んでくれたのであった。

不信

別府野口教会には、前任の牧師によつて結婚式を挙げたN兄が居た。彼は水道関係の仕事をしていたが、少し口数の多い性格であった。それはそれでよいのであるが、教会内の出来事で何か不満がある時、それを外部でしゃべりま

くるのには少なからず閉口した。前任の牧師は学者でドイツに留学した人であるが、その後赴任した私に対して彼は何かと批判的であった。私に対して不満がある場合、直接私に言ってくればよいのであるが、外部にその不満をぶちまけていたようであり、私は大変悲しく思っていた。勿論、その頃の私はスナック等にふらふら出掛けていくような不良牧師であつたので、非難は当然であろうが、いわゆる陰口される身はつらいものである。

当時、教会には無任所女性牧師のI先生が出席しておられ、バザーのための手芸品づくり、その他の奉仕をしてくださっていた。その頃、日出（ひじ）教会から兼牧の要請を受けていたが、役員会で決議した結果、I先生を推薦する事になり、日出教会にその旨を伝えた。ところが日出教会からは女の先生はいや、是非、私に兼牧してほしいとの返事であつた。私は止むを得ず承諾して、聖日の午後の説教と水曜日の午前中の祈祷会の奉仕をすることになった。この事が日出教会に転任する原因にならうとは、その時まるで思つてもみなかつた事であつた。

私が日出教会を兼牧するようになってから、実に驚くべき情報が一人の信徒から伝えられてきた。それは例のN兄

が、「東先生は、赴任地が決まらずさびしい思いをしておられるI先生をさしおいて、自分が日出教会を兼任している」というものであつた。「坊主憎けりや袈裟まで憎し」ということわざがあるが、私のする事なす事すべて気に入らなかつたのであろう。

この様な場合、勿論事情をよく説明して理解してもらわなければならぬ。しかし、人づてに聞いた事を、言った本人に正すということはどうか。箴言三章三十節には、「もし人があなたに悪をおこなつたのでなければ、ゆえなく、これと争つてはならない」という言葉がある。N兄は直接私に悪を行なつたわけではなかつた。ただ前任の牧師を尊敬するあまり、私に対してはどうしても親しめなかつたのであろう。牧会には大変な忍耐が必要である。私はN兄が自然に誤解に気付くのを待つ事にした。

私はある人から「呑気な先生」と言われてびっくりした事がある。確かに私は気が長く楽天的なところがあると思ふ。しかし、その気性は私が信仰を持つようになってから与えられたものである。神はすべてを知つておられる。それ故にこの方にすべてをまかせて祈ることが、何よりの解決となると確信していたのである。だから気が楽なのであ

り、待つことが出来るのである。

同じ箴言に「言葉が多ければ、とがを免れない、自分の唇を制する者は知恵がある」（十・十九）という戒めがある。私どもは語るにおそく、聞くことにすみやかでなければならぬ。聞くとは神に聞き、人に聞く姿勢である。この姿勢を崩さない限り、人を傷ついたり、誤った道を選んだりすることは無い。口は心して慎まなければならぬ。

私は思いもよらず日出教会に転任した時、真つ先に牧師館を訪れたのがN兄であった。恐らく彼は私に対する誤解に気付き、親しみを感じてくれたに違いない。私はこの事で「待つ」姿勢の大切さをあらためて教えられた。祈って待つている時、私どもの神様は最も良い時に最も良い事をしてくださるはずなのである。

胡美芳さん

「胡美芳さん、あなたそんな憎しみの心でいると、あなた自身地獄に落ちますよ。その人のために祈りなさい」。

私の口から思いがけず激しい言葉が飛び出した。彼女が受洗して一年目の出来事である。

一年前、私は胡美芳さんと彼女を導いていた別府教会の

井上姉と三人で、喫茶店でコーヒーを飲んでいた。その時突然、胡美芳さんが「先生、洗礼を受けさせてください。明日の朝、受けたいのです」と言うのである。私は戸惑った。別府巡業中の芸能人に、受洗のために何の準備もなく受けさせて良いのであろうか。しかも、私が牧していた別府野口教会は旧聖公会として教団に残った教会であり、とても役員会は承諾しないだろうと考えたからである。

このような状況の中で、私はふと「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある」（伝道の書三・一）の言葉を思い起していた。明後日、東京に帰ると言われる胡美芳さんにとって、今がチャンスではないだろうか。受洗の心が与えられたのは井上姉の導きによるのではないか。私は胡美芳姉の言葉の背後には、神の御手があると直感した。そして、ギデオンの羊の毛で神の御心を確認したように（士師記六・三六〜四十）、教会の役員一人一人に当たって、どのような返事が返ってくるか確かめる事とした。すぐに電話した所、驚いたことに皆の返事は一つであった。「先生が良いと思われるなら、洗礼を授けてください」。

翌日午前六時に胡美芳姉と井上姉、それに教会の役員三

人が来られて、会堂で洗礼式が厳肅に行なわれた。胡美芳姉の顔は涙また涙であった。

それから一年後である。胡美芳姉が東京から別府に飛んで出てきて、「二千万円の詐欺に会った。あの憎い男を牢獄にぶちこんで、一生涯出られないようにしてやる」と怒りに身を震わせて言うのである。聞くところによると五十万円と印鑑一つで、すぐに倍になる儲け口があると持ちかけられ、その男を信用してしまった結果、何と胡美芳さんが二千万円支払わなければならない毘にひっかかってしまったのである。井上姉の知り合いのクリスチャン弁護士を呼んで策をめぐらしたが、弁護士さんは「相手はあらゆる抜け道をつくっている。今の法律ではどうしようもない。胡美芳さんの負けです」との答え。その時、彼女が言った「牢獄にぶちこんでやる」という言葉に対して、私が「その人のために祈りなさい」と言ったのであった。

胡美芳さんは、きよとんとした顔で私を見ていた。心の中で「この牧師さんは何という事をいうのだろう。どうして私がああ男のために祈ることができよう」と思ったに違いない。彼女は肩を落として東京に帰っていったが、その後、あの水野源三さんに出会うのであった。「こんな状況

の中で生きておられる人がいる。それに比べて、この私は何とわがままであった事か」。彼女の心に変化が起こり始めた。自分の欲からあの男に罪を犯させてしまった……と本当にその人のために祈り始めたのであった。

何回目かの裁判の時に相手の男が現われ、自分が悪かったと詫びたのである。そして二千万円は払わずにすみ、裁判の費用だけの負担となったのであった。

「もし人を許さないのであれば、あなたがたの父も、あなたがたの過ちを許してくださいませんかであろう」

大変厳しい、お言葉である。

(マタイ六・十五)



胡美芳さんと共に

二千万円の詐欺事件が解決してから、胡美芳姉は新しく生まれ変わった。神様は信仰の向上のために、色々な試みを与えて下さるお方である。これは私たちにあって、「主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を鞭打たれるのである」(ヘブル十二・六)とあるように、まさに父が子に対して与える訓練なのであった。それ故、私たちは種々の問題の中で、その背後に差し伸べられた主のあわれみのみ手をしっかりと見なければならぬ。その時、「すべての訓練は当座は喜ばしい物とは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」(同十一)の御言葉が成就されるのである。

新生した胡美芳さんに変化が起こった。これからキャバレーやステージで歌謡曲を歌うのを一切止めると言うのである。芸能人にとっては、地方巡業で歌うことが最も大きな収入となる。その収益を捨てる決心をしたのである。そして、讚美歌を歌って、歌と証によって伝道する福音歌手になりたい、即ちただ神によってのみ生きるという決意を表明されたのであった。

それからの闘いは大変厳しいものであった。それはただ

御言葉を宣べ伝える事のみによって生きる伝道者の生活と変わらないものである。幸いなことに、胡美芳姉には「支那の夜」「夜来香」等数々のレコードの印税が入る。しかし、これとて生活全部を支えるには至らないのであった。

福音歌手として第一に行ったのは、讚美歌のレコーディングであった。クリスマスに備えて「きよしこの夜」のタイトルで讚美歌一〇九番の練習を始めた。歌謡曲から讚美歌歌手への変身は、素人が考えるほどやさしいものではなかった。先ず言葉が分かるようにはつきりと歌わねばならない。そして歌謡曲のイントネーションから、神をほめたえる、心の底からの讚美が求められる。これは神を見上げ、神によって感動されるのでなければ不可能なことであった。

練習を終え、東京シャロームでレコーディングが始まったが、クリスチャンディレクター宮川さんは、「そんな調子では駄目、もう一度やり直し」と何度も何度もやり直させた。これは二十年ものキャリアを持つ胡美芳さんにとって、まことに屈辱的なことであった。しかし、彼女はそれに涙を流しながら耐えた。何としても福音歌手にという彼女の決意が忍耐する力を与えたのである。

「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す」(ローマ五・三―四)

祈っては歌い、歌っては祈り、遂に会心の作が神の恵によつて出来上がったのであった。そして、この試練を通して福音歌手胡美芳の第一歩が始まったのである。

芸能の世界は華やかさだけが目立つ。しかし、その背後は、激しい競争、ねたみ、空しさが常につきまとう。私は一時華々しくデビューした歌手の松島あきらさんと、別府のスナックで一晩中語り合う機会を得た。彼は切々と芸能界の激しい競争、それにとり残された者のさびしい心境を語ってくれた。翌朝、別府駅に見送った時、彼は固い握手をして、「頑張ります、祈ってください」と言つて別れたが、その後、ラジオでもテレビでも彼の歌を聞くことはなかった。

胡美芳さんも、もし神様にとらえられてなかったら、依然として芸能界の空しい道を歩んでいたのではなかっただろうか。しかし、彼女は華やかさを捨てた。多額の収入を捨てた。そして神による真の喜びを得、その喜びを多くの人に宣べ伝える者となり得たのであった。

「主キリスト・イエスを知る知識の絶大な価値のゆえ

に、一切のものを損と思つている。キリストのゆえに、わたしはすべてを失つたが、それらのものを、ふん土のように思つている」(ピリピ三・八)

日本で第一号の福音歌手の誕生である。

運転免許

私は一九五四年(昭和二九年)に、普通自動車の免許を製鉄時代に取得した。当時、自動車はまだまだ普及していない時代であつたが、私は製鉄構内を運送部の友人から昼休みにトラックを借りて乗り回していた。今は若い人でも就職して一年もすればローンで素敵な車を買つて楽しんでるが、当時はとてもそんな余裕はなかった。しかし、あの年のボーナスが思つたより多額であつたので、私は思い切つて中古の一二五CCの二輪を買ひ、自分の楽しみと教会の伝道の手伝いに使つていた。

献身した時、私は教員免許、その他すべての免許をストープの火で焼いてしまったが、車の免許だけはそのまま持つていた。ところが神学校に行つてゐる間に切り替えの時期が来たのに、何と私は気軽に申請を怠り、ほごにしていまったのである。いつでもまた取れるという気安さと、警

察署に行く時間が思うように取れなかったのが、その理由であったと思う。それから私の免許再取得への苦勞が始まるのであった。

喜界教会に赴任した時、九州教区の常置委員から「宣教師の方から、私へのバイク購入の指定献金がある」とのこととで、一万五千円をいただいた。私の喜界教会での謝儀の一カ月分である。私はしまったと思った。免許さえ持つていれば、直ちに伝道の足として大いに利用できたはずなのであった。

喜界教会は船着場から四キロ程離れた所にある。船着場はいわば島の中心の町で役場、学校、医院があり、商店が細々ながら点在していた。それ故、食料品その他の日常に使うものは、どうしても四キロの道程を歩いて船着場まで行かなくてはならなかった。往復八キロである。

喜界町の二輪の試験場は、野原に繩を張りめぐらしてあるだけの簡単なものであった。私はそのコースを歩いてみて、簡単に試験に受かると油断していた。ところが、当日私は一番最初の受験になっていた。落ちるかもしれないという予感が頭をかすめてたのが運のつき、私は第一の角ですべって転んでしまったのである。乗り慣れた二輪で失策

するとは！私は自分に腹を立てていた。それから数日後の二度目は思った通りの運転で合格したが、油断大敵という言葉をおこの時ほど身にしみた事はなかった。島での生活は二輪のおかげで大助かりであった。買物に、牧会に、伝道に、そして島を訪問してくださるお客さまを厚かましく荷台に乗せて運ぶのである。員子も島で生まれた裕子も、そして作家の高見沢潤子さんも、私は荷台に乗せた。

別府野口教会に赴任して、最初のうちは前任の牧師が使っていた自転車を用いていた。ある時、役員の鉄工所を経営するS兄が「先生、自転車では坂の多い別府では大変、会社のスクーターが一台空いているから、それを使ってください」とラビット号を貸してくださった。このスクーターはしばらく大活躍した。ところが年を取った会員の送り迎えや、遠いところの訪問にスクーターはどうしても限度がある。私は車の免許の再取得を思い立ったのであった。

その頃、車の試験は相当難しくなっていた。私はコースを貸してくれる車の練習場で一カ月程運転の練習をした。それから自信をもって大分市の試験場へと出掛けたのである。しかし、第一回、第二回はほんの少し車を動かしたただけで、見事に落第であった。これは技術の失敗であった。

三回、四回目は確認が不確実とのこと。

「ちゃんと、右、左を見ました」。

「いや、首を振っただけで見ていない」。

試験官とのこんなやりとりの中で、私は免許を持った事のある自負心を打ち砕かれていくのであった。

「油断することなく、あなたの心を守れ」(箴四・二三)

油断とは何であろうか。それは自分を高く評価する事ではないだろうか。

「私は何でも出来る、こんな事くらいわけない」、このような心でいる時、どんでん返しに会わされる。

「立っていると思う者は、倒れないように」

「気をつけるがよい」(第一コリント十・十二)

聖書は常にこの傲慢を打ち砕き、全き謙虚を教える。

試験場へ向う私の心は、「神様、私の高ぶりをお許しください。あなたが共にいてくださるように」の祈りだけであつた。そして、五回目に試験官が満点ですといつてくれたのであつた。

その後、ホンダの黄色の軽四輪が与えられた。母が召された後に少しばかりの貯金が残されたので、二十万円の中

古車を購入することが出来た。亀の井バスKKで中古車を取り扱っていたが、同社の次長であつたM役員の特別な計らいで格安の値段であつた。免許は取つたものの、自分の車を持たなかつた私は天にも昇る思いであつた。幾度も車に入つてハンドルやチェンジレバーを手でさすり、計器を眺めては悦に入つていた。

今の若者は、車種を一念に選び、気に入つた車を購入する。少々値が張つても問題にしない。私どもが考えても驚くべき高価な車を、ローンで手に入れる。彼らの生きがいは車なのであるか。私は故障なく動きさえすれば良いと考えている。問題にするのは、その用途なのである。

地方の教会では車は決して贅沢品ではない。伝道、牧会のための必需品なのである。大分県の教会を端から端まで車で行くと五時間かかる。地方教会は協力が絶対に必要である。自分の教会だけうまく行つていればそれで良い、ではすまされない。他教会との協力の中で教え、教えられて困難な状況の中で、新しい知恵と力を与えられて励まされたいのである。

大分地区には二一の教会があるが、そのうち十四の教会が第二種教会である。残りの内三つの教会が第一種教会で

ありながら、その条件を満たしていない。それ故、学閥、旧教派の違い等を問題にしている、絶対に協力はできないのである。

大分地区の集会は先ず隔月毎に伝道協議会が別府の豊山会館という別府教会所属の集会所で行なわれる。これには各教会の牧師と信徒の有志が集まって、熱心な協議がなされる。議長は地区委員長で、これは年一回四月に行なわれる地区総会で投票によって選出される。私も二期四年間、地区委員長に選任されたが、大変荷が重い仕事であった。

地区には伝道部、教育部、社会部、教師部があり、各々伝道協議会で話し合われた事を積極的に推進していく。昼食をはさんでの長時間の協議会が終わると、その夜はネオンの別府の街へ出掛けていく。そしてなじみのスナックでの交わりが続くのであるが、これが大変お互いの親しみを増し、また伝道の良き知恵も与えられるのであった。

地区は七つのブロックに分かれていて、壮年会、婦人会の活動も盛んであった。これらの集会には車で出掛けて参加し、更に交わりを深める。地区の各集会は、まさに主にあつて一つの血の通った暖かいものであった。現在、大阪教区に於いて地区、教区の疎遠さに痛みを感じている。

「体が一つであっても肢体は多くあり、またからだのすべての肢体が多くあつても、からだは一つであるように、キリストの場合も同様である」(第一コリント十二・十二)とあるように、お互いの親しい交わり、主にあつて一つの姿勢がない限り、教会は各個主義に陥り、力のないものとなってしまう。教会においても、地区、教区においても、皆からお互いの欠けを補い合つて、強力な伝道の体制を整える必要を痛感する次第である。



クリスマス祝会 (二人羽織のアトラクション)

転任の備え

別府市には、栄光園という社会福祉法人の児童福祉施設がある。この施設は九州教区の各教会が後援会を組織し、特に別府市内の各教会が援助に力を注いでいた。施設は乳児から高校生までの世話をしており、私はその理事の仕事を任ぜられていた。理事を務めて三年目に、市立の保育園が栄光園の隣接地に建設され、その管理を栄光園が行なう事になった。

ある日、理事長が私には是非保育園の園長になってほしいと申し出られた。勿論、教会の牧会をしながらの園長である。仕事は大変忙しくなるのであるが、牧師以上の園長給が支給されるはずであった。私は悩んだ。肉の思いでは、経済的に厳しい状態から豊かな収入の楽な道が備えられているのを断る法はない。だが一方、御言葉を宣べ伝える事だけによって生きようとする私の信念がくつがえされる事になるのである。

私どもの前には常に二つの道があり、私どもはその分岐点にいつも立たされている。即ち、神に従う道とこの世の習わしに従うこの二つの道である。そのどちらを選ぶかは私どもの自由である。園長になってキリストの愛を子供た

ちに伝えることも大変大切に思えた。だが教会の仕事は、

他の仕事をしながら片手間に出来ることであろうか。私は幾日も悩み、祈り続けた結果、やはり園長の仕事を断る事にした。教会は信ちゃん献金のトラブルで見ると、私の牧した教会の中で最も問題の多い教会であった。

それ故に特に私なりに力を注がねばならないと考えた結果であった。園長の仕事を断った時、私は悩みから解放され、広い所に立つことが出来たのである。

「あなたがたの中の戦いや争いは、いったいどこから起るのか。それはほかでない。あなたがたの肢体の中で相戦う欲情からではないか」(ヤコブ四・一)

私どもの中に悩みや何かふつきれない思いが生ずる時、必ずその背後に欲があることに気付かされる。この欲は、ある時は金銭的な事として、ある時は自分の思いを遮二無二通したいエゴとして、また自分が必要以上に高く評価されたい思いとして現れることが多い。人間この欲のために常に苦しむ。この欲を捨てた時、そこに初めて自由と喜びが与えられるのである。

別府野口教会での最後の一年半、私は日出教会の兼牧をしていた。前任のT牧師の時に、冬の寒い日に牧師が石油

ストーブをつけたまま喫茶店にコーヒーを飲みに行き、その間に牧師館が焼失してしまった。すぐに隣の民家に類焼しなかったのは不幸中の幸いであった。T牧師は自分の責任として何とか牧師館建設のため費用を稼ごうとして別府のスナックの夜の仕事を始めた。その結果、自ら没落の泥沼へと落ち込んでいくのであった。

一人のボスの役員は、牧師館くらい自分の力で再建させてやると言いながら、結局一円の献金も捧げずじまいであった。その人は多くの資産を持っていたが、痛で亡くなり、仏式の葬儀をされ、資産は子供がなかったので他人に渡ってしまった。

各教会や多くの人の献金によって牧師館は再建された。ところが、次の年の台風で裏の土地が崩れ落ちてその修復にも多額の費用を要するようになった。思わぬ災害や信徒間の不信で信徒は四散し、T牧師も辞任したので、日出教会へは車で二五分くらいの近い教会を牧していた私が兼任する事になったのである。

兼牧の間、日出教会の集会は午後三時から聖日礼拝、水曜日午前十時から祈禱会で週に二度教会に通い、水曜日は朝から夕方まで牧師館に在宅して訪問を受けていた。

保育園の園長を引き受けていたら、とても兼牧は不可能であった。神の手は常にすべてを先取りして備えられているのである。礼拝も祈禱会も五、六名であったが、皆熱心に求めていた。そして、誰一人あの役員や前任の牧師を非難する人はいなかった。ただひたすら祈り続けていた。この数人が後の日出教会の核となっていたのである。そして兼牧を続けていた私が、よもや主任担任として赴任するなど全く考えも及ばぬ事なのであった。

「わたしは終わりの事を初めから告げ、まだなされてない事を昔から告げて言う、『私の計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と」

(イザヤ四六・十)

高校を卒業してストレートで神学校に入学し、そのまま地方教会の主任担任教師になるのは、大変危険なことである。日出教会の前任の教師は、学部四年を卒業してすぐ赴任したのであった。大学院の二年間は実践的な教育がなされ、夏には短期ではあるが各教会に派遣されて、牧会、伝道を学び、最終学年では伝道旅行に出掛ける。前任のT教師はこの大学院での教育も受けず、社会に出た経験もないまま教会の全責任を負わされたのであった。どこからどの

ように手を着いたら良いか分からぬまま、日を過ごしていたようである。そして牧師館の火災、別府の夜の仕事と思わぬ出来事の中で、本来の牧師としての仕事から縁遠い所に置かれてしまったのであった。

私も神学校を卒業して直ちに僻地の喜界教会に赴任したのであったが、そこで支えられたのは少しばかりの大学院での学びと十年間の社会生活の経験、そして若い頃の放蕩時代の苦しい体験があり、それらが良い方向に生かされたからであつたと思う。

人口二万人の小さな城下町で火事を起こすという事は、ただそれだけで町の人々の信用を失う。さらに夜のアルバイトに非難の声が上がり、多くの信徒が教会を去って行った。後に残された数人の信徒によつて、日出教会は細々と支えられていた。この数人は祈りの人であつた。どのような状況の中でも決して牧師を非難せず、町の人々との間にあつて必死にとりなしを続けていた。困難な状況がかえつて彼らを力づけていたのである。

「何事も思い煩つてはならない。ただ事ごとに、感謝をもつて祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四・六)

これが彼らの祈りであつた。

数名の群れと共に、私は兼牧の仕事が続けていた。別府から日出まで美しい海岸線を車で二五〜三十分で行くことが出来る。日出の海岸は内村鑑三が東洋のナポリと激賞したように大変美しい。私は仕事の暇を見つけては、よく海岸線を折りつつ散策した。日出町立小学校は城の後の上に建っている。校庭内の天守閣跡からの眺めは、まさに絶景である。

主イエスは激しい伝道活動の暇の間に幾度も静かな山に引きこもり祈りをされた。主の力はこの祈りから与えられたのであろう。主イエスもかく祈られたのに、我々は何と祈りなきものであろうか。祈りのないところには信仰もない。祈りなき歩みは、我が願いを通さんとするあゆみであり、その歩みはしばしば我々を間違つた道へと迷い込ませる。その道には決して祝福がなく、ただ肉の欲を満たすだけである。

「肉に従う者は肉の事を思い、靈に従う者は靈の事を思うからである。肉の思いは死であるが、靈の思いは命と平安とである」(ローマ八・五〜六)

ある日、私は例の天守閣跡で日出教会のために祈っていた。すると突然、「お前はこのままで良いのか……」という声を聞いた。その声がどこから聞こえたのか分からない。多分、私が思っても見なかった心の深いところからの思いであったに違いない。私はしばし驚いて自分に問い直してみた、「お前はそのまま良いのか……」と。

員子は病院の事務の仕事をしている。それに牧師謝儀。まあまあ収入である。この収入の上にあぐらをかいて、しかも片手間で日出教会の兼牧を、お前はいつまでも続けていくのか。私は自問自答した。答えはなかなか与えられない。もし別府の教会をやめるようになれば、たちまち経済的に困窮に陥ることは火を見るより明らかなことであった。数人の教会員、しかも経済的に余裕のある人もいない教会で、牧師家族四人が支えられるであろうか。私は幾度も幾度も現在置かれている状況を思い返していた。兼牧先の日出教会へ別府の教会を辞任して赴任すべきか。とても出来ない。しかし日出へ行くべきであるという声はますます強く私を支配するのである。打ち消しても、打ち消しても追い掛けるように迫るのであった。全く自分の意志とは反対の声に打ち拉がれ、私は答えを員子に聞くことにして

祈りの座を立ち上がった。

夕食後、私は員子に「日出に行こうか」と言ってみた。員子はしばらく間を置いて「ここをやめて日出教会に赴任することですね」と答えた。そして、何と彼女は「行きましよう」と言うのである。

別府野口教会の十年間は、まさに私どもにとって暗黒の時代であった。別府という湯の町観光の地で、世俗的な教会の中で苦しみ、員子に働かせておきながら、私一人不良牧師達と共にスナックに現われ、麻雀にうつつをぬかし、どれだけ員子を苦しめ、教会に迷惑をかけたことであろうか。結婚以来、夫婦間の葛藤が最高潮に達した時代でもあった。しかし、香里教会時代の一年、喜界教会の四年、別府野口教会の十年と、この十五年は決して無駄ではなかったのである。

人は多くの葛藤を経て成長する。

「苦しみにあったことは、私に良いことです。これによつて私はあなたのおきてを学ぶことができました」

(詩篇一一九・七一)

私が自らの不徳によつて招いた苦しみであったが、神はこれをも良きに変えたもうたのであった。十五年を経て、

夫婦間に共に主にあつて一つとなる關係が新しく生まれたのであつた。私どもは心を一つにして、日出教会に赴任する事を主のあわれみによつて決意したのであつた。

神はまことにいじわるな事をなさつて、私どもを試みる方である。日出に赴任を決意した数日後に、当時の神学部長小林信雄教授から電話がかかつてきた。「東君、広島教会に行かないかね。動きたい意志があるように聞いたが……」というものであつた。どうしてそのような心を持っていた事が知られたのか私には分からなかつた。別府の教会で苦しんでいた時、私はどこか大きな教会から招聘してくれないかなと、はかない望みを抱いていたことは事実である。恐らくスナックなどで同僚の牧師に、何気なく苦しみを漏らした言葉が伝わっていたのかも知れない。広島教会は私が望んでいた第一種の教会であつた。会員も多し、経済的にも潤っている教会である。日出の事が神から示されていなかったら、当然飛び付いていた話であつたと思ふ。しかし、今や私の心は定まつていた。

「あなたがわたしの心を広くされる時、わたしはあなたの戒めの道を走ります」(詩篇一一九・三二)

私は部長に答えた、

「もう日出教会に赴任する事を決めています」。

一九七八年二月初旬の午後三時から聖日礼拝に、当地区委員長であつたN牧師と共に日出教会に出掛け、N牧師が礼拝の説教をされた。礼拝後、数人の教会員を前にして、N牧師は無牧であつた日出教会に後任牧師が与えられる事を告げた。そして「どんな事があつても牧師を支え、共に教会を再建し、宣教の業にはげみますか」と問うた。

教会員は勿論承諾の返事をした。そして、その先生はどなたですかと尋ねた。N牧師は「その人は、現在日出教会を兼牧している東牧師です」と言つた時、長い間の沈黙が続いた後、あちこちですすり泣き始めたのであつた。

帰りの日出から別府までの道路には多くの信号がある。ところが、その日は信号がすべて青で、車はノンストップで別府野口教会に着いた。大変めずらしい事であつた。N牧師は、「これからの前途の祝福が象徴されている様ですね」と言われた。しかし、実際には大変な苦勞が待つていたのである。だが心を一つにして新しい世界へと向つた夫婦にとつて、その困難な道は喜びであり、主もまた常におられる、次から次へと道を開いて下さるのであつた。



クリスマス祝会

送別会

「来週の月曜日の午後五時にS姉のアパートに来るように」。N牧師からの電話であった。S姉はキャバレーのホステスで、以前用があつてN牧師と共に訪問した事があつた。当日定められた時刻に行くと、何と数名の不良牧師と同人数のS姉と同じキャバレーのホステスが待っていた。コンロの上には水炊きが乗せてあり、ウイスキーのボトルが数本並んでいた。

「東先生、ようこそ。今日は先生が日出教会に赴任される送別会です。一同心から祝福します。今晚は大いにやり

ましょう」。N牧師の挨拶と同時に拍手が巻き起こった。私は一瞬戸惑った。つい先日、日出教会への赴任を神の御心と信じて重大な決意をしたばかりの時であつたのに、何と世俗的なもてなしであろうか。

私は時々、N牧師その他の牧師から誘われてスナックに行つた。スナックでの勘定は割勘であつたが、人間酔いが廻ると大胆になるものである。「キャバレーへ行こう」と誘われる場合がある。そのような時には私には割勘では話にならないので断るのであるが、無理に引つ張つて行かれて、結局支払いは誘つた人が負うことになるのであつた。

支払う人は皆付帯事業の責任者であり、牧師謝儀以外に収入がある。その謝儀以外の収入の方が多いのであつた。牧会、伝道、各集会の説教、それ以外に幼稚園、保育園の雑多なしかも責任ある仕事があつて休む暇もないのである。

彼らのストレス解消の道は限られた範囲内の、ささやかな「豪遊」以外にはなかつたのではないだろうか。思えば今日、右から左へと億という金を動かす政治家に比べれば、何と慎ましい「豪遊」ではなかつただろうか。

宴もたけなわのなつたところで、N牧師は「さあ、出掛けようか」と一同にめくばせをした。宴の後はそのままに

(S 姉はその後が大変だったと思う)、一同はそれぞれのなじみのホステスと共に彼女の属するキャバレーへと向った。H キャバレーには、三十名程のホステスがいた。別府にはスナック、バー、キャバレー、トルコ風呂と歓楽街が至る所にある。H キャバレーは其中でも料金は格安で、しかもサービスは行き届いていた。一同は予約してあった大テーブルの周りに陣取った。直ちにビール瓶が林のように並ぶ。そして、ブルースからワルツ、タンゴ、ルンバへと楽団の演奏が続く中で、数人の同僚が踊り始めた。私も昔とった杵柄(きねづか)を満喫して踊りの輪に加わった。その踊りの中に前任の日出教会のT 牧師もいた。彼は何とも嬉しそうに下手な踊りをしていた。後に彼が自殺するなど全く思いもよらぬ事であった。牧師となる道の何と厳しいものであるか。彼は今苦悩をこの華やかさの中で紛らわしていたのであろう。後任の牧師を歓迎するために彼は多額の負担を承知の上でわざわざ参加してくれたのであった。凡人には出来ないことである。

楽団の演奏はルンバからジルバへ、そしてツイスト、チャチャチャへと変わっていった。キャバレーの客は憑かれた者のように熱狂していた。しかし、それとは反対に私の

心はますます醒めていくのであった。人の心は外の華やかな環境によつては決して満たされるものではなかった。「何でも私の目の好むものは遠慮せず、私の心の喜ぶ者は拒まなかった。私の心が私のすべての労苦によつて快楽を得たからである。」と言ったコヘーレスは、同時に「空の空、空の空、いっさいは空である。」(伝道の書一・二)と言っている。この日私はのだ自慢大会で鐘を鳴らして多くの賞品を得た。しかし、この華やかさの裏に日出教会への責任がずっしりと重くのしかかっていたのであった。別府でのこの思いもよらぬ豪遊が、私の第二の放蕩のピリオドとなつたのである。



クリスマス燭火礼拝 (別府野口教会)

第五章 日出教会時代

日出教会へ

一九七八年の三月末、いよいよ十年間牧会を続けた別府野口教会を辞任して、兼牧先の日出教会への引越しの時が来た。書籍は前々から段ボール箱につめて車で運んでおいたので、その他の家財道具の運搬である。整理してみると何と長年使わないで押し入れや倉庫にしまっていた物の多い事か。色々と考えて、これから先絶対使わない物を思い切つて廃棄処分にすることにした。会堂前の駐車場に処分する物が山と積まれた。これらは市役所に積んで運んでもらったが、トラックの荷台一杯になってしまった。

日出教会では多くの収入の当てもなく、生活は極めて困難であることを承知していた。それだけに生活は慎ましく簡素化されなければならない。もともと簡素の素という字は、ありのままの剥出しの状態を意味し、簡という字は選ぶという意味がある。我々は自分の欲するままの生活の中から、大切なものを選び取っていく必要がある。

主イエスもマルタに、「無くてならぬものは多くない。いや、一つである。マリヤはその良いほうを選んだのだ」

(ルカ十・四二)と言われた。無くてならぬ一つのもとは、マリヤの姿勢、即ち主の足元に座つて御言葉に聞き入る姿勢であつた。日常の信仰生活の中で我々は常に祈り、今何が一番必要か、何をなすべきか、主イエスならこの場合どうされたであろうかと祈りのうちに歩むべき道を選ぶものでなければならぬ。

家財道具は、私が二トンのディーゼル車をレンタカーで借りて運んだ。途中で質流れ品店で冷蔵庫を格安で購入して積込み、日出へと向つた。米櫃の蓋が風に吹かれて道路に落ち、後続の車がそれを割ってしまったので、日出在任中はガラスの蓋で代用し、新しい米櫃を購入し得たのは八尾教会に赴任してからであつた。

日出教会の牧師館は、一階が六畳の牧師室兼応接室、同じく六畳のDKと六畳の畳の居間、それにトイレと風呂場である。二階は六畳と八畳の洋間で、六畳の方はベットを入れて夫婦の寝室とし、八畳の方は真ん中をカーテンで仕切つて当時中一になった裕子と小四の信治の部屋にした。部屋はすべて本間で広々としており、東西の両隣は広い庭で、南北は広く開いており、二階の寝室は真夏でもそよそよと風が入り、扇風機を全く必要としなかつた。

空気はきれいで、水道は湧き水の大変おいしい水であった。日出は海の幸、山の幸が大変豊富であった。春はせりから始まり、わらび、ぜんまい、ふき、みょうが、竹の子と続き、海岸では一〜二時間程でバケツ一杯のあさが採れた。夏から秋にかけては、海岸の防波堤の上からあじ、いわし、さゆり、このしろ、めじな、めぼる、かかれい、たちうお等多彩な魚が面白いように釣れた。山では、はつたけ、しめじ、しいたけ等茸狩りが楽しめた。すべてこれらは自然のもので、お金は一銭も必要としなかった。釣りの時も海岸で餌のごかいを掘ったが、あじのさびき釣りの時だけ、餌代として二百円程必要であった。

収入が半減する教会で、これらの海の幸、山の幸はどれ程我が家の経済を助けてくれた事であろうか。自然の美しさ、そして富は絶対にお金で買えるものではない。神が万物と人を創造された時、「神が造ったすべての物を見られたところ。それははなはだ良かった」(創世記一・三一)とある。美しい自然を、そして善良な人の心を子々孫々に至るまで大切に継承していかねばならない。そしてこの事は我々の重大な使命なのである。

教会では数名の信徒が心を合わせて祈り続け、牧師一家

を待っていてくれた。これから新しい環境、新しい教会での出発である。さあ頑張ろう。神は常に共にいて必ず支えてくださるはずである。



日出教会 (後方が牧師館)

家庭集会

日出教会の牧師館の裏は十坪程の土地があり、その先は高さが四メートル程の崖になっていて、崖下は日出町が造った車百台入る無料の駐車場になっている。日曜日は駐車場はがら空きで都会の駐車場のない教会に比べて大変恵まれた立地条件であった。この裏庭に、早速、上田姉がみか

ん、びわ、柿、きんかん、梅の苗を植えてくださった。上田姉は大麥花がお好きで、団地にある自宅の庭は、四月になると百花らんまん見事な景観となる。

ある日、上田姉が牧師館を訪問されて是非自宅で家庭集會を始めてほしいと申し出られた。上田姉は五百戸程の辻間団地に住んでおられ、毎月自費で信仰の雑誌「心の友」五十部を購入されて、一軒一軒訪問して配っておられたのである。

第一回の集會は、私が赴任してすぐの四月十四日（金の午前十一時から始まった。別府から持ってきていた車で員子と二人で行くと、すでに十名程の人が集まっていた。キリスト教は初めての人ばかりであった。私は大変感動した。日頃の訪問の成果が忽ち表れたのである。

エゼキエル書には大変恐ろしい言葉が記されている。

「わたしが悪人に『あなたは必ず死ぬ』と言うとき、あなたは彼の命を救うために彼を戒めず、また悪人を戒めて、その悪い道から離れるように語らないなら、その悪人は自分の悪のために死ぬ。しかしその血をわたしはあなたの手から求める。しかし、もしあなたが悪人を戒めても、彼がその悪をも、またその悪い道をも離れないな

ら、彼はその悪のために死ぬ。しかしあなたは自分の命を救う」（エゼキエル書三・十八、十九）

私どもが日頃付き合っている人に、一度も福音を語らず終いで、もしその人が亡くなった場合、福音を伝えなかつた責任を神から負わされるというのである。上田姉はいつも、後がない、後がないと言われていた。当時七五才であった。何とか一人でも多くの人に福音をと上田姉は燃える思いを持っていたのである。この集會から旭さんという姉妹が先ず受洗した。日出教會は九州地区ではあまり知られていない地方の教會なので、教区總會の時などよく「日の出教會」と言われたものである。東が日の出教會に赴任して最初の受洗者が旭さん（あさひ）とは何とおめでたい事であろうか。大変縁起の良い話であるが、教會再建の苦勞は、それからずっと続くのであった。

教會再建の基は何といつても家庭集會の充実からであった。教會は敷居が高いとよく言われる。キリスト教が初めての人は、教會堂に入るのに、余程の勇氣が必要と思われる。しかし日頃付き合っている人の家に招かれる場合は、割合簡単に行く事が出来るのではないだろうか。上田家では、毎月定期の家庭集會を行なう事が出席者によって決め

られた。この話を聞いて次から次へと家庭集会の申し出があり、定期の集会が続けられていくのであった。四月二十七日に木村家、五月二五日に徳富家、七月十二日に松本家で集会が始まり、九月十七日からは隣接の山香という町にある酒屋さんの二階を借りて、第一と第三日曜日の夜、定期の集会が始められたのである。

全家庭集会までに五名程の求道者が与えられ、イースターやクリスマスなどの教会の礼拝に誘って、その中から徐々に救われる魂が与えられ、教会再建の道が開かれていくのであった。

「恐れるな。語り続けよ、黙っているな。

あなたには、わたしがついていく。誰もあなたを

襲って、危害を加えるようなことはない。この町

には、私の民が大勢いる」（使徒行伝十八・九〜十）

この時与えられた、力ある御言葉である。

日出町の自然

日出町は人口二万人の城下町である。教会の裏の崖下は昔の城の外堀であった。教会の並びの家は土壁の堀が続く屋敷であり、旧家老の家でもあったと聞く。旧い人の間で

は、結婚の際の履歴書に士族、平民の記入を求めることがあるそうで、全く封建的な風潮の強い町であった。別府は四国などから移り住んでいる人が多く、植民地的な町であったが、日出に転動してからその環境の相違に戸惑うことがしばしばであった。家庭集会でも挨拶はきわめて丁寧であって、豊に頭をすりつけるようにしておじぎをする。そして脇息（きょうそく）まで持ち出す家もあった。

隣の山家町の酒屋さんの二階を借りての集会は、また一味ちがうものであった。二、三人の教会員が必ず応援のために車に同乗していく。集会後の交わりのため伝道費からお茶とお菓子を用意し、お湯は現地で沸かす。酒屋の主人は山香在住の河野さんという信徒の従兄弟であり、夫婦揃って集会に出席し、人集めに積極的に協力してくれた。面白い事に、時折りこの集会に断酒会のリーダーの方が来られるのである。酒屋の主人に「酒屋に断酒会の人に来て良いのですか」と問うと、「酒は楽しく飲むもの、アルコール中毒になつては困るので、断酒会の趣旨には反対しません」との答えが返ってきた。

リーダーの方は、常にノートと鉛筆を用意して熱心に説教を筆記する。そして、お祈りの言葉まで丁寧に書き留め

る。断酒会でのお話に大いに役立つとのことであった。断酒会ミーティングの時だけでなく、常日頃メンバー相互の存在を確認し合い、電話したり、直接合ってお互いに励まし合う事を忍耐強く続けているそうである。

教会もある一つの目標のために、このような熱心さを是非学びたいと思う。

城跡には町立の小学校が建っており、城下の海底から三ヶ所清水が湧き出ている所がある。そこにかれいが好んで集まる。このかれいは「城下（シロシタ）かれい」と名付けられ、身が引き縮まった特別に美味なものである。皇太子と美智子妃が大分に来られた時も、わざわざ日出まで城下かれいを食べに来られた程である。予約していないとすぐには食べられないもので、私も二、三度食べたが、さしみ、吸い物、唐揚げすべて大変おいしいものであった。当時、一コース一万円程であったが、私はいつも教会からの出費でこのご馳走にありつけたのであった。

城下かれいのいる海に漁港があり、その突堤から色々の種類の魚が釣れる。潮が引いた時、海岸のテトラポットの間の砂地で餌のごかいを掘り、潮が満ち始めると同時に突堤から釣り竿を出す。ある晩のおかずにとしようと思つて熱

心に釣りをしていたら、役員松本姉が何時の間にか後に立って面白そうに見ていた。私が釣り上げたためじな得意になつて見せたところ、「先生、人間をとる漁師になつて下さい」と言われた。勿論、皮肉ではなく、ユーモアたっぷりに言われたのであるが、私はどきつとした。

主イエスは、ペテロ達に「わたしについてきなさい。あなたがたを人間をとる漁師にしてあげよう」（マルコ・七）と言われた時、彼らは直ちに網を捨てて主に従つた。網即ち生活の手段であつた。八幡製鉄所の職を捨てて、神の御言葉を取り次ぎ、ただ福音のみによつて生きる者へと召された私であつたが、牧師だからといって、全くレジャーなしで御言葉を宣べ伝えるだけに専念する生き方は、ある時突然倒れてしまう危険があるのではないだろうか。主イエスも弟子にあだ名を付けるほどのユーモアの持ち主であられた。熱心でありつつ、しかも心の余裕を持つ生き方を主は教えられたと思う。

松本姉はすぐに御言葉を思い浮かべるほど熱心な人であつたがその生活は余裕があつた。切羽詰まつた時にも、こちらがハラハラする程呑気であつた。日出教会は、このように熱心でありつつ、神によつて楽天家にさせられた信徒

によつて支えられたのであつた。

經濟問題

別府野口教会の退職金は五十万円であつた。このお金は引越し費用、ベットその他の家具購入、牧師館裏の倉庫建造のために消えてしまつた。あとは日出教会からの十余万円の謝儀で一家四人が暮らすのであるが、どのように考へてもとても足りるはずはなかつた。別府時代は員子が病院の受付の事務をしていて謝儀と合わせてまあまあ生活が出来たのであるが、神の導きによつて、生活費が半減する日出に赴任してからは、實際のところ他に収入の道は全くなく、少なからず不安であつた。

このような状況の中で、私は献身してから今までの歩みを振り返つてみた。神学校の時代、喜界教会時代、そして別府野口教会時代、そのすべての道で物心共に神は不思議な摂理のみ手で支えてくださったのである。その同じ神が日出にもおられる。私は思い煩う事を止めて、すべてを神にお任せする事にした。

「何事も思い煩つてはならない。ただ事々に感謝をもつて祈りと願いとを捧げ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四・六)

これは私の生涯を貫く御言葉であつた。

当時、私は大分地区委員長の任についていた。二カ月に一度、牧師と信徒の有志が集まつて宣教協議会が行なわれるが、ある時信徒の一人が次のような発言をした。

「大分地区内には大変な困難の中で地道に伝道を続けている先生方がおられる。せめて夏と冬の二回、各教会で献金を集めて、その先生方をお助けしたらどうだろうか」という趣旨であつた。そこでこの件につき一同に図つたところ、四人の教師からなる大分地区互助委員会が早速発足して、夏のために献金集めが始まつた。そして、八月の宣教協議会で三人の牧師のために各教会からの献金が捧げられた。私もその中に含められ、その夏は三十万円いただいたのである。互助委員会の報告は、集まつた献金の総額と三人の牧師に差し上げたというだけで、その牧師の名は発表されていながつた。協議会はそれで満足したのである。

その冬にも三十万円頂いた。さらに九州教区にも教区互助会があり、その方からも年間四十万円の補助があり、合計年間百万円が思わぬ所から与えられたのであつた。そして、この補助は私どもが日出を去るまで続くのであつた。

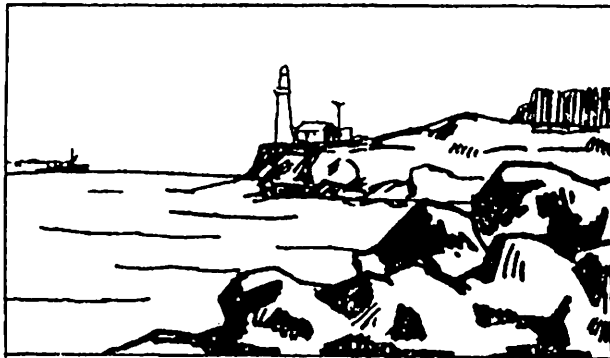
海の幸、山の幸からの現物収入、そして農家の信徒の家を訪問すると、帰りは車のトランク一杯に新鮮な野菜が積まれる。春には三、四本の竹の子がいつも牧師館にあり、冬には大きなみかんの袋が絶えることがない。

冷蔵庫の氷室には夏に釣った小あじが冷凍されて、一杯詰まっているのである。まことに神様は先の先まですべてを用意しておられたのであった。

互助とはお互いに助け合う信仰の行為である。献金を頂く方も助けられ、捧げる方も助けられる。捧げる方の助けは、困難な中にある教会を理解する事が出来、祈りを与えられ、捧げる喜びを知って、教会が強められる祝福なのである。

かくして「一つの肢体が悩めば、ほかの肢体もみな共に悩み、一つの肢体が尊ばれると、ほかの肢体もみな共に喜ぶ」(第一コリント十二・二六)との血の通い合った二一の教会からなる大分地区が形成されたのである。

第一種、第二種教会、伝道所の区別なく、また牧師の出身神学校の区別なく、大分地区の教会はまことに魅力ある暖かい教会なのであった。



朗読奉仕

別府野口教会時代から、私は大分県点字図書館に所属して、盲人の方のために朗読奉仕を続けていた。朗読奉仕の会があつて約五十名の方が会員であつた。一昔前までは点字による図書ばかりであつたが、テープレコーダーの普及によつて録音図書が作られ、私が奉仕している頃は録音図書の在庫が点字図書をはるかに上回つていた。

朗読奉仕の会のメンバーになるためには、NHKのアナウンサーの指導により、一年間講習を受けねばならなかつた。何気なく読んでいた本も盲人の方に聞いてもらうためには色々と注意せねばならない事を知つた。まず、はっきりと意味の分かる発音が求められる。アナウンサーから配布されたテキストを皆でそろつて繰り返し朗読するのである。そして一人一人の朗読をアナウンサーからチェックしてもらふ。ガギグゲゴの発音が注意され、くですの「す」は聞こえないようでも、はっきりと「す」とわかる発音でなければならぬ。そして、例えば栄光（エイコウ）はエーコーと読む。

次に大切なのは抑揚と間（マ）の取り方である。抑揚がなければ、文の中の大切なところがぼかされてしまい、無

味乾燥なものとなる。さらに間の取り方が適当でないという意味が不明になったり、聞く人がうんざりしてしまう。

一年間の講習が終わつた時は、ほとんどの人がラジオのニュースを聞いているような準アナウンサー的な存在となる。この朗読奉仕は私の説教にどれだけ役立つか分からない。

録音は各家庭で行う。まず気を付けなければならないのは、外部からの雑音である。電話のベル、自動車の騒音、犬の吠える声など、普段は別に気にならない音が録音する場合は禁物なのである。皆各々工夫して最良の環境をつくる。テレビを消し、電話機を不通にし、ボンボン時計を鳴らないようにしておく。ある人は止むを得ず押し入れの中に入れて録音するという。

録音を始める前にはテキストを何度も読んで完全に内容を把握し、強調する所には鉛筆で線を引いておく。準備が整つたところで録音開始であるが、緊張しているのでどうしてもとちつてしまう。その場合はとちつたところをもう一度やり直すのであるが、その時、ガチャツというスイッチの音が入る。この音が出ないようにする技術がまた大変である。家庭の御婦人方はテープレコーダーの扱いが苦手

である。そこで私の技術指導が必要となり、時には講習会も行ったのであった。

日出教会に赴任した時、大分県点字図書館の点字奉仕の会に所属していたM姉がおられた。M姉は体が弱かったので、自宅から教会までの十キロを来られる時はタクシーを利用して、帰りは私が車で送っていた。礼拝中、時として倒れてしまう事があったが、ほとんど聖日礼拝を欠かしたことがなかった。M姉はこの私にも何か隣人に奉仕できることがあるに違いないと考え、点訳を思いついた。講習会を受けて弱い手をさすりながらこつこつと点訳を続け、点字図書館に数冊の本を献本しておられた。

ある日の早朝、M姉が急死したとの通報があり、私は急いで駆け付けたが、すでに花が飾られ、M姉は静かに横たわっていた。私は顔にかけられていた白布をそつと取ってみると、何と彼女は笑みを浮かべていたのである。盲人の方のために力を尽くし、信仰の道のりを最後まで走りぬいた人の安らかな寝顔であった。

「信仰の戦いを立派に戦い抜いて、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはそのため召され、多くの証人の前で立派な証をしたのである」(テモテ六・十二)

韓国旅行

一九七九年四月十七日～二四日の八日間に亘る「韓国の教会に学ぶ」ツアーに、私ども夫婦と役員M姉、K姉の四人が第一回の企画に参加した。続いて第二回に二人、第三回に一人の計七名が日出教会から参加することになるのであるが、このツアーは単なる観光ではなく、あくまでも韓国の教会のあり方を学ぶものであった。

企画は東京シャロームの宮川さんという熱心なクリスチャンであり、ゴスペルソングのレコード、カセットテープ等を製作販売して福音宣教のために熱心に尽力をされている方である。

福岡空港から大韓航空でソウルに向かう。機中では韓国の美人スチュワーデスの心のこもったサービスがあり、大きな期待をもってソウルの空港に降り立つ。空港では色鮮やかなチヨゴリを着た教会の婦人方の歓迎に心がはずむ。宿泊は各々信徒の方の家庭を割り当ててあり、私ども夫婦はある画家の家庭に迎えられた。この方は韓国の風景を日本画風に描き、韓国では相当に名の知れた方の方であった。

到着した日の夕食はご夫婦にソウルの繁華街にある韓国料理店に案内されてご馳走になった。鶏の若鶏の内蔵を抜き、中に炒飯を詰めた大変美味しいものであった。

この家庭はご夫婦と二人の姉妹の家庭であったが、その夜は早速家庭集会を行なった。私の証をご主人が姉妹方に通訳する。そして祈祷に入ったのであるが、この日初めて私は異言なるものに接した。ご夫婦は日本語で祈ったが、一人の姉妹の祈りは韓国語ではなく、不思議な言葉で歌うように語るのであった。しかし、その言葉は私どもにとつて大変心地よく、神の存在を感じずにはおれないものであった。この異言は家族の方にはよく理解できるという。不思議な霊の世界を垣間見た思いがした次第であった。

翌朝は午前四時半に起床して、午前五時から始まる近くの教会の早天祈祷会に出席する。教会に到着した時には、すでに五、六十名程の人が集まっていた。

韓国ではほとんどの教会が毎朝五時から祈祷会を行なっており、教会の力強い伝道の源はここにあるのだなと痛感させられた。ソウルの街の至る所に教会があり、十字架の林立なのである。バスでどの小さな町や村へ行っても、必ずその中心に教会があった。教会に集う人数も百名、二

百名は少ない方で、大教会では千人、二千人の人が集い、礼拝も数回に分けて行なっている。日本の教会ではとても考えられない状況であった。

我々の学びはあちこちと教会を変えて、韓国の有力な牧師を迎えてのセミナーであった。韓国の歴史を学び、信仰の背後にある思想、教理を学び、伝道の実践についての示唆を与えられるなどのものであった。そして、韓国の神学校やミツシヨンスクールを訪問し、戦時中日本の軍部による教会の弾圧で数十名の男性信者を教会に押し込んで火を放って焼死させたという教会を訪れて胸を痛め、戦後、事件のあった光州市で讚美歌を歌い、半島の南端のまだ日本人未踏の寒村まで行って、韓国の教会の力強さを知った次第であった。

韓国滞在の八日間で、一行は多くの示唆を与えられると共に霊的に高められ、韓国での学びを日本でも生かそうと新しい使命に立たされたのであった。

日出に帰ってから早速毎週火曜日、土曜日の午前六時から早天祈祷会が始まった。朝早く起きて私が車で遠い人を迎えに行く。早天では旧約の創世記から毎朝一章づつを輪読して解説を行い、皆で心を合わせて祈るのである。私

が日出教会に赴任している期間中、この祈祷会は続き、旧約聖書のほとんどを読み終えることになるのである。そして、この祈祷会がこれからの日出教会の大きな力となっていくのであった。

「目をさまして、感謝のうちに祈り、ひたすら祈り続けなさい」（コロサイ四・二）



韓国旅行（ソウルにて）

日曜学校（CS）

日出教会のクリスマスは、午前十時半からのCS合同クリスマス礼拝に始まる。礼拝後は、皆でおでんの鍋を囲んで、持ち寄ったおにぎり、漬物、くだもの等でバイキング

方式の愛餐会を行い、ゲームや歌、交換プレゼントで交わりの時を持つ。なかなかの芸達者もいて、レコードの伴奏で日本舞踊を舞ったりする。少人数ではあるが家庭的な暖かい交わりが続く。

教会員に前任の吉良牧師の息子さんがおられる。彼は小学校の先生をしていて、教会の行事には次から次へと新しいアイデアを持ち出し、集会を楽しいものにしてくれる。

CSでも校長を務め、年間の各行事を立案し、実行に移していく。CSは幼児から中学生までで、高校生は大人の礼拝に出席する。分級は小三以下が会堂で四〜六年生は教会堂の二階、中学生は牧師館の畳の間で行なわれる。教師は私も夫婦と吉良兄、それに年配の役員をしておられる木村姉の四人であった。

日出は自然の環境に恵まれていて、CS大人合同の野外礼拝も美しい丘や海岸で行なう。山でわらびや野いちごを摘んだり、海岸で貝を掘ったりの楽しみが礼拝の後に待っている。お土産つきの集会なのである。会堂で一泊するCSの二日間の夏期学校も、近くの海で海水浴を楽しむ事と婦人会の方々の心づくしの御馳走、それに夜の肝だめしがメインになる。

日出の夜空は星が降るように美しい。私は径十五センチの反射天体望遠鏡を持っていて、よく夜空を観測する。月のクレーターやアンドロメダ星雲をのぞき、木星の月や土星の輪にため息をつく。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、

大空はみ手のわざをしめす」(詩篇十九・一)

悠久の天体に比べて、何と人間は塵のような存在であることか。この地球という青い惑星に住む小さな人間の一人一人の祈りにも神は耳を傾け、うめきつつとりなしていただくのである。

「目を高くあげて、だれがこれらのものを

創造したかを見よ」(イザヤ四十・二六)

我々のなすべき事は、この方を見上げ、この方が備えられたものを受け取る事だけなのである。

日出の子供たちの目は澄んでいる。美しい環境が、純粋な人たちの思いやりが、彼らの心をなごませている。しかし、彼らもやがて高校を卒業すると進学のため、就職のために東京、大阪へと出ていく。地方教会は、育てて送り出す奉仕に撤しなければならぬ。

「諸人こそぞりてむかえまつれ」

子供たちの喜びに満ちた歌声が夜空に響く。キャロリンのテーマソングである。手に手にろうそくを持った子供たちの顔が輝いている。

「いと高きところでは、神に栄光があるように、

地の上では御心にかなう人々に平和があるように」

(ルカ二・十四)

日出の子供たちよ、都会に出て行っても純粋な心を失わず、強くたくましく、主にあつて生き続けよ！

元旦礼拝

日出教会の元旦礼拝は、大晦日の除夜の鐘が鳴り終え、元旦を迎える午前零時から始まる。大阪のように電車の時間を気にする必要はなく、遠い人は車で送迎し、近い人は懐中電灯を持って集まって来る。新年を迎えた最初の時間帯をまだ何ものにも触れていない体と心で賛美し、御言葉を与えられるのである。

「新しい歌を主に向かつて歌え。

全地よ主に向かつて歌え」(詩篇九六・一)

この「新しい歌」は、元旦のみならず常に我々の賛美の

姿勢を表すものである。即ち新しい歌は「新しく受け取って歌う」という心のあり方をいうのであり、神から与えられる恵みを新しい心で受け取って、感謝のうちに賛美するのである。

礼拝が終わると、大晦日に食べるはずの年越しそばを頂く。九州の冬は大阪より寒い、暖かい礼拝堂で熱いそばを主にある兄弟姉妹と共にいただくおいしさはまた格別である。ひとしきり楽しい交わりが続いた後、それぞれ家に帰って一眠りした後、正月のお祝いに取りかかるのであった。

新年の日出の海は明るく透き通っている。冬至が過ぎて少しずつ朝の光が増し加わる時期に行なわれるクリスマスが終わると、海はぐんぐん明るくなっていく。夏冬を問わず、一日に一度は海岸を散策するのが私の日課となっていた。少々辛い事や悲しい思いがあっても、海はいつでも私を暖かく迎えてくれる。そして問題解決の良きアドバイザーとなってくれるのであった。

長女の頑張り

私たちの家庭が日出に赴任したのは、長女の裕子が中学入学の時、長男の信治が小学校四年の時であった。長女の裕子は小学校の時からエレクトーンを学んでおり、日出教会のCSでは「こどもさんびか」をエレクトーンのコードに組み替えて軽快に演奏していた。ゴスペルソングの「主の手足になろう」の時などは、子供たちは手拍子で元気いっぱい歌う。裕子は子供に接するのが大変好きなので、子供たちも裕子を慕っており、CSの大きな力となっていたのであった。

裕子が中三の時、ぜひ別府の商業高校に進学したいと言い出した。教会からすぐ目の前に見える県立の日出高校があるのに、わざわざ電車通学をして隣の別商に行きたいという理由は、当時プラスバンドで全国的に有名な学校でフルートを続けたいということであった。私は反対した。大学に入るためには商業高校は不利で、歩いて五分の所の県立高校に入学するのが一番の得策だと考えていたからである。それに貧しい牧師の家庭では電車通学の費用などとても出せるはずがなかったのである。裕子は日出中でもプラスバンドでフルートを担当していた。彼女は一度心に決

めた事は他から何と言われようと強引に押し通していく。

「通学費とそれに伴う諸費用は私がアルバイトして稼ぐから」。こういわれると無下にその願いを却下するわけにはいかない。遂に私ども夫婦は裕子に押し切られたのであった。神のご計画は私どもには隠されている。私どもが思いも及ばなかったところに、神は道を備えておられるのである。その道が分からない故に、私どもは焦ったり思い煩ったりする。裕子の願いを許した事から、神は次から次へと不思議な方法で、彼女をそして私ども家族を未知の世界へと導いてくださるのであった。

「神のなされることは皆その時にかなって美しい。

神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。

それでもなお、人は神のなされるわざを初めから

終わりまで見極めることはできない」

(伝道の書三・十一)

日出から別府への越境入学に裕子は無事パスした。別商へは同級生の他の四人の女子がやはりプラスバンド部に入りたいという願いで入学した。電車通学の友達が与えられたのである。早速約束通り裕子のアルバイトが始まった。

時間帯は早朝しかない。彼女は四時時過ぎから起きて、朝

の新聞配達から始めた。仕事が終わると、そそくさと朝食をかき込んで弁当を詰め、日出駅に走っていく。学校に着くとすぐに早朝練習が始まる。かなり厳しい練習のようでは体力づくりの運動から始まり、管楽器はマウスピースからの練習である。挨拶等の礼儀作法も徹底的に仕込まれる。

この礼儀作法は社会人となった後々までも大変役立つようになるのである。但し、他者に対してだけで、親に対しては相変わらずのおてんば娘のままであった。授業が終わると放課後の練習を続け、家に帰り着くのは夜の九時過ぎる。雨や風の日も、雪の日も朝刊の配達は続けなければならぬ。ある時は雪道に滑って転び、新聞を雪の上にはらまいた事もあったようだ。日曜日も休むことなく、朝早くから夜おそくまでの活動は続けられていく。親は健康を心配するのであるが、本人は好きな事を続けられるのでこのような無理と思われる生活にも至極満足しているのであった。パウロは「立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい」(第一コリント十・十二)と警告している。裕子のがむしゃらな生活は、果たして主の御心であったのか。

案の定、彼女は高二の夏に急性腎炎で倒れ、一カ月の入

院を余儀なくされてしまった。さあ大変、もうこれからは無理な生活は出来ない。そうなれば通学の交通費、それに伴う諸費用はどうなるのか。もちろんぎりぎりの家計からは、たとえ一万円たりとも捻出するのは到底不可能なことであった。

切羽つまった時、我々はどのような方法を取るであろうか。ある人は何か抜け道はないかとあれこれ方策を考えるであろう。しかし、現時点において、牧師家庭には他の道は全く考えられなかった。そうなれば残された道はただ一つ、祈りであった。そしてこの残された道こそ最善のものなのである。

主イエスは、真夜中に訪れた客のために友人にパンを求めるとえ話の中で、「友人だからというのでは起きて与えないが、しきりに願うので、起き上がって必要な物を出してくれるであろう」（ルカ十一・八）と教えられた。

祈りにおいて大切なのは、この「しきりに願う」姿勢である。フォーサイスという人は、「祈りがねばり強いものとならない間は、本当の力とはならない」と言っている。すべての道が閉ざされた今、裕子は祈った。私ども夫婦も祈った。

ある日、突然現金封筒が届いた。福岡県に在住する私どもの全く知らない一老婦人からのものであった。中に「頑張ってください」という意味の手紙と共に一万円が入っているのではないか！そして、この一万円は裕子が聖和短大を卒業するまで続けられるのであった。どこからどうして我が家の窮状を知り得たのであろうか。手紙の内容はその事については、一言も触れていなかった。神はすべてを見通して福岡の地にみ使いを備えておられたのであった。

「神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に会わせるようなことはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである」（第一コリント十・十三）

何と神は、我々が考えも及ばないような事をなさるお方であろうか。裕子がこの時言った言葉は、「本当に神様は生きていらっしやるのね」であった。

ふきとみようが

上田姉が、日出教会の牧師館の裏庭に「ふき」と「みようが」を植えてくださった。この二つの植物は上手に共存している。まず三月に入ると「ふきのとう」が芽を出す。

やがて暖かくなるとびっしりとふきの畠になる。手頃な時に刈り入れて美味しくいただく。ふきが終わった頃、今度はみょうがが芽を出し始めて、見事なみょうが畠に変身する。みょうがはおすましに入れて良く、またてんぷらにしても妙なる美味で私たちを楽ませてくれる。二者共に各々の領分を侵すことなく、助け合って仲良く暮らしているのである。多年草なので私どもは何ら手入れすることなしに、毎年我が家の食卓をにぎわしてくれる。草や花を心から愛しておられた上田姉の長年の知恵なのであった。

ある年の二月下旬に、上田姉が「私の田圃に来てください」と案内して下さった。その田圃は休耕田で低地にあるため常に湿田になっていた。上田姉が指す方を見ると、何と見事な「せり」が一面に繁っているではないか。私は渡されたビニール袋一杯にせりを摘んで持って帰った。せりはおひたしに、せりごはんに贅沢な味を存分に楽しませてくれ、一度すぎやきに入れたところ、今まで味わったことのない素敵なすぎやきを提供してくれたのである。その田圃の周囲には、ふきが一面に生えている。そして、その次には例のみょうがが出現して、上田さんが持て余す程の収穫となるのであった。

ふきとみょうがの共存を感動を持って見ていたとき、私はふと「キリストを基として全身はすべての節々の助けにより、しつかりと組み合わせられ、結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていくのである」（エペソ四・十六）のみ言葉を思い起していた。

「それぞれの部分は分に応じて働き」、この言葉の意味は実に深いと思う。キリストを基とした肢体の「それぞれの部分」である私どもは、分に応じて働くのでなければ、からだ（教会）の成長は望めないのであった。ふきが、これは私の領分であるからお前は引っ込んでおれとみょうがを圧迫するならば、お互いの間に気まずい闘争が起こるはずである。お互いが分に応じて働き、あなたはこの働き、私はあなたに出来ないこの働きと互いに謙虚に譲り合い、助け合って働く姿勢が、教会成長へとつながっていくのではないだろうか。ふきは自分の出る季節（時期）を知っているし、みょうがもまたその時期を知っていたのである。野菜にしても魚介類にしても、いわゆる旬のものは格別に美味なものである。現在は一年中トマトや胡瓜を手に入れることができるが、これらのハウス栽培のものは、何と

味気ないものであろうか。これから三、四月にかけて、あさり、はまぐり等の貝類が旬に入る。日出の海岸は、二月中はなまこの旬の時期であり、海には多数の漁船が出勤して、底引き網でなまこを収穫する。それがすむと、楽しい潮干狩が始まる。どこの海岸も漁業権などなく、自由に出入りすることが出来る。日出にはあさりの浜とはまぐりの浜がある。あさは小石混じりの浜で、はまぐりは夏には海水浴場となる糸ヶ浜という美しい砂地の海岸で数多く採れる。私は小学校時代から貝堀が好きで、あさりなどは教会のすぐ近くの海岸で一、二時間程でバケツ一杯の収穫となる。どんなに我が家の食卓を賑わしてくれた事であろうか。旬という字を辞典で見ると魚、野菜などの出盛りで味が良い時期となっているが、この時期は同時に繁殖の時である。各々がその時をわきまえ積極的に働き始める。我々は分に応じて働く存在であるが、福音宣教の働きに対して今という時を逃してはならない。

「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救いの日である」

(第二コリント六・二)

丁教師のこと

日出教会の前任の教師は丁伝道師であり、関学神学部4年を卒業後、補教師として赴任した人であった。

この教師についてはすでに述べたが、奥さんとの結婚は信仰雑誌「信徒の友」に『伴侶を求む』の広告を出し、それに奥さんが応募して結ばれたカップルであった。大変ユニークな結婚であったが、お二人は性格の相違で私どもと同じように相当な葛藤を続けておられたようであった。

最初に可愛い女の子が与えられ、二人目の女の子の出産で奥さんが入院しておられる時に、彼はストーブの火を付け



日出教会前の通り

たままコーヒーショップに行き、牧師館が全焼してしまつたのである。

この事件は、T教師の家庭にも、日出教会にも相当なショックを与え、幾度も話し合いが続けられて牧師館再建へと踏み切つたのであるが、何しろ小さな教会にはその負担は大変なものであつた。自分の不始末が火災の原因となつた彼は、その責任のゆえになんとかして資金を作らうと考え、別府の繁華街のスナックで夜のアルバイトを始めたのである。多額の収入があるこの仕事を選んだ事が、前途有望な人を転落の道へと追い込んでしまつたのであつた。

T教師は小学校の校長をしておられた方の長男であり、高校から大学へとスイスイと進んでいった。せめて神学校の大学院にでも学んでいたなら、少しはフィールドに出るからの実践的な働きを会得したであろうに、彼は早く自分一人で教会を牧したいと考え、副牧師の道を断つて、日出へと赴任したのであつた。

十年間の社会生活の経験があつた私が喜界教会に赴任した時、全くの暗中模索の状態であつたことを思うと、彼がいきなり主任担当教師となつた事は相当無理であつたと思ふのである。自分の思う通りに事が運ばない、何から手を

付けたらよいか分からない、その焦りが夫婦の間の葛藤、牧師館焼失事件、別府の夜の仕事の選択へと繋がつていったのではないかと思われる。

別府の夜は誘惑が多い。「ちよつと兄さん寄つてらっしゃいよ」の甘い声が至る所からかかる。T教師の夜がどのようなものであつたか知る由もないが、全国募金で牧師館が再建されて間もなく、彼は牧師としての仕事を続けられる状態ではなくなつてしまつたのである。実に悲しむべき事であつた。

私どもが別府の教会から兼牧の日出教会に赴任した時、彼は教会の近くの安アパートを借りて、奥さんと娘二人の四人家族で、しばらく電器ショップの手伝い等をして生活していたが、やがて奥さんは郷里のいわき市に二人の子供を連れて帰り、以前の保母の仕事で生計を立て、彼は広島のお父さんの所へと帰つていたのであつた。

私どもが日出に赴任して三年目のある日、広島の彼から電話がかかつてきた。「上田さんは元気ですか。牧師館は快適でしょう。あそこは私が頼んで一番力を入れてもらつた所です」。そしてその日に、彼は自殺したのであつた。美しい奥さんと可愛い二人の娘を残して……。

「若い人はどうしておのが道を清く保つことができる
でしょうか。み言葉にしたがって、それを守るより
ほかにありません」（詩篇一一九・九）

金田牧師のこと

「先生、何とも思われぬのですか」。
「何がですか」。

「同級生が地区内で一番大きい教会に赴任したのに、先生は一番小さい教会で苦勞しておられる」。

杵築教会の吉新牧師の言葉であつた。一九八〇年の四月に、神学部と同級生であつた金田牧師が大分教会に赴任して間もなくの時である。なるほど考えてみると、理屈に合わないようである。例えば、同じ大学を卒業した同級生が大企業の重要なポストにあり、他は零細企業で頑張っているようなものである。この世の常識では考えられない事が教会では当たり前なのである。教会のあり方は、この世の組織とは全く違ったものであつた。

牧師の赴任は、まず本人の希望から始まる。次に教会がその牧師を受け入れるかどうかを教会總會で諮る。そして最後に教区、教団の承認となつて、赴任が決定するのであ

る。私が日出教会に赴任したのは、私の意志であつた。勿論、その意志は神の導きによるものであつた。金田牧師が大分教会に赴任するとき、当時地区委員長であつた私に相談された。私は喜んで彼を大分地区に迎える準備をした。

大分教会は県庁所在地にあつて、地区内でも最も陪餐会員の多い教会であり、広い敷地に学校法人の立派な幼稚園を、教会の敷地とは別の所に備えていた。金田牧師はその幼稚園の園長も兼ねる事になつたので、牧師謝儀と園長給を合わせると、私の謝儀の三倍にもなつたのである。吉新牧師が「何とも思わぬのか」と言われたのは、当然であつた。

私はこの世的には恵まれていなかったが、豊かな神の祝福の中にあつた。わずかな教会員であつたが、皆全身全霊をもつて教会を支えてくれた。そして、自然の恵みは到底お金には換えられない貴重なものであつた。おいしい冷たい水、きれいな空気、新鮮な野菜、魚介類等存分に味わう事が出来たのである。今、貝が旬で大変おいしいが、大阪で一パック三、四百円のあさりを考えれば買うのであるが、日出では一掘りであつけなく採れるのであつた。

美しい海岸の突堤で釣糸を垂らしながら、私は金田牧師

の事を考えていた。「忙しい教会の仕事の上に幼稚園の園長までさせられて大変だろうな。大分教会には気難しい役員がおられると聞いているが、うまくやってくれるだろうか」。ルンルン気分でフィッシングしていた私は、日頃からあまり丈夫でない彼の健康を心配していたのである。

彼は完全主義者であった。少しの落ち度もないように綿密な計画を立て、それを実行に移していく。とてもこちらでは考えられないような完全な仕事をする。いつ電話をしても不在の時間が多く大変忙しいようであった。彼は東梅田教会から福岡女学院教会へ、そして大分教会へと大教会ばかり歴任してこられたのであった。忙しい仕事のために彼の健康は次第に蝕まれていったのであろう。遂に一九八七年に入院して肝臓の治療を続けておられたが、同年の十一月三十日に召されてしまった。享年五五才であった。

「われわれのよわいは七十年に過ぎません。あるいは健康やかであつても八十年でしょう。しかしその一生はただ、ほねおりと悩みであつて、その過ぎ行くこととは速く。我らは飛び去るのです」（詩篇九十・十）

金田牧師が残した最後のメモには、震える手で「良い牧師になりたい」とあつた。

長女の入試

一九八三年九月二五日の礼拝で、高校三年の長女の信仰告白式が行なわれた。三才の時幼児洗礼を受けていた裕子の突然の告白式であつた。中学から高校とプラスバンド練習のため、ほとんど聖日礼拝に出た事もなかつた裕子の止むを得ぬ？式であつた。この様な告白式を神は哀れんで許して下さり、それからの彼女の歩みを豊かに祝して下さつたのである。

子供の好きな裕子は幼稚園の先生になりたいという願いを前から持っていた。大分地区には聖和出身の方が数名おられ、教会や附属の幼稚園で大変良き働きをされていた。それ故進学について話し合った結果、聖和を選んだのであつたが、まさか八尾教会の牧師館から西宮の幼稚園に通う事になろうとは、当時想像する事すら出来なかつたのである。聖和大学の入学案内を取り寄せたところ。受験の資格として受洗者である事と所属教会の牧師の推薦状が必要とあつた。突然の信仰告白式が行なわれたのはそのためである。

聖和の入学案内には推薦入学の項がある。それによると

学業の成績が三分の一以内とあった。どっこいどっこいのところ、裕子はその範囲内にいたのである。日出から隣の高校へ電車で通い、早朝と放課後まで続く激しい練習で、よくもまあ三分の一以内の成績であったと驚く必要はない。地方の商業高校のレベルが低かっただけである。

推薦入学は小論文と面接であった。面接の方はプラスバンドで礼儀作法を徹底的に鍛えられおり、外面の良い方であったから大丈夫と思われたが、問題は受験場で書かねばならない小論文であった。娘と共に苦しんで対策を練っていた時、突然良い考えがひらめいた。どんな題が出て、すべてプラスバンドに引っ掛ければよい！

試験日は十一月二四日（木）であった。私と娘は二二日の夜船で別府港を出航し、翌日は宝塚のホテルを予約しておいて、宝塚歌劇を観にいった。良い席がなく、一番後の高い所だったので、舞台の奥の方がさえぎられて見えなかった。だがそんな事はどうでもよい、明日の試験こそ本番なのである。

聖和の学長松永晋一氏は、鹿大工学部の私の同級生であった。学校に早めに到着した時、私が学長室に行って娘の受験を告げると、彼はすでに知っていてくれた。だが個人

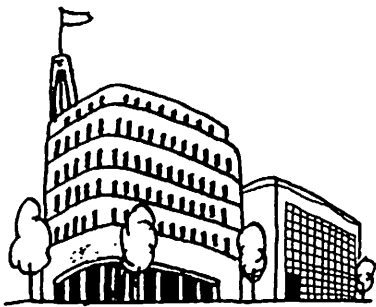
的縁故で合格が左右されるような学校ではない。

小論文の題は、「現代における科学技術の進歩と幼児教育」であったが、裕子はプラスバンドの体験を生かして論述したようだ。

翌年の四月六日、無事合格した裕子が日出を出立して七日（日）に荷物を持ったまま訪れたのが、関学教会であった。彼女の信仰はそこで着実に養われていくのである。

「ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神、あわれみ深き父、慰めに満ちたる神」

（第二コリント一・三）



河野ふく姉のこと

日出町の隣の山香町の山奥に河野家がある。広い敷地を持つ屋敷内に、一人でわびしく河野ふく姉が暮らしておられたが、私が日出に赴任した時は八七才で、大麥お元氣であつた。女学院を卒業されたとかで、アメリカの友人と英語で文通を続けておられた。日出から車で三十分（信号がほとんどないので大麥な道程である）の河野家への訪問を私は月一回行なつていた。

故河野兄はクリスチャンの歯科医であり、子供がなかつたので、遠縁の方が養子になつてふく姉の世話をしておられた。訪問毎にふく姉は、必ず昼食を振る舞つてくださった。夏の暑い時は冷やしそうめん、冬はうどん、麵類が大好きな私は、毎月の訪問が楽しみであつた。ふく姉はこの世的には相当な家柄の出であり、経済的にも恵まれていた生活をしておられたようであるが、過去の華やかな生活については一言も語られた事はなかつた。ただ私の話に静かにうなずき、時々言葉少なく現在の事について語られるだけであつた。ふく姉は常に笑顔を絶やす事なく、時々語る言葉は神の恵みに対する感謝と祈りの足りない事についての自らの不信仰についてであつた。

屋敷の裏山には養子の河野兄が椎茸を栽培しておられ、私の帰るときには季節に応じてわらび、ふき、竹の子、椎茸、それに新鮮な野菜の土産に心を配つてくださった。河野兄はいまだに求道者であつたが、例の山香町の二階で行なつていた月二回の集会には、必ず出席しておられた。この河野兄の息子さんが仕事の関係で広島から日出へ帰り、息子さんの奥さんはすぐれたオーガニストとして、現在も日出教会で礼拝の奏楽の御用を続けておられる。

河野家への訪問の時、私は必ず車のトランクに川釣りの道具を入れて行く。えさは川魚が大好きなしまみみずで、これは日出教会の牧師館の台所排水口近くの湿つた土の中に無数に生息している。魚釣りが大好きな人はどこにどのような餌があるか、不思議な勘が働くものである。訪問が終わった夕刻は、最も魚の餌食が良い時である。河野家の前にはきれいな流れの川がある。河野兄から教えてもらったポイントを探りながら、はえ、ふな等の相当の魚が帰りのお土産に加わるのである。はえの天婦羅、ふなの煮付けが夜の食卓をにぎわしてくれるのがしばしばあつた。

永い間私のために昼食を用意してくれたふく姉も、九十才を過ぎる頃からだんだんと体も弱り、床に入っている時

が多くなつた。しかし、相変わらず笑顔を絶やす事なく私の話には耳を傾け、折りに唱和してくださつた。筆もままならず、アメリカの友人への手紙も、ふく姉の言葉を私が英文にして送るようになった。河野兄と奥さんが交替で毎日ふく姉の世話を続ける日が続いた。

一九八五年の正月にふく姉の容態が急に悪くなつたとの連絡を受け、私は山香に飛んで行つた。ふく姉は病院でなく、自宅の畳の上に臥しておられた。病名はなく、完全な老衰であつた。私が訪れると、ふく姉はしつかりと力強く私の手を握つてくださった。「先生、私は大丈夫よ、先生こそお体を大切にしてくね」という目であつた。

数日後、再び訪れるとふく姉は手探りをしておられた。それは信濃兄が召される直前にしておられた仕事と同じであつた。信濃兄は起き上がるとしておられたのである。親近者にいつまでもいてほしいという思いと主イエス・キリストにすがろうとする思いが居ても立つてもおられない動作としてそうさせたのであろうか。やがてふく姉の手は止まり、眠るが如く召されていったのである。まさに大往生であつた。

「わたしは戦いをりっぱに戦いぬぎ、走るべき行程を走

りつくし、信仰を守りとおした」(第二テモテ四・七)
ふく姉も信濃兄も、固い信仰を貫いて人生を走りつくされた勇者であつた。ふく姉は享年九四才。告別式は一九八五年一月七日に自宅で行なわれたが、山香町で初めてのキリスト教式葬式であつた。

転任の話

「東君、北陸のある教会が空くのだが、行きませんか。幼稚園もあるし、牧師謝儀と園長給で相当の収入になるのだが……」。関学の小林先生からの電話であつた。

日出教会に赴任した時には礼拝が五、六名であつたが、一九八四年三月の現時点では礼拝出席も二十名となり、これからゆつくりと貝堀や魚釣りを楽しみつつ、牧会を続けようと思つていた矢先であつた。私は、「しばらく考えさせてください」と言つて受話器を置いたが、勿論日出を出る気は全くなかつた。それから一週間程して、小林先生からまた電話がかかつた。

「実は羽昨(ハクイ)教会が空くのだが、東君が適任だと思ふ。羽昨は石川県の北の方だが不思議に雪が少ない。一度一緒にに行きませんか」などと強引に私を誘うので

あつた。私は大変当惑した。二度まで電話して下さったのに、すぐに断る理由が見つからない。私は咄嗟に「家内と相談して明日こちらから電話します」と答えて電話を切った。

「人の心には多くの計画がある。しかし、ただ

主の御旨だけが堅く立つ」(箴言十九・二一)

私はこの時、この御言葉を思い起していた。羽昨教会に私を推薦する小林先生の計画がある。そして日出にとどまらなかつてゆつくりと気長に牧会を続けたいという私の計画がある。そのどちらに主の御旨があるのか。私は早速員子に相談した。員子の答えは「教会を見に行つてみたら」であつた。なるほど神様の御心が分からない時には、ギデオンの羊の毛で導きを知つたように、とにかく行動してみる事なのであつた。

大分空港から大阪へ向かう機中に私はいた。小林先生との間で手筈を整えていよいよ羽昨への大旅行である。新大阪で先生と落ち合い新幹線で米原まで、そこから北陸本線で津幡へと向かう。先生は缶ビールとおつまみを買つてきてくださった。そして弁当は、北陸線にしかないといわれている、おいしい「鮭寿司」を購入してくださった。津幡

からは七尾線に乗り換えて羽昨に到着した。駅では四月から浜寺教会に赴任される佐伯先生が車で出迎えて待つておられた。

羽昨教会には会堂がなかつた。幼稚園は大変立派なものであつたが、聖日礼拝は園舎で行なわれていたのである。牧師館は、そこから歩いて五分くらいの以前薬局であつたものを改造した借家であつた。私は途端に失望した。日出の新しい牧師館、そして続きの会堂、百五十坪の土地、それに比べて羽昨教会の財産は幼稚園だけなのである。ただ教会から北へ三十分くらいの所に、召天された教会員が捧げた立派な大きな家があつた。海がすぐ近くで夏の修養会などはそこで行なうのである。私はここから車で幼稚園に通えるかな？と考へていた。何しろ牧師館は周囲から見通されるせせこましい所にあつたのである。そしてトイレは水洗でなく、家に入るとほのかに匂うのであつた。

羽昨市のすぐ近くにある千里浜は美しかった。私はしばしば浜辺に立つて、これからの私の運命や如何にと考へていた。夜は牧師館で美味しい甘海老の刺身を頂いた。しかし私の心は重かつた。こんなに一生懸命になつて羽昨教会を守ろうとする小林神学部長の心を思うと、断るのが辛かつた。

た。いやでも、もし主のみ心ならば赴任すべきであるのか
……。帰りの車中で、私はほとんど無言のまままで考えこん
でた。先生は心配そうに私の顔を覗き込まれていた。

日出に帰って一週間程して、佐伯先生からの手紙が届い
た。「先生のお年で、これから教会と幼稚園の仕事を続け
るのは大変だと思えます。ですから、小林先生には羽咋市
の方から園長の資格は無理だとの連絡があつたという事に
して電話しました」。

ハレルヤ！日出から出なくてもよいのだ。これまで通り
信徒の方と談笑し、好きな魚釣りも続けられるのだ！

国東教会

国東半島の突端にある国東教会が無牧になった。担任の
牧師はご夫婦とも、東京の人であつたが、若く美しい奥さ
んは、いつも「東京に帰りた、東京に帰りた」と言っ
ておられたようである。

地方の教会はどうしても取り残される。現在は牧師不足
の時代である。残念ながら世の中が不景気だと神学校入学
志願者が増え、景気が良くなると激減する傾向がある。そ
して、関学神学部の教授は「最近の神学生は教会の謝儀の

多い所をねらつて赴任したがる」とぼやいておられた。

無牧になつた国東教会は、杵築教会の吉新牧師と豊後高
田教会の岡口牧師と私の三人交替で午後三時からの聖日礼
拝の説教を担当していた。国東教会には神鳥（かんどり）
さんという姉妹がおられるが、この方は銀行の課長をして
いる時に献身され、東京神学大学に神学生として在学中で
あつた。

日出町から国東町まで約五十キロ、美しい海岸線の道路
を車で飛ばすのであるが、信号がほとんどないので小一時
間で到着してしまう。大阪の道路とは大違いである。

国東教会には、小学校の校長先生をしておられる小深田
さんという方が、教会の全責任を負うて、牧会に伝道に力
を尽くしておられた。地方教会ではこの信徒伝道者の働き
が大変大きな支えとなつている。九州教区では教区総会の
時に信徒の献身者を紹介して、議場で篤志伝道者として承
認を得る。小深田氏もその一人であつた。

国東教会の前は美しい松原があり、その先には瀬戸内海
が広がっていて、四国を遠望することが出来る。ある夏に
は日出教会と国東教会のCSが合同でこの教会での夏期キ
ャンプを行った事があつた。無牧だったので礼拝堂、牧師

館を借り切って、思い出深いキャンプであった。

国東の特産に「わかめ」がある。教会ではこのわかめを販売して、教会の伝道活動の資金としていた。時として強風で海に荒波が打ち寄せることがあるが、その翌日は海岸に多量のわかめが打ち上げられる。教会員はそれを集めて私たちのために土産としてくれた。新鮮なわかめに熱湯をかけると、みるみる美しい緑色になり、味噌汁にサラダにと家庭の食卓をにぎわしてくれるのであった。

国東教会のオルガンはたいへんな時代物であり、オルガンの下からベルトの端が出たままになっている。演奏する時にはそのベルトが出たり引っ込んだりするので、幾度笑いをこらえたことであろうか。賛美は地方教会独特の御詠歌のようなゆったりとしたテンポである。そして、時間を気にしない。礼拝後には茶菓で延々と交わりの時が続いて薄暗くなってから、そそくさと家路に着くのであった。

日出教会と国東教会もこのゆとりを楽しんでいるようであった。現代人は何と時間に追い掛けられている事であろうか。よく考えれば、今しなくてもよい事を直ちに行わなければ気がすまない。その結果失敗する事がしばしばなのである。主イエスはマルタに「無くてはならぬものは多く

はない。いや、一つだけである」(ルカ十・四二)と言われた。無くてならぬ一つの事とは、マリヤのように主の足下に座って御言葉に聞き入る姿勢であった。この姿勢は、ゆとりの中から生まれるのではないだろうか。

一九八四年四月、長男の信治は教会の目の前にある県立日出高校の普通科に進学した。まさか入試にパスするとは思われなかった出来事であった。これから彼の上にとのよなことが起こるのであるか。先天性心臓病を持つ彼の事で心を痛めていた時、「ただ神のみわざが彼の上に現われるためである」(ヨハネ九・三)の御言葉によって希望が与えられたのであるが、ただゆとりをもって人生を切り拓いてほしいと切に願う次第なのである。



日出教会での結婚式

再び転任の話

日出教会に赴任して七年目の十月のある日、突然、関学神学部の小林先生から電話がかかった、

「東君、八尾教会に行ってくれませんか」。

咄嗟の事で私は何と返事してよいかわからぬままにいた。

先生が、八尾教会の状況を話してくださるのを伺っていた時、そばにいて電話の内容を聞いていた員子が、しきりに何か動作している。よく見ると両手を組み合わせて×印を作っていたのであった。私は「しばらく考えさせてください」と言つて受話器を置いた。

日出に赴任した当初は、礼拝出席も五、六名で、経済面でも大変困窮していたのであったが、七年を経た今は礼拝出席も平均二十名となり、経済面では地区および教区の互助に支えられ、また教員からの現物献品、それに無償で得られる山海の幸によって、生活は余る事はなかつたが、主の恵みによって喜ばしい安定を続けていたのであった。

「やつと日出にも慣れ、教員の方々と暖かい交わりが続いているのに、今から又一から出発はいやーね」。

「でも、もし八尾へ行く事が神様の御心だったらどうし

よう」。夫婦の会話である。

人は今いる暖かい所から、なかなか出ることは出来ないものである。地図を見ると、八尾には海がない！小学校時代からずっと海辺に育ち、神学部を卒業して赴任した喜界教会、別府野口教会、そして日出教会もみな、海辺またはその近くであつた。

海岸の岸壁の上に私は腰を下ろしていた。日出の海はきわめて美しい。やわらかな明るい光、潮の香り、軽やかに飛び交うかもめ、その中であつて、私の心は葛藤を続けていた。日出にとどまるべきか、八尾へ行くべきか。私の肉の思いとしては、どうしても日出を離れたくなかつた。大分県は私の郷里である。

その日の夜、また小林先生から電話がかかった。この電話が私の運命を決めたのであった。

「とにかく二五日の聖日礼拝の説教を八尾教会でしてください」。その日は八四年十一月の収穫感謝日であつた。

前日は天王寺の都ホテルに宿泊し、翌日八尾に着くと、ちょうどCSの礼拝の時間であつた。元気の良い壮年の方が果物を持ちあげて「これなーに」「りんご」「これなーに」「バナナ」。楽しい雰囲気盛り上げていたのは阿部

兄である。礼拝の説教題は「土の器」で、私の話がぐんぐん会衆に吸い込まれていく。おや、と思った。ひよつとしたら、神様は私をこの教会に導こうとしておられるのかも知れない。しかし「だまされまいぞ」と、私は自分に言聞かせていた。

心のこもった愛餐会の後、片山家における役員会に導かれた。開口一番、私は「私はまだ白紙の状態です」と言っただ。きよとんとしている役員の方々を前にして、私は言葉が続けた、

「長男の信治は現在県立高校の一年生です。信治の道が開かれたならば、それを神様の御心と信じます」。

高校二年への編入はほとんど不可能である事が分かったのは、役員の方が送ってくださった高校入試の資料によってであった。

さて、それだけではその道が神の御心であるのかわからない。信治に相談すると、僕は高校だけでよいと言う。長女の裕子は、すでに聖和大学短大の保育科に入学していて寮に入っていた。高校だけなら普通高校よりも、技術を身につける高校の方がよい。私と員子は送られた資料を必死に検討した。

「私の戒めに心をとめよ、見よ、私は自分の思いを、

あなたがたに告げ、私の言葉を、あなたがたに

知らせる」(箴言一・二三)

神様、どうかあなたの思いを私たちに教えてください。知恵をお与えください。

日出教会を去る

日出教会を去る日まであと二ヵ月であった。私は歩いて近くの海辺に立っていた。一月の末なのに、海はすでに明るい光に包まれて、春の装いをしていた。私どもが日出を去ることを知らせた時、会員の皆さんがどんな顔をするだろうかと想像するだけで辛かった。

「何事も思い煩ってはならない。ただ事ごとに感謝を
もって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求める

ところを神に申し上げるがよい」(ピリピ四・六)

私は海辺を歩きながら祈った。その時強く示されたことは、八尾行きは神の導きであったということである。神の導きによって日出に赴任し、再び神の導きによって八尾に行くのである。私は日出教会での七年間、この神の導きによって歩み、そしてそのことを教会員にも熱心に説いたつ

もりであった。「神の導きによって」この一言で教会員は必ず納得するはずだと確信した。

次の聖日の礼拝の後で、私は重大な発表がありますと言った。教会員は何事だろうかと私の顔を見つめた。

「神の導きによって、私どもは八尾教会に赴任する事になりました。神様が行けとおっしゃるのですから、私どもはそれを拒むことは出来ないのです」。

一瞬、皆は驚きの表情を示した。そしてしばしの沈黙。

一人の姉妹が「ここを去られるのですか」と言つて、立つたまま泣きはじめた。

私は少なからず動揺した。教会員に対する情と神に従わんとする決意の板挟みになって心を痛めた。しかし、この情に流されては信仰の力強い歩みをする事は出来ない。

私は言葉を続けた、「神様は必ず良き牧者をこの教会に与えられます。なぜなら八尾に行けとおっしゃったお方は、残された教会に責任を持たれないはずはないからです」。

皆は少しづつ落ち着いてきた。そして八尾教会の状況等の質問をし始めるのであった。私はこれまでのいきさつを順を追つて話した。教会員は納得したのかしなかつたのか、私にはわからないままに家路についた。

一週間ほどして小林先生から電話があつた。「日出教会の後任として尾堂拓哉先生を推薦しました。彼は承諾しました。先生の後輩です」。

やはり小林先生は後任のことについて責任を感じておられたのであつた。地方教会では、牧師が与えられるかどうかが大変重要な問題なのである。誰も赴任する事が出来なかつた教会に私が来た。そしてまたこの教会に来る人が与えられたのである。

八尾に行く事が決まつてから、すべての集會がお別れの會となつた。四ヶ所で行われていた家庭集會、山香町での出張伝道の集會、教会の礼拝、祈祷會、早天祈祷會で、私は新しい牧師を迎える教会の姿勢は、何よりも暖かい配慮であるべきことを説いた。八尾に来てから聞いた話であつたが、後任の尾堂牧師は若くてチヨビ髭で髪はパーマであり、始めはどこかのヤーさんが来たのかと思つたそうである。しかし人は見かけによらぬもの、彼の牧會はまことに行き届いていたものであつたとのことである。

八五年三月三日に大分地区牧師會の送別會、十三日に大分県点字図書館でのお別れ會、二八日児童施設栄光園での送別會と続く。牧師が移動する時、何といつても一番の荷

物は図書である。私は残していくもの、持っていくものを整理してボール箱に詰める作業を続けていた。

引越し荷物をまとめる場合、書類はこの部屋、食器はあの部屋、寝具は〇〇とまとめて梱包しておかないと、後で大変な事になる。八尾教会の牧師館は一階が二部屋と台所、トイレ、風呂場、二階が二部屋であることは知っていたが、部屋が何畳であるかは分からない。私どもが日出を去る日は三月三十一日（日）の夜の船と決めていたので、ちようど三十一日の聖日礼拝が終わった頃、荷物が届くように計画を立てた。なぜなら荷物を運び入れる人手があるからである。その荷物に部屋の印を付けておいたら大助かりと考えた。八尾教会の方々には申し分ないが、こうする事によって、赴任後直ちに活動出来ると考えていたからであった。私は阿部兄に牧師館の見取り図を書いて送ってほしいと依頼した。数日後阿部兄から図面が送られてきたが、それは建築設計士が画くような見事な図面であった。この図面によって私どもは次々と荷物の梱包を始め、それぞれに入れるべき部屋の印を付けていった。

出発二週間前に船の予約を取りに別府港に行った。移動

期であるのに、運よく四人が一部屋に入れる二等のベットの部屋の切符を手に入れることが出来た。次に荷物運送の予約である。日出の運送店に行つて掛け合うと、八尾まで十二万円との事で一応予約しておいた。二三日して赤帽運送店が来て、八尾まで十万円ですよという。私どもが八尾に行く情報をどこで手に入れたのであろうか。人口二万の小さな町では、小さな出来事でもすぐに知られてしまうのであろう。

私は早速予約しておいた運送店に行つて、赤帽は十万円ですべてくれると言うと、店主はそれなら仕方がないと言つて十万円にしてくれた。私は喜界教会時代にシャツを値切つて買つて員子に叱られたことを思い出して苦笑した。

時は教会暦で受難節に入つていた。出発一週間前の礼拝説教題は「すべてが終わつた」（ヨハネ十九・三十）であった。そして三十日（土）に運送店の車が来て、教会員の手を借りて荷物の積込みを終え、その夜は日出に置いて行く車で別府に行き、一家はビジネスホテルに宿泊した。聖和に在学中の裕子は春休みで日出に帰っていたのである。

翌日はいよいよ三月三十一日（日）、最後の聖日礼拝、そし

て、それに続く教会の送別会である。

辛い思いで早めに別府を出たが、教会に着くと、ほとんどの教会員が会堂の席に着いて、私どもを待っていた。最後の説教は「また会う日まで」（第二テモテ四・一〜八）であった。

送別会では、婦人会の方々が心尽くしのちらし寿司を作ってくださっていた。昼食後最後の思い出話となり、七年間の私どもの労をねぎらってくださった。一人の姉妹はつけ睫毛が取れるから泣くまいと思っていたのに、とうとう泣いてしまったといつて涙を流された。私どもが日出に赴任した時、皆泣いてくださった。そして送別の今、また多くの方が涙を流して別れを惜しんでくださったのである。悲しいから見送りには来てくれるなどお願いしていたのに、別府国際観光港には数十名の教会員が行んでいた。別れのテープが何本も張られ、一万屯のサンフラワー号は静かに八尾へと向かっていった。「神ともにいましてゆく道をまもり……」、讚美歌四〇五番の歌声がだんだん遠ざかり、私の頬には涙がとめどなく流れていた。

第六章 八尾教会へ

瀬戸内海航路のサンフラワー号にはあらゆる設備が整っていた。大食堂、喫茶室、売店、ゲームセンター、浴場、それに各種自動販売機等である。家族四人は先ず大食堂で食事をした。セルフサービスで各々が好きな料理や飲み物を盆に乗せてテーブルに持っていく。多種多様な料理であるが、少々高いのが難であった。しかし滅多にないチャンスなので、思い切つて皆で好きなものを好きなだけ頂くことにした。

瀬戸内海はいつも静かである。鹿児島から喜界への外海とは比べものにならない程の風であった。食後しばらく船内をうろろしてベットに横たわったが、なかなか寝付かない。喜界教会への赴任の時もそうであったが、新しい任地へ赴く時には当然心が高ぶるものである。やがてとうとうと眠りにつき、目が醒めた時には夜明けの薄明りの中にいた。下船予定の神戸港も間近い。顔を洗い、そわそわと荷物をまとめて船のデッキに立つ。私はこれから生活が始まる関西の街並を、不安と期待の思いを持って眺めていた。やがて船は接岸し、私は家族と共に通い慣れた道を通

つて国鉄の「もとまち」から電車に乗った。

一九八五年四月一日(月)朝、私たちは国鉄八尾の駅頭に立った。いよいよ新しい地での活動が始まるのである。教会に着くと、婦人会の方が暖かく出迎えて下さった。私以外はもちろん初対面である。ご婦人が私どものために食事を準備してくださった。心からのもてなしであった。あの時の手料理の美味しかったことは、今でも忘れることは出来ない。



八尾教会歓迎会 (一家全員)

裕子は聖和の寮に入っていたので、信治は二階の西側の部屋、私と員子の居間は階下の東側の六畳、そして二人の

寝室は西側の八畳に決めてあった。壁は新しく塗り替えられ、襖も張り替えてあった。八尾教会の方々の私たちに對する配慮に心が熱くなる思いであった。荷物は各々の部屋にちゃんと入れてくださっていた。早速荷物をほどこき、整理を始めた。タンスや本を入れた箱を各々の部屋に入れるのは大変だっただろうと、八尾教会の方々の奉仕に心から感謝する。私どもは運ばなくても良いので、次々に所定の場所に荷物を納めていく。牧師館も会堂も最近では珍しい土の壁であり、新建材でない昔ながらの木材が使われていた。会堂は私どもが赴任したどの教会堂よりも広かった。会堂脇にCSの教室が四つもあるのに驚く。そしてまたホールの広いこと。おまけに図書室には、これからの研究に役立つと思われる図書がぎっしりと詰まっている。会堂には二階に広い部屋があった。そこには立派なテレビとビデオがあるではないか。貧しくてビデオなど使用する事の無かった私は小躍りをして喜んだ。夕刻おだやかな顔の恰幅のよい壮年の方が来られて、少し寒いですねといわれ、灯油を手配して石油ストーブを入れてくださった。

四月の初め、時は受難週であった。受難週は水曜日と受難日の金曜日に早天と夜の祈祷会が行われる。いよいよ私

の出番である。

牧師館の庭には十字の形の池があり、小さな藤の木が育てられていた。私は藤の若葉がやわらかく光るのを眺めながら、今の幸せを思い、神の妙なる導きを心から感謝するのであった。

「あなたがたの切りだされた岩と、あなた方の

掘りだされた穴とを思い見よ」（イザヤ五一・一）

主イエスに出会ってから、私の生涯は悲しみから喜びへと変えられた。ハレルヤ！



牧師室でくつろぐ
（「牧師室から」はこの部屋で書き綴った）



アトラクション（八尾教会ではこんなこともした—皆んな拍手した！）

編集後記

◎ 今から四四年前（昭和二六年）のある早天祈祷会に、二人の若い兄妹が出席した。兄の方は顔はニタニタ笑っているが、目はギラギラと光っていた。これは、東俊郎師が初めて教会の門を叩いた時の榎本先生の印象です。

◎ 人生に行き詰まっていた青年が主に出会い、変えられただけではなく、主の福音を伝える器として召され、さまざまな苦難のうちに、いよいよ主の愛を知り、信仰が深められていく様は、私たちに大きな励ましを与えてくれます。

◎ それはまた、八幡前田教会で播かれた福音の種が東先生を通して各地に広がり、多くの実を結んだ証詞でもあると思います。

そういう意味で、初めての「ぶどうの木」特別号としてふさわしいものとなりました。

発行 一九九五年十一月

発行者 北九州市八幡東区前田一丁目一〇―三

基督伝道隊 八幡前田教会

牧師 榎本利三郎

☎ 〇九三―六七―一三三八六

編集者 「ぶどうの木」編集委員会